



Title	西フリジア語の文法構造：動詞（8）
Author(s)	清水， 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要， 112， 1-103
Issue Date	2004-02-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34061
Type	departmental bulletin paper
File Information	112_PL1-103.pdf



西フリジア語の文法構造 — 動詞 (8) —

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk
— tiidwurd (8) —

(*The Annual Report on Cultural Science* (No. 112). Graduate School of
Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan 2004. ISSN 1346-0277)
SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit. let. hokudai. ac. jp)

§ 94 不定詞 (de ynfinityf, de nammefoarm) : 概観

§ 68 (3)で述べたように、西フリジア語には3種類の不定詞がある。「第3不定詞 (命令形不定詞)」は形態的には命令形と同形であり、歴史的にも関係があるが、命令の意味はなく、今日では不定詞の一種とみなすのが適当である。「第2不定詞 (en-不定詞)」は「動名詞 (it gerundium)」とも言い、歴史的には変化語尾を伴った不定詞、すなわち「屈折不定詞」であるが、かつて現在分詞だったものも一部で加わっている。不定詞に3種類あることは北フリジア語でも同様である。第1不定詞 (e-不定詞) と第2不定詞 (en-不定詞) の区別はフリジア語群すべてに共通しており、用法上の区分も本質的に同一である。これは他のゲルマン語と比較して顕著な特徴と言える。語形とおおまかな用法は§ 68 (3)でも述べたが、以下に繰り返す。

(a) 第1不定詞 (e-不定詞)

① 語形

不定詞語幹 + {-e/-je/-n} : sile「帆走する」(e-動詞)/tankje「感謝する」

(je-動詞)/jaan「与える」(n-動詞)

② 用法

無標の不定詞であり、辞書の見出し語でも動詞はこの語形で示される。

文中の統語的役割を担わずに、単独で用いることがある。

話法の助動詞、使役の助動詞、代動詞 dwaan(オ. doen/ド. tun/エ. do)などと用いる。

名詞用法で用いるが、統語的には動詞としての性格を保っている。

- ☞ 19世紀の西フリジア語の辞書や語彙集には見出し語に第2不定詞(en-不定詞)の語形が用いられたことがあった。これは不定詞が-enで終わるオランダ語やドイツ語の影響と考えられる(Hoekstra 1997: 1)。

(b) 第2不定詞(en-不定詞, 動名詞)

① 語形

不定詞語幹+{-en/-jen/-n}: silen/tankjen/jaan

ただし, ha/hawwe「持っている」の第2不定詞はともに hawwen であり, *han ではない。

② 用法

名詞用法で用いるが、この用法では第1不定詞よりも名詞的性質が強い。知覚動詞構文のほかに、アスペクト動詞 bliuwe/geanなどと複合動詞的に用いる。

不定詞標識 te(オ. te/ド. zu/エ. to)を伴って種々の用法で用いるが、te-第2不定詞はteを伴わない第2不定詞と性格を異にする点が多く、別に扱う必要がある。また、te-第2不定詞は後述するように、すべて同一ではなく、いくつかのタイプに分かれ、統語的に多様な性格を示す。

- ☞ 第2不定詞を it gerundium「動名詞」のほかに、de doelfoarm (doel「目的」+ foarm「形式」と呼ぶことがあるが、「目的」という名称は第2不定詞の用法の一部分を指すにすぎず、適切とは言いがたい。

また、東部の方言では標準語の ha/hawwe「持っている」は ha だが、第2不定詞の語形もつねに ha (te-第2不定詞も te ha のみ) であり, jaan「与える」などの「n-動詞」と同様に第1不定詞と同形である。

(c) 第3不定詞（命令形不定詞）

① 語形

不定詞語幹＋{-Ø/-je/不規則}：syl/tankje/jou

命令形と同じ語形を示す。

② 用法

並列型構文と従属型構文に分かれる。くわしくは後述。

第2不定詞(en-不定詞)に相当する動名詞はかつてはドイツ語やオランダ語にも存在した。両言語ともに、かつての動名詞は与格支配の前置詞 *ド*. *zu* (<*ze*) / *オ*. *te* (*エ*. *to*) に支配された動詞の名詞的な格変化形である。ドイツ語では、古くは *-en* で終わる不定詞(*ド*. *Infinitiv*)にたいして、動名詞(*ド*. *Gerundium*)は *-en(n)e* で終わり、末尾音の *-e* が中性単数与格語尾だった。その後、さらにあいまい母音の語末音消失が起こって *-e* が消失し、ともに *-en* となって両者の形態的区別は失われ、両者は単一の不定詞に合流した。オランダ語でも今日、ドイツ語と同様に不定詞はすべて *-en* で終わる1種類しかないが、標準語では無アクセント音節末の *-en* の *-n* は発音上、脱落して *-en* [ə] となるので、*-en* と *-e* の区別は不可能である。したがって、第1不定詞(=不定詞)と第2不定詞(=動名詞)の形態的な相違は存在し得ない。

西フリジア語では、古フリジア語以前の段階で語末音消失の結果、かつての不定詞の末尾音 *-an* の *-n* が消失し、さらに *-a* > *-e* [ə] という弱化が起こって、今日の第1不定詞(*e*-不定詞)に至っている。

一方、第2不定詞(en-不定詞)は二つの異なる起源にさかのぼる。まず、ドイツ語とオランダ語と共通に、かつての動名詞は与格支配の前置詞 *て* (*ド*. *zu* / *オ*. *te* / *エ*. *to*) に導かれ、末尾音 *-en* の *-n* は前置詞 *て* に支配された名詞の中性単数与格語尾の名残りである (*-ande* > *-en(e)* > *-en*)。もうひとつは、古フリジア語の現在分詞に由来するもので、*-and* > *-en(d)* > *-en* という変化の結果、動名詞と合流して現在の第2不定詞(en-不定詞)になった。名詞用法や *て*-不定詞は前者に由来し、知覚動詞構文やアスペクト動詞 *bliuwe* (*オ*. *blijven* / *ド*. *bleiben*) / *gean* (*オ*. *gaan* / *ド*. *gehen* / *エ*. *go*) や *hawwe* (*オ*. *hebben* / *ド*. *haben* / *エ*. *have*) / *fine* (*オ*. *vinden* / *ド*. *finden* / *エ*. *find*) などと用いる用法は後者に由来する。

この二つの異なる起源は、今日の第2不定詞の性質を考察する上で示唆的である。かつての動名詞に由来する前者の第2不定詞は強い名詞的な性格を有し、名詞用法において動詞的性格の強い第1不定詞と区別される。一方、現在分詞に由来する後者の第2不定詞は名詞的性質とは無縁で、動詞的な性質を強く示す。したがって、知覚動詞構文やアスペクト動詞 *bliuwe/gean*, それに *hawwe/*

fine などと用いる第2不定詞は、名詞用法の第2不定詞とは区別して分析する必要がある。また、知覚動詞構文で現われる第2不定詞と話法および使役の助動詞で現われる第1不定詞のあいだには、動詞的性質の相違は本質的に存在しないと考えられる。問題は *te*-第2不定詞であり、名詞的な起源を持つが、後述するように、いくつかの統語的に異なるタイプに分類され、すべてが名詞的性質を強く示すとは限らない。これは *te* の不定詞標識的性質とかつての前置詞的性質の残存に関係している。

なお、西フリジア語には英語の動名詞 (-ing) に相当する語形は存在しない。*-ing* は動作名詞を派生する接尾辞である (*opliede*「教育する」→ *oplieding*「教育」)。西フリジア語の第2不定詞すなわち動名詞は、英語の動名詞とは用法が完全には一致しない。また、英語の不定詞が *to* を伴わなければ名詞的に用いることがほとんどない点も、西フリジア語の第1不定詞とは異なる。

§ 95 第1不定詞 (e-不定詞, *de e-ynfinityf*)

第1不定詞 (e-不定詞, 以下省略) を話法・使役の助動詞とともに用いる用法は§ 76 から§ 79 で述べた。以下では残りの用法について説明する。

(1) 名詞用法

(a) 第1不定詞単独の場合

第1不定詞は名詞的に用いて、主語・コプラ動詞 (連結詞) の叙述語 (エ, predicate) としての統語的な役割を担う (第2不定詞との相違については, § 96(2)参照)。

Jeie is hûnenatuer. 「狩りをするのは犬の習性である」(ULI'S, C 7: 29)
De iennichste manier om der efter te kommen hoe't it sit is harkje en freegje. 「それがどうなっているかを探り出す唯一の方法は、聞き取りと質問をすることである」(De Boer 1986: 44(W)変更)

It is bûge of barste. 「曲がるか折れるかだ (=折れるより曲がったほうが良い; 柳に雪折れなし。ことわざ)」(Dykstra 2000: 1150)

Better bûge as barste. 「折れるよりも曲がったほうが良い (=柳に雪折れなし。ことわざ)」(ib. 1150)

☞ この点で西フリジア語の第1不定詞はオランダ語やドイツ語の不定詞と似て

いる。一方、英語の不定詞はこの用法では to を伴い、それ以外では -ing を付加して動名詞として用いる必要がある。

- ☞ Visser (1989b) は第 1 不定詞を動詞の目的語として用いるのは好ましくないと述べている。本稿で収集した用例でも *neame* 「…を…と呼ぶ」の「…と」の部分に相当する目的補語の例がなく、典型的な他動詞目的語とは言いがたい。*Rasjonalisearje* *neamt de baas dat*. 「合理化と上司はそれを呼んでいる」(ULFS, C 13: 13 変更)

Visser (1989b) はまた、第 1 不定詞を前置詞の目的語として用いることはまったく不可能であると述べている。本稿で収集した用例にも、この例はひとつもない。したがって、本稿ではこの用法を通常の用法として認めることを控えることにする。

以上の制限が生じる理由として、De Haan (1986) や Hoekstra (1997: 9) は第 1 不定詞が名詞的性質の強い第 2 不定詞と競合するためと説明している。両者は Visser (1989b) の意見とは異なって、第 1 不定詞は原則としてどの名詞的文成分にも用いることができるが、第 2 不定詞との競合によってその実現が制限されると主張している。つまり、動詞や前置詞の目的語として用いる場合、不定詞単独では第 2 不定詞が可能なために、第 1 不定詞はきわめて制限されるが、目的語や副詞成分を伴って不定詞句を形成する第 2 不定詞はほとんど用いないので、第 1 不定詞は制限を受けず、広く用いることができることになる。

もともと歴史的に第 2 不定詞は与格形に由来し、もっぱら主格以外に用いていた。このことから、第 1 不定詞を主格やコプラ動詞(連結詞)の叙述語以外に用にくい理由も理解できるように思われる。

(b) 第 1 不定詞句を形成する場合

第 1 不定詞は目的語や副詞成分などを伴って不定詞句 ([]) で示す) を形成する場合にも、名詞句相当の文成分として用いる。

① 主語・コプラ動詞(連結詞)の叙述語

[*Heit wurde*] *is in geunst*, [*heit wêze*] *in hiele keunst*. 「父親になることは天の恵みであり、父親であることは大変な技である」(Zantema 1984: 387)

[*Nei in dokter ta gear*] *betsjut meastentiids earst in skoft yn de wachtkeamer sitte*. 「医者にかかることは、たいていまずしばらく待合い室ですわっていることを意味する」(ULFS, C 6: 28)

[*Nei Mokerheide ferfarre*] *is in minne saak*. 「モーケルハイデに船で

行くのは良くないことだ」(Popkema 1987: 52)

次の文は表面的には動詞 *is* (← *wêze* 「…である」) を欠いている。

Better [twā kear *freegje*] as [ien kear bjuster *reitsje*]. 「一度道を間違えるよりも二度たずねるほうが良い(ことわざ)」(Beintema 1990: 19)

② 動詞の目的語

Nei in dokter ta gean betsjut meastentiids [earst in skoft yn de wachtkeamer *sitte*]. 「医者にかかることは、たいていまずしばらく待合い室ですわっていることを意味する」(ULI'S, C 6: 28)

Ik kin [moarns betiid in kâlde dûs nimme] net ien oanriede. 「私は朝、冷たいシャワーを浴びることは人に勧められない」(動詞の目的語)(Hoekstra 1997: 9)

③ 前置詞の目的語

Ik haw it mier oan [moarns betiid in kâlde dûs nimme]. 「私は朝、冷たいシャワーを浴びることは辟易(へきえき)する」(前置詞の目的語)(ib. 10)

(c) 枠越え

前置詞句が「枠越え」を起こして第1不定詞が先頭に置かれることもある。

[*Reizgje* mei it iepenbier ferfier yn Fryslân] betsjut hjoeddedei [*reizgje* mei trein of bus]. 「公共の交通手段でフリースラントを旅行することは、今日では列車かバスで旅行することを意味する」(ULI'S, C 18: 7)

(2) その他の用法

(a) 単独での用法

第1不定詞(句)は文中での統語的な役割を担わずに、単独で発話するときにも用いる。

Hy : Ik ha in protte freonen en freondinnen. Ik soe gjin fêste relaasje mear ha wolle leau 'k. Dêrfoar ha 'k al te lang frijgesel west.

Sy : Mar altyd allinne, allinne *ite*, allinne *sliepe*...

Hy : Dat ha 'k net sein...

彼 : 「ぼくには男の友人も女の友人もたくさんいるからね。身を固めたいと思うことはもうないと思うよ。それにはもう独身生活が長すぎた」

彼女 : 「でも、いつもひとりで、ひとりで食事をして、ひとりで寝て…」

彼 : 「そう言ったわけじゃないけど…」 (Bangma 1993²: 10)

Fan in buorren is yn Beets neat te finen. De Beetsters wenje ferspraat troch it fjild, wêr't it wurk is: turf *meitsje*. 「村の中心というものは何もベーツでは見られない。ベーツの住民は仕事—すなわち、泥炭を掘ること—がある野原一帯に散在して居住している」 (ULI'S, B 2: 15)

(b) 主文相当の発話文と発話内効力

このほかに、第1不定詞(句)は主文に相当する発話文として用いることがある。この場合、命令・疑問・感嘆などの発話内効力(エ, illocutionary force)をもつ。なお、以下の用例で人称代名詞主格形(do「君, おまえ」, ik「私」)は義務的ではなく、なくてもかまわない。

Thúskomme sa't jim fuortgean! 「酔っ払って帰ってくるんじゃないよ(=おまえたちはでかけるときと同じように帰宅するんだよ。親が若者に向かって)」 (Zantema 1984: 1045)

“Do hoechst dyn sean aai ek net tink?”—“Ho, ho, *ôfbliuwe* do. Dêr moat ik my noch op beriede oft ik dy nim of net.” 「あなたはゆで卵もいらないんでしょうね」「えー, ちょっと待ってよ。もらうかどうかちょっと考えてみないとね」 (Bangma 1993²: 128)

Jûn! *Sjonge* do ek yn 'e kroech, Klaas? Ja, do hast it no wol oan tiid! 「やあ(=今晚は)。おまえも飲み屋で歌うのか, クラス。そうだ, おまえは今, 時間があるよな」 (ULI'S, C 13: 14)

Do *autoride*?! 「おまえが車の運転をするんだって?!」 (Hoekstra 1997: 3 変更)

Werom ik in paraplu *meinimme*? 「なんでおれが傘, 持っていかなきゃだめなんだ」 (ib. 3)

☞ 「te+en-第2不定詞」にも同様の用法があるが、この場合は人称代名詞主格形を用いることはできない。

{*Do/Ø} dat skoandere jild samar *wei te griemen!* 「おまえがあの大金をすっちゃもうとはねえ」 (ib. 3)

Wêrom {*ik/Ø} in paraplu *mei te nimmen?* 「なんでおれが傘、持っていかなきゃだめなんだ」 (ib. 3)

(c) 話題化と代動詞 dwaan

話法の助動詞（客観的用法，ド．subjektiver Gebrauch, root modal）に支配された第1不定詞は、言語使用上の理由で前域に移動して話題化することができる。

Rinne kinne se net mear, altyd mar *fytse*. 「歩くことは彼らはもうできない、いつでも自転車に乗ることだけだ」 (ULI'S, A 18: 8)

第1不定詞は「する」という一般的な動作の意味を表わす代動詞 *dwaan* (オ．doen/ド．tun/エ．do) で置き換えることができる。

Reedride mochtst ek sa graach *dwaan*. 「スケートも君はするのがとっても好きだったよね」 (ULI'S, A 19: 7)

代動詞 *dwaan* を定動詞にして第1不定詞を前域に置けば、話法の助動詞がなくても、前域に移動した第1不定詞の意味を引き継いだ話題化の表現にすることができる。

Ite dogge wy alle dagen. 「食べることは私たちは毎日します」 (ULI'S, C 3: 14 変更)

Hearre docht men mei de earen. *Prate docht* men mei de mûle. 「聞くのは耳です。話すのは口です」 (Bangma 1993²: 56)

Lêze docht elkenien dy't lêzen leard hat, ðf yn in boek ðf yn in krante ðf op 'e televizje. 「読むのは、本か新聞かテレビかで読むことを習った人はだれでもする」 (ULI'S, B 16: 9 変更)

Sliepe dogge se yn in soarte fan bakken mei strie. 「寝るのは人々は藁が入った一種の桶の中でします」 (ULI'S, B 2: 15)

dwaan は第1不定詞が動作主を前提とする意図的な動作の意味でなくても用いることができる。したがって、「…する」だけでなく、「…になる」と

訳される場合もある。

Him ferfele die er nea. 「退屈するのは彼はなった (=した) ことがない」 (Bosma-Banning 1981²: 39)

第1不定詞は *dwaan* とともに次のような強調表現の構文 (dat-従属文) でも用いる。

Flokke, dat er die. 「あいつは悪口を言ったことったらなんの」 (Zantema 1984: 209)

dwaan は「動詞+en+*dwaan*」のように動詞と並列させて強調表現として用いることもある (§ 78 (2)(i))。

It reint en docht de hiele dei. 「一日中、雨が降りしきっている」 (Zantema 1984: 209)

dwaan は第1不定詞だけでなく、第1不定詞句を代用することもできる。

[Nei Amsterdam ta gean] docht er net alle dagen. 「アムステルダムに行くのは、彼は毎日するわけではない」

この場合、話法の助動詞 (客観的用法) とは違って、*dwaan* で代用する第1不定詞そのものは省略できない。

[Nei Amsterdam ta Ø] kin er net alle dagen. 「アムステルダムに行くのは、彼は毎日できるわけではない」

**[Nei Amsterdam ta Ø] docht er net alle dagen.* 「同上」

dwaan は前域の第1不定詞 (または第1不定詞句) を代用するのであって、第1不定詞を支配する話法の助動詞とは性格が異なる。

Hy kin net alle dagen [nei Amsterdam ta Ø]. 「彼は毎日アムステルダムに行けるわけではない」

**Hy docht net alle dagen [nei Amsterdam ta Ø].* 「彼は毎日アムステルダムに行くわけではない」

dwaan は第1不定詞を代用するだけにとどまり、省略された第1不定詞を修復するような積極的な意味的役割は持たない。客観的用法の話法の助動詞は義務・可能・許可・意志などの固有の意味によって、実現されるべき動作を想定させる積極的な役割を果たすことができる (§ 97(10))。

(d) 指示代名詞による第1不定詞(句)の指示

第1不定詞を指示代名詞 *dat* (§ 41 (2)(a)) などで指して、代動詞 *dwaan* の目的語とする用法がある。

As jonge koest ek wol aardich *tekenje en skilderje*. *Dochst dat* ek noch wol? 「子供の頃、君は上手にデッサンをしたり絵をかいったりできただろう。今でもそれをするのかい」(ULI'S, A 19: 8)

En *swimme, diest' dat* ek? 「それに水泳は、君はそれもやったのか」(ULI'S, A 19: 7)

第1不定詞を梓構造の左側(=前)に外置(*de ekstraposysje*/エ. *extraposition*)して話題化し、指示代名詞 *dat* でそれを指示することがある。外置した第1不定詞は目的語や副詞成分を伴って不定詞句を形成することもある。

[*Sa'n bern mei in skerpe mes boartsje litte*], *dat docht* men doch net! 「そんな子供に尖ったナイフを持たせて遊ばせるなんて、それはいけませんよ」(Dykstra 1996: 72)

代動詞 *dwaan* 以外についても同様の表現が可能である。

Reizgje, dat hoecht fan my net. 「旅行、そいつはおれはごめんだ」(ULI'S, A 19: 7)

Ite, dat is mar in oanwenst, sei de boer, mar doe wie er sêd. 「食べること、それはたんなる悪癖さ、と農夫は言ったが、そのとき彼は満腹だった(成句)」(Beintema 1990: 67 変更)

外置した第1不定詞と前域を占める指示代名詞 *dat* は、その間に間投詞などが入って分離することがある。

Utfanhûzje, nee, dat liket my neat. 「外泊か、いや、それは私は好きではない」(ULI'S, A 19: 7)

外置した第1不定詞をアクセントをもつ「代名詞の *dêr*」(…前置詞) (§ 55 (1)(b)) で指示することもある。

Ja, *ferkeapje wolle, dêr tinke* sokken allinne mar *om*. 「そうだ、売りたい、そのことだけをそのような人たちは考えているんだ」(Bangma 1993²: 29)

En [*dagen yn 'e auto sitte*], *dêr* wurdst sa lêbich *fan*. 「それに、何日も車の中にすわっているのは、それはいやになるよ」(Bangma 1993²: 174 変更)

§ 96 第 2 不定詞 (en-不定詞, de en-ynfinityf, it gerundium)

第 2 不定詞はオランダ語やドイツ語には見られず、西フリジア語（あるいはフリジア語群）に特徴的であり、用法も広い。以下ではまず、名詞句相当の文成分としてはたらく名詞用法について第 1 不定詞との共通点と相違点を述べ、続いて他の用法を解説する。「te-第 2 不定詞」は§ 97 で扱う。

(1) 第 2 不定詞の名詞用法：第 1 不定詞との共通点と相違点

第 2 不定詞は第 1 不定詞と同様に名詞的に用いる。これはとくに名詞句目的語や副詞句を伴わない場合に当てはまる。この場合、第 1 不定詞と第 2 不定詞は主語・コブラ動詞（連結詞）の叙述語としての統語的役割において、ともに名詞用法が可能である。

{*Fersinne/Fersinnen*} is minsklik. 「間違えるのは人間的だ(ことわざ)」
(第 1 不定詞/第 2 不定詞) (Dykstra 2000: 1150 変更)

Utfanhûzje, nee, dat liket my neat. 「外泊か、いや、それは私は好きではない」(第 1 不定詞) (ULI'S, A 19: 7)

Utfanhûzjen is neat foar my. 「外泊は私には向いていない」(第 2 不定詞) (ULI'S, A 19: 19)

以下にいくつか第 2 不定詞の用例を挙げる。

Sprekken is sulver, *swijen* is goud. 「話すことは銀であり、黙っていることは金である (=沈黙は金なり。ことわざ)」(Dykstra 2000: 1152)

Sizzen is neat maar *dwaan* is in ding. 「言うことは価値がない (=何でもない)が、実行することは価値がある (=ひとつの事柄だ) (ことわざ)」
(ib. 1152)

As *dwaan* net doocht, is *litten* better. 「なすすべが無い (=行なうことができない) ときには、放っておくほうが良い (=人生あきらめが肝心。

ことわざ)」(Beintema 1990: 30)

Der is gjin minder wurk as *neat dwaan*. 「何もしないことよりも悪い仕事はない」(ULFS, C 13: 13)

Iten en drinken hâldt lichem en siel byinoar. 「食べることと飲むことは両方で体と心のバランスを保つ(=物事は片方だけではうまくいかない。ことわざ)」(Beintema 1990: 68)

Hawwen is *hawwen* en krijen is de keunst. 「持っていることは持っていることにすぎないが、得ることに技を要する(=技である)」(Dykstra 2000: 1151)

第1不定詞と第2不定詞には名詞用法で相違点もある。

(a) 動詞の目的語

第1不定詞ではこの用例はほとんど見られない (§ 95 (1)(a), (b)②と注を参照)。

Boargjen docht *soargjen*. 「借金苦の種/金を貸すのは心配のもと(ことわざ)」(Beintema 1990: 20)

Ik fyn *aaisykjen* moai. 「私は野鳥の卵探しはすてきだと思う」(ULFS, B 7: 21 変更)

(b) 前置詞の目的語

第2不定詞は前置詞の目的語として用いることができる。一方、第1不定詞ではこの用例はほとんど見られない (§ 95 (1)注)。

Dy wize fan *reizgjen* wie in kolossale ferbettering. 「この旅行方法は格段の進歩だった」(ULFS, B 18: 7)

Nei kofjedorinken geane se in eintsje te farren. 「コーヒーを飲んだ後で彼らは少し船に乗りに行く」(ULFS, B 18: 11)

Yn 'e rin fan 'e jierren ha in protte minsken har yn 'e stêd *nei wenjen* set. 「何年もの間にたくさんの人々が都市に移住した(=都市に住むように移動した)」(ULFS, C 11: 2)

De loft stiet *nei reinen*. 「雨が降りそうな空模様だ(=空は雨が降りそうだ)」(Zantema 1984: 645)

Ik haw no gjin sin oan fytsen. 「私は今、自転車に乗ろうという気持ちはない」 (Van der Veen/Oldenhof 1990: 46)

Doe't er by de twadde bocht stie te sjen, krige er ynienen sin oan swimmen. 「二つ目のカーブした場所を(立って)見ていると、彼は突然、泳ぎたい気持ちになった」 (Bosma-Banning 1981²: 61)

Yn 'e ûngetiid komme boeren en arbeiders amper oan sliepen ta. 「干し草作りの時期には農夫と出稼ぎ労働者はほとんど寝る暇がない」 (Zantema 1984: 1115)

次の文は慣用句 fan hearren (en) sizzen 「噂で」 (エ. from hearsay) の例である。

Fan hearren en sizzen liicht men it meast. 「聞き覚えで人はいちばん嘘をつくものだ (ことわざ)」 (Zantema 1984: 382)

(c) 名詞句との並列

一般に名詞用法では第2不定詞は第1不定詞よりも名詞的な性格が強い。(b)で示したように、前置詞が名詞句を支配するのもこのことを示している。また、次の文では第2不定詞と名詞句が並列されており、第2不定詞が名詞句と対等であることがわかる。

Utfanhûzjen en sterk iis moatte beide net te lang duorje. 「外泊と固い氷は両方とも必然的に長くは続かない (=喜びは長続きしない。ことわざ)」 (Beintema 1990: 137)

一方、第1不定詞は名詞句と対等であるほど名詞的な性格が強くない。たとえば、上の初めの文で第2不定詞 útfanhûzjen 「外泊(すること)」を第1不定詞 útfanhûzje で置き換えるのは不自然という判定がある。

(²) *Utfanhûzje en sterk iis moatte beide net te lang duorje.* 「同上」

次の文では、動作名詞の派生接尾辞 -ing による名詞を含む名詞句と第2不定詞が対等に並列されている (第2不定詞は定冠詞 it を伴っている)。

Hy is it sjen, de ferwûndering en it harkjen ferleard. 「彼は見ることに、驚くこと、そして聞くことを忘れてしまった」 (ULIS, C 9: 7)

(d) 目的語名詞句・副詞句の有無

第2不定詞が第1不定詞よりも名詞的性質が強いことは、動詞的性質が弱いということである。第1不定詞は名詞句目的語や副詞成分などを伴って不定詞句を形成するのにたいして、第2不定詞ではそれがほとんど見られない。目的語に相当する成分は(e)で示すように、「限定詞(中性定冠詞 *it* など)＋第2不定詞＋前置詞句」のように前置詞句で表現する。

**Segaren smoken is ferkeard*. 「葉巻を吸うのは良くない」(Hoekstra 1997: 10)

次の形容詞 *faker* 「より頻繁な」(*faak* の比較級)は副詞用法ではなく、限定用法である。

By faker lêzen fynt men iderkear der wer dingen yn, dy't earder oer de holle sjoen waarden. 「何回も読むと(=頻読な読書のさいに)、そのたびに以前は気づかなかった事柄をその中に発見する」(Stienstra 1982: 127 変更)。

このことは次の文で副詞 *altid* 「いつも」を用いることができないことからわかる。

**Altid smoken is ferkeard*. 「いつも喫煙することは良くない」(Hoekstra 1997: 10)

なお、(2)で述べる「限定詞＋第2不定詞」では、「名詞句＋第2不定詞」(動詞句型)も「名詞抱合を伴う第2不定詞」「第2不定詞＋前置詞句」(名詞句型)もともに可能であることに注意(*dat* 「あの(指示代名詞)」を定冠詞 *it* で置き換えても同様 (Hoekstra 1997: 101))。

① 名詞句＋第2不定詞 (動詞句型)

Dat segaren smoken is ferkeard. 「あの喫煙は良くない」(ib. 10)

② 名詞抱合を伴う第2不定詞 (名詞句型)

Dat segaarsmoken is ferkeard. 「同上」(ib. 10)

③ 第2不定詞＋前置詞句 (名詞句型)

Dat smoken fan segaren is ferkeard. 「同上」(ib. 10)

(2) 「限定詞+第2不定詞」と名詞句型構文/動詞句型構文

(a) 限定詞 (定冠詞 *it* など)+第2不定詞

第2不定詞には限定詞 (エ. determiner) がつくことがある。限定詞としてもっとも一般的なのは定冠詞中性単数形 *it* である。第2不定詞に定冠詞 *it* がつくと、名詞が既知の物事を示すのと同様に既知の動作を表わすが、名詞の場合と同様にそのニュアンスは微妙である。第1不定詞は限定詞を伴うことはできない。

De bern leare op skoalle {*rekkenjen/it rekkenjen/*it rekkenje*} en {*lêzen/it lêzen/*it lêze*}. 「子供たちは学校で計算と読みかたを習う」
(Bosma-Banning 1981²: 56 変更)

以下、①～③では定冠詞 *it* を伴った例を示す。

① 主語・コプラ動詞 (連結詞) の叙述語

It bakken hat syn leafde net. 「パンを焼くことは彼の意に添わない」
(Stienstra 1982: 71 変更)

It praten giet har maklik ôf. 「話をするのは彼女には簡単だ (=簡単に行く)」 (Van der Veen/Oldenhof 1990: 47)

It reinen hâldt mar oan. 「雨降りが続いている」 (Stienstra 1982: 92)

② 動詞の目的語

De duwel hat *it freegjen* útfûn. 「悪魔がたずねることを発明した (=相手がうんざりするほどしつこく質問する人にたいして冗談交じりに言う慣用句)」 (Beintema 1990: 30)

Do moatst *it smoken* oerjaan. 「君はタバコ (=喫煙すること) をやめなければいけません」 (Zantema 1984: 683)

③ 前置詞の目的語

By 't *aaisykjen* fûn ik in nêst mei in stientsje. 「野鳥の卵探しをしているときに、私は石の入った巣を見つけた」 (UL'S, B 8: 13)

De boer en boerinne hawwe *it drok mei 't melken*. 「農夫は男も女も乳しぼりに忙しい」 (UL'S, A 7: 8)

Ik wol net in wike ferskite *troch it reizgjen*. 「私は旅行で1週間と

もむだにしたくない」(Bangma 1993²: 174)

次例では第2不定詞が形容詞修飾語を伴っている。

Wy klagen *oer it lange wachtsjen*. 「私たちは長く待つこと (=長いウエイティング) に不平を言った」(lang 「長い」)(ULI'S, C 14: 15)

第2不定詞は定冠詞(指示代名詞)以外の限定詞を伴うことがある。以下、

④～⑥では所有代名詞、不定冠詞 *in*、否定冠詞 *gjin* を伴った例を示す。

④ 所有代名詞

所有代名詞は第2不定詞の主語に相当し、動作主の意味を表わす。

Syn learen wol net bot. 「彼の勉強ははかどらない」(Bosma-Banning 1981²: 56)

Hy krige tefolle oanslach mei syn fiskjen, dat ik koe der fierder net op ynfreegje. 「彼は自分の漁で手一杯になったので、私はそれ以上そのことについて問い正すことができなかった」(ib. 101)

Nei myn trouwen bin ik hjir kommen te wenjen. 「結婚してから (=私の結婚の後)、私はここに移り住んだ」(ULI'S, C 15: 18)

It berjocht fan Arne Spenter syn ferstjerren kaam foar syn freonen en kollega's ûnder de frisisten en germanisten folslein ûnferwachts. 「アルネ・スペンテルの死の知らせはフリジア語学者とゲルマニストの間で彼の友人や同僚たちにまったく予期せずして届いた」(Århammar/Hoekema 1979: 9)

⑤ 不定冠詞 *in*

Foar *in beskriuwing fan 'e distribúsje fan 'e perfekte helptiid*-wurden yn it Hollânsk ferwiis ik nei Kern (1912) en ANS (1984, 517-525) en foar *in besykjen* ta in ferklearring dêrfan nei Hoekstra (1984), Honselaar (1987) en Vikner & Sprouse (1998). 「完了の助動詞の分布の記述については Kern (1912) と ANS (1984, 517-525), その説明への試みについては Hoekstra (1984), Honselaar (1987) それに Vikner & Sprouse (1998) を参照することを私は勧めます」(Hoekstra 1997: 54)

⑥ 否定冠詞 *gjin*

Dat is *gjin dwaan*. 「それはするべきではない」 (WFT 4/1987: 204)

Der is *gjin dwaan mei him te hawwen*. 「彼とは付き合えない・やっていけない」 (ib. 205)

(b) 名詞句型構文: 「定冠詞 *it* + 第 2 不定詞 + 前置詞句」

定冠詞 *it* は第 2 不定詞が後続する前置詞句を伴う場合 ([] で示す) にもつく。これはふつうの名詞の場合と同様であり, 「名詞句型構文」と呼ぶことにする。前置詞は *fan* (オ. *van*/ド. *von*/エ. *of*) が多く, 目的語や主語などに相当する。

① 主語・コプラ動詞 (連結詞) の叙述語

[*It fallen fan de snie*] is in moai gesicht. 「雪が降るのは美しい光景だ」 (ULI'S, C 15: 17)

[*It skreauwen fan de fûgels*] klinkt nachts ûneinich weemoedich. 「鳥の鳴き声は夜には限りなく物悲しく聞こえる」 (ULI'S, B 20: 15)

[*It waaksen fan de beantsjes*] giet mar hurd. 「豆が大きくなるのはすこぶる速い」 (ULI'S, C 15: 17)

De ûntfolking fan it plattelân [*troch it weromrinnen fan de wurkgelegenheid yn 'e lânbou*] wie ta stilstân kommen. 「農業における雇用機会の後退による田舎の人口減少は止まった」 (ULI'S, B 8: 7)

It dêryn slagjen is ôfhinklik [*fan it oanslaan fan harren wurk by de minsken*]. 「それが成功するかは, 彼らの仕事の人々の心をとらえるかにかかっている」 (ULI'S, C 19: 22)

② 動詞・前置詞の目的語

[*It kwytreitsjen fan 'e auto*] is noch net sa maklik. 「自動車を駐車する (= 始末する) のはまだそれほど簡単ではない」 (ULI'S, A 4: 11)

[*Foar it ferbouwen fan in hûs*] moat de gemeente tastimming jaan. 「家の改築には自治体が認可を与えなければならない」 (ULI'S, C 8: 5)

Der is soms gâns ferskil [*yn it werjaan fan de feiten*]. 「事実の再現にはときには大きな違いがある」 (ULI'S, C 20: 5 変更)

Der wurdt dan ek in soad jild stutsen [*yn it sykjen* fan nije medisinen] en [*yn it ferbetterjen* fan al besteande]. 「それからまた新薬の開発と現行の薬品の改良に大金が投入される」(ULI'S, C 6: 9)

Allinne de skuonmakker hat it drok [*mei it meitsjen* fan haken en teanlearen]. 「ただ靴屋だけがかかとと靴ひもの製作に忙しい」(ULI'S, B 5: 10)

Wilens giet mem fierder [*mei it ree meitsjen* fan 'e iterstafel]. 「そうしている間に母は食事のしたくを続ける」(ULI'S, A 3: 10)

次の文は前置詞が *fan* 以外の例である。

[*It skriuwen yn kranten*] is net wurk fan elkenien. 「新聞に書くのはだれでもできること (=万人の仕事) ではない」(ULI'S, C 15: 28)

Plichten brocht [*it wenjen op in doarp*] ek mei. 「村に住むことは義務もまたもたらした」(ULI'S, C 11: 2)

(c) 動詞句型構文: 「定冠詞 *it* + 名詞句 + 第 2 不定詞」

第 2 不定詞が前置詞句目的語のかわりに、ふつうの動詞の場合と同様に直前に名詞句目的語や前置詞句目的語を伴うことがある。これを「動詞句型構文」と呼ぶことにする。

[*It dêryn slagjen*] is ôfhinklik fan it oanslaan fan harren wurk by de minsken. 「それが成功するかは、彼らの仕事の人々の心をとらえるにかかっている」(ULI'S, C 19: 22)

[*It ûnder 'e brûs aria's sjongen*] is syn wille en tier. 「シャワーを浴びながらアリアを歌うのは彼の熱的な快感だ」(Hoekstra 1994: 526)

Hoekstra (1997: 10) は次例のように、「限定詞 (*dat*) + 第 2 不定詞」では動詞句型構文と名詞句型構文がともに可能であるとしている。

Dat smoken [fan stoefe segaren]_{PP} is ferkeard. 「あの [強い葉巻を吸うこと] は良くない」(名詞句型) (Hoekstra 1997: 10)

⇔ *Dat [stoefe segaren]_{NP} smoken* is ferkeard. 「あの [強い葉巻の喫煙] は良くない」(動詞句型) (ib. 10)

Dat stoefe smoken is ferkeard. 「あの [激しい喫煙] は良くない」(名

詞句型；stoef「激しい」は形容詞の限定用法) (ib. 10)

⇔ *Dat stoef smoken is ferkeard.* 「あの [激しく喫煙すること] は良くない」(動詞句型；stoef「激しく」は形容詞の副詞用法) (ib. 10)

つまり、名詞用法では動詞的性格を示す第1不定詞にたいして、第2不定詞は強い名詞的性格を示すが、「限定詞+第2不定詞」は名詞的性格と動詞的性格をとともに示すことになる。

☞ ただし、本稿で収集した用例には動詞句型はあまり見られない。これは動詞的性質の強い第1不定詞との競合から、「限定詞+第2不定詞」が動詞的性質を示す動詞句型を取ることは稀であるためと判断される (§ 95 (1)(a)注)。

(d) 第2不定詞と同形の中性名詞

名詞用法の第2不定詞に名詞的性格が強いことは、第2不定詞と同形の中性名詞があることからわかる。この中性名詞の語形は第2不定詞に限られ、第1不定詞や第3不定詞(命令形不定詞)と同形であることはない。たとえば、iten「食事」という中性名詞(it iten, ド. das Essen)はite「食べる」の第2不定詞 iten (te iten, ド. zu essen)と同形であり、第1不定詞 ite や第3不定詞(命令形不定詞) yt とは語形的に異なる。以下、定冠詞 it をつけて示す。

it bestean「存在」(bestean「存在する」)

it betinken「意見、考え」(betinke「考える、熟考する」)

it fuortbestean「存続」(fuortbestean「存続する」)

it neiſten「デザート」(neiſte「デザートとして食べる」)

it oansjen「外観：尊敬、尊重」(oansjen「見つめる、尊敬・尊重する」)

it hâlden en dragen「態度」(jin hâlde en drage「振る舞う、態度を取る」)

対応する動詞の第2不定詞を欠く中性名詞もある。

it omtinken「注意、考慮」(*omtinke は存在しない)

it moarnsiten「朝食」/it middeisiten「昼食」/it jûn(s)iten「夕食」
(*moarnsite/*middeisite/*jûnstite という動詞は存在しない)

Yn 1988 fierde de Fryske Akademy [*it fyftichjierrich bestean*]. 「1988

年にフリスケ・アカデミーは創立 50 周年記念 (=50 年目の存続) を祝った」(Dykstra 2000: 49 変更)

It fuortbestean fan de skoalle stiet net mear yn 'e kiif troch de nije bern. 「学校の存続は新しく入って来る子供たちのおかげで (=新しい子供たちによって) もはや危機的な状況にはない」(ULI'S, B 8: 15)

It iten smakket my net. 「私は食事がおいしくない」(Bosma-Banning 1981²: 56)

Op in fjoer yn 'e midden wurdt troch ien fan harren *iten* makke. 「中央にある火の上でその人たちの中のひとりによって食事が作られる」(ULI'S, B 2: 15)

It iten fan de earme Fries bestie yn dy tiid út brij en bôle fan hjouwer mei wetter. 「貧しいフリジア人の食事は当時、カラスムギに水を混ぜたお粥とパンから成っていた」(ULI'S, B 3: 11 変更)

Yn koarte tiid hat dat *it oansjen* fan ús provinsje gâns feroare. 「短い時間の間にそのことは私たちの州の姿をまったく変えた」(ULI'S, B 9: 13)

As *neiiten* waard der faak sûpenmoallenbrij brûkt. 「デザートにはよく穀物入りの脱脂粉乳の粥が用いられた」(ULI'S, B 3: 11f. 変更)

nei myn *betinken* 「私の考えでは」

Ik bin fan *betinken* dat… 「私は…という考えです」

歴史的には、上記の名詞は第 2 不定詞のいくつかが使用頻度や他との語形との競合などの要因によって、語彙的に中性名詞として固定したものである。両者の区別は意味的なものであり、動作の意味が認められるときには第 2 不定詞、物事の意味では中性名詞と解釈できる。

用例によっては両者の区別が困難な場合もある。たとえば、次の用例では第 2 不定詞か中性名詞かの判定がはっきりしない。中性名詞 *iten* 「食事」は食事の内容、つまり、料理そのものを意味するほかに、食事という行為自体を意味することがあり、*ite* 「食べる」という動詞の第 2 不定詞とも解釈できるからである。

Ik drink kofje by it iten. 「私は食事のときにコーヒーを飲みます」
(ULF'S, A 3: 27)

Nei iten giet Klaas nei de hoeke om te sjen oft heit en mem der al oankomme. 「食事が終わると、クラスはお父さんとお母さんがもうそこへ着いているか確認するために納屋へ行きます」(ULF'S, B 18: 11)

次の用例では **jûnsite* 「夕食を食べる」という動詞は存在しないので、中性名詞 *jûn(s)iten* 「夕食」と解釈できる。*by it moarnsiten* 「朝食のときに」(Bangma 1993²: 127) も同様である。

Op woansdeitejûn nei 't jûnsiten komt mem mei in útstel. 「水曜日の晩、夕食の後に母はある提案を持ってやって来る」(ULF'S, A 4: 8)

⇒ オランダ語とドイツ語でも不定詞と同形の中性名詞が存在する。両言語には不定詞は1種類しかないので、語形的には区別がない。

フ. *it iten* 「食事」(*ite* 「食べる」)

オ. *het eten* 「同上」(*eten* 「同上」)

ド. *das Essen* 「同上」(*essen* 「同上」)

フ. *it moarnsiten* 「朝食」/*it middeisiten* 「昼食」/*it jûnsiten* 「夕食」(それぞれ語形的に対応する動詞は存在しない)

オ. なし (*het ontbijt* 「同上」)/*het middageten* (*de lunch*) 「同上」/*het avondeten* 「同上」

ド. なし (*das Frühstück* 「同上」)/*das Mittagessen* 「同上」/*das Abendessen* 「同上」

(e) 前置詞の残留

前置詞の章 (§ 61 (6)) で述べたように、西フリジア語ではオランダ語(代名詞の *daar*)と違って、代名詞の *dêr* (§ 55) を介さずに、前置詞の残留によって第2不定詞が前域に分離して現われることがある。これは限定詞の有無とは無関係に起こる。

① 定冠詞 *it* を伴わない用例

Loaiterjen kin de skoarstien net *fan* rikje. 「怠けていては (=怠けることで) 煙突から煙りは出ない (ことわざ)」(Beintema 1990: 88)

⇒ *Fan loaiterjen* kin de skoarstien net rikje. 「同上」(Zantema 1984: 582)

Kloklieden hie er gjin nocht oan. 「鐘突きには彼は愛着がなかった」
(ULI'S, B 12: 7)

② 定冠詞 *it* を伴う用例

[*It útjaan fan Fryske boeken*] is noait immen miljonêr *fan* wurden.
「フリジア語書籍の出版で大金持ちになった人はいない」(ULI'S, B 16:
10 変更)

③ 所有代名詞を伴う用例

Syn jaan is nimmen fet *fan* wurden. 「彼の施して金持ちになった人はいない (=彼はケチだ)」(Zantema 1984: 453)

第2不定詞以外に第1不定詞が現われることもある (Tiersma 1999²: 115, De Haan 1986, De Haan 1992, Visser 1989b)。

{*Praten/Prate*} hâld ik net *fan*. 「おしゃべりは私は好きではない」

その他の用例。

[*Oer sokke ûnderwerpen prate*] hâld ik net *fan*. 「そんな話題について話すのは私は好きではない」(Popkema 1987: 52)

(3) 知覚動詞構文 (ACI-構文)

第2不定詞は「…が…するのを {見る/聞く/感じる}」という意味の知覚動詞による「知覚動詞構文」で用いる。これは知覚動詞が第2不定詞とその主語にあたる名詞句目的語を伴って、「名詞句目的語+第2不定詞+知覚動詞」という「ACI-構文」(ラ. accusativus cum infinitivo)を形成することを指す。知覚動詞構文では英語のように現在分詞(-ing)を用いることはなく、第1不定詞を用いることもない。歴史的にこの第2不定詞が現在分詞に由来することは、§94の注で述べた。

(a) 知覚動詞の種類

① *sjen* 「見る, 見える」

Hy sjocht it skip farren. 「彼には船が航行するのが見える」(ULI'S, C 15: 17)

Ik sjoch de wolkens driuwen. 「私は雲が漂うのを見ている」(ULI'S, C

15: 18 変更)

Wy *seagen* de bus *oankommen*. 「私たちにはバスが到着するのが見えた」 (ULF'S, C 18: 23)

Ik *seach* har *swimmen*. 「私は彼女が泳ぐのを見た」 (Van der Veen/Oldenhof 1990: 47)

② *hearre* 「聞く, 聞こえる」

Ik *hear* de *fûgels sjongen*. 「私は鳥たちが歌うのが聞こえる」 (ULF'S, C 15: 18 変更)

Hy *hearde* jo *roppen*. 「彼はあなたが呼ぶのを聞いた」 (Bosma-Banning 1981²: 56 変更)

Wy *hearden* har by de *trep delkommen*. 「私たちには彼女が階段を降りてくる音が聞こえた」 (Boersma/Van der Woude 1980²: 75 変更)

③ *fiele* 「感じる」

Wy *fielden* de *flier triljen*. 「私たちは床が振動するのを感じた」 (ULF'S, C 15: 17 変更)

Wy *fielden* it hûs *skodzjen*. 「私たちは家が揺れるのを感じた」

Ik *fiel* de *spin krûpen*. 「私はクモが這っているような感じがする」 (Sitenstra 1982: 92)

Ik *fielde* de *bui oankommen*. 「私はにわか雨になる (= にわか雨が到着する) のを感じた」 (ib. 75)

Ik *fielde* de *miggen stekken*. 「私は蚊に刺された (= 蚊が刺した) ような気がした」 (ULF'S, C 15: 18 変更)

(b) 注意すべき用法

知覚動詞が命令形の例もある。

Sjoch dy jonge ris *draven*. 「あの男の子が走るのをちょっと見てみなさい」 (Bosma-Banning 1981²: 57)

不定詞句内の要素が話題化されて前域に置かれる例もある。

Asto in hynder hast, moatst alle dagen sturtwaskje, en *dat* *sjoch* ik dy _____ noch net *dwaan*. 「もし馬を飼えば, 毎日, 尻尾の掃除をしな

ければならないが、それはおまえがまだするとは私には思えない（＝おまえがする様子は目に浮かばない）」(ULI'S, A 4: 11)

Tink om ús foardielige oanbiedings. Hjoed in blomkoal foar f 2,75.
— Ferdeald! *Dy_i ha 'k _____* net *lizzen sjoen*, do? 「当店のお買い得商品をお忘れなく。本日はカリフラワーが2.75 ギルダーでございます。

— 何ですって。それが置いてあるとは思わなかったわ、ねえ、おまえ」
(Bangma 1993²: 85)

知覚動詞が右枠に置かれて第2不定詞と動詞群 (§ 99) をつくと、「第2不定詞＋知覚動詞」の語順になる。

De bern *kinne* dus net mear foar skoaltiid in baarch *slachtsjen sjen*.
「子供たちは、したがって、もう登校前に豚を屠殺するのを見ることはできない」(ULI'S, C 10: 7)

Ik *ha* him net *fuortgean sjoen*. 「私は彼が立ち去るのが見えなかった」
(ULI'S, B 18: 21)

I *ha* har juster noch in stikje *spyljen heard*. 「私は彼女が昨日、もう一曲演奏するのを聞いた」(Boersma/Van der Woude 1980²: 75 変更)

(c) 従属文を伴う場合との意味の相違

sjen/hearre は従属文を伴うと、知覚ではなく、「把握する，理解する，わかる」という認識の意味になることが多い。

Jimme moatte mar ris *sjen hoe't it komt*. 「君たちはそれがどういうことになるか、ひとまず見てみる（＝把握する）必要がある」(Dykstra 2000: 602 変更)

Ik *sjoch* no wol *dat ik mis wie*. 「私は自分が間違っていたことが今、よくわかりました」(ib. 602 変更)

Doe't de bern *hearden, dat se de oare deis frij hienen*, wiene se alhiel oerémis. 「子供たちはその次の日が休みだということを聞くと（＝聞いて理解すると），皆，興奮した様子だった」(Stienstra 1982: 23)

(d) *fernimme* 「感じ取る，気づく」

fernimme (オ. *vernemen*/ド. *vernehmen*) は知覚動詞構文を形成するこ

とがある。

Hy *fernaam* harren by de trep op *kommen*. 「彼は彼らが階段を上がって来るのに気づいた」 (Hoekstra 1999: 10 変更)

Hja *fernaam* ien by de reinpiip op *klatterjen*. 「彼女はだれかが雨樋を伝ってのぼって来るような気配がした」 (Hoekstra 1997: 33 変更)

ただし、これは *fernimme* が第 2 不定詞句に先行する場合に限られる。*fernimme* は右枠で直前の第 2 不定詞と隣接する位置に現われることはできない。

*Hy seit dat [er harren by de trep *delkommen*] *fernaam*. 「彼は彼らが階段を降りて来るのに気づいたと言っている」 (ib. 6 変更)

fernimme は直前の第 2 不定詞と動詞群を形成できず、他の知覚動詞と意味的に類似しているものの、統語的には完全な知覚動詞とは言いがたい。

(4) 第 2 不定詞+アスペクト動詞 (*bliuwe/gean*)

(a) まとめ

アスペクト (*it aspekt*) を表わす *bliuwe* (継続, エ. *durative*) と *gean* (始発, エ. *inchoative*) が第 2 不定詞を伴って、全体で一種の複合動詞を構成するものがある。第 2 不定詞の種類には制限が強く、身体的な姿勢 (ポーズ) を表わすほぼ四つの動詞, *stean* 「立っている」/*sitte* 「すわっている」/*lizze* 「横たわっている」/*hingje* 「掛かっている」に限られる。これを「姿勢動詞」(エ. *postural verb*) と呼ぶ。*bliuwe* では *libje* 「生きる」/*rinne* 「歩く」/*stykje* 「行き詰まる, 滞る」/*wenje* 「住む」が加わる。意味的にも, *sitten bliuwe* には「すわったままでいる」のほかに「留年する, 遅れている, (女性が) 婚期を過ぎている」という比喩的な意味が認められるように、語彙的な固定度が高く、生産性は低い。歴史的にこの第 2 不定詞が現在分詞に由来することは、§ 94 の注で述べた。

(b) 第 2 不定詞+*bliuwe* 「…したままでいる, …し続ける」

bliuwe (オ. *blijven*/ド. *bleiben* 「とどまる」) は第 2 不定詞のもつ状態の意味が継続することを表わす。

① {steane/sitten/lizzen/hingjen}+bliuwe

steane bliuwe 「立ちどまったままにいる，立ち続ける」

sitten bliuwe 「すわったままにいる；留年する，遅れている，（女性が）婚期を過ぎている」

lizzen bliuwe 「横たわったままにいる，残る」

hingjen bliuwe 「掛かったままにいる，長居する」

Toer en tsjerke moatte yn it doarp *steane bliuwe*. 「塔と教会は村に存続する必要がある」(ULI'S, A 20: 12)

Wy *wiene efkes steane bleaun*. 「私たちはしばらく立ちどまっていた」(ULI'S, B 18: 19)

Der *bliuwt* my wat yn 'e kiel *sitten*. 「私はのどに何かがつかえている」(Zantema 1984: 599)

Myn hier wol net *sitten bliuwe*. 「私の髪はなかなか落ち着こうとしない」(ib. 599)

Dat spul *bliuwt sitten*. 「その件はけりがつかない」(ib. 871)

Sa't de beam falt, *bliuwt* er *lizzen*. 「木は倒れたままで横たわる（＝人間の運命は死とともにものは呼び戻すことができない。ことわざ）」(Beintema 1990: 14)

Boppe it fêstelân fan Europa *bliuwt* wol hege druk *lizzen* yn it wykein. 「ヨーロッパ大陸の上空には週末，高気圧がとどまるでしょう」(Bangma 1993²: 113)

Der *is* in soad wurk *lizzen bleaun*. 「仕事がたくさん残ってしまった」(Dykstra 2000: 376)

② 他の第2不定詞+bliuwe

libjen bliuwe 「生き続ける」

rinnen bliuwe 「歩き続ける」

stykjen bliuwe 「止まったままにいる」

wenjen bliuwe 「住み続ける」

Hy hope dat er noch in skoftsje *libjen bliuwe* mocht. 「彼はもうしばらく

く生きていることを許されるようにと願った」(ULI'S, B 20: 10)

It skip *bliuwt stykjen*. 「船が進まない (=止まっている)」(ULI'S, C 15: 17)

Ik *bin yn it ferkear stykjen bleaun*. 「私は交通渋滞に巻き込まれた」
(Dykstra 2000: 669 変更)

Wy *bliuwe hjir wenjen*. 「私たちはここに住み続けます」(ULI'S, C 15: 17)

Wy *binne acht jier yn Frjentsjer wenjen bleaun*. 「私たちは8年フリエンチエル(オ・Franeker「フラーネケル」)に住み続けた」(ULI'S, B 11: 22)

(c) {*steane/sitten/lizzen/hingjen*} + *gean*

gean(オ・gaan/ド・gehen/エ・go「行く」)は第2不定詞のもつ状態の意味に至る動作および変化を示す。

steane gean 「立ち上がる」

sitten gean 「すわる, 腰を下ろす」

lizzen gean 「横になる, (風が) おさまる」

hingjen gean 「ぶら下がる」

Ik *bin hjir mar steane gien*, dan kin ik de skûtsjes moai sjen. 「私はここでちょっと立ち上がってみたので, それでヨットがよく見えます」
(ULI'S, B 11: 22 変更)

Sille wy *sitten gean*? 「すわりましょうか」(Bosma-Banning 1981²: 56)

Heit *giet yn in stoel sitten*, skuort de slûf iepen en begjint te lêzen. 「父はいすにすわり, 封筒を破って読み始める」(ULI'S, A 3: 10)

Wy *gean(e) op 'e stoel sitten*. 「私たちはいすにすわります」(ULI'S, B 15: 22)

Wy *binne krekt foar de televyzje sitten gongen*. 「私たちはちょうどテレビの前に腰を下ろした」(ULI'S, B 11: 23 変更)

De hûn *gyng lizzen*. 「犬は寝そべった」(Bosma-Banning 1981²: 56 変更)

As er oerein giet, draait alles foar him. Hy *giet* mar gau wer *lizzen*.
「起き上がると、彼は目の前がくらくらする(=すべてが自分の前で回っている)。彼はすぐにまた床についてしまう」(ULI'S, A 11: 6)

De wyn *gie lizzen*. 「風がおさまった」(Zantema 1984: 1190 変更)

De jonge *giet* hieltyd oan de knop fan de doar *hingjen*. 「男の子はいつもドアの取っ手にぶら下がろうとする」(ULI'S, B 15: 21)

西フリジア語ではオランダ語と違って、(第2)不定詞に上記以外の動詞は用いない。

オ. Het *gaat* regenen. 「(もうすぐ) 雨が降るだろう/(もうすぐ) 雨が降りだす」(Van der Woude 1971: 138)

フ. *It *giet* reinen. 「同上」

西フリジア語では「第1 不定詞+話法の助動詞 *sille/wolle*」/「*begjinne* (オ./ド. *beginnen*/エ. *begin*) + 第2 不定詞」などで表現する。

フ. It {*wol/sil*} *reine*. 「同上」

It *begjint te* reinen. 「同上」(Van der Woude 1971: 138 正書法変更)

It *giet op in* reinen. 「同上」(Tamminga 1973: 54)

次例も同様。

オ. Ik *ga* eens een lekker kopje koffie *zetten*. 「私はちょっとおいしいコーヒーでも入れようと思います」

フ. *Ik *gean* ris in lekker bakje kofje *setten*. 「同上」

Ik *sil* ris in lekker bakje kofje *sette*. 「同上」

Ik *set* ris in lekker bakje kofje. 「同上」(Van der Veen/Oldenhof 1990: 80; ULI'S, B 15: 13, 19, 22)

オ. Ik *ga* dat boek eens *lezen*. 「私はその本をちょっと読んでみようと思います」(Van der Woude 1971: 138)

フ. Ik {*sil/wol*} dat boek ris *lêze*. 「同上」(ib. 138)

西フリジア語では「*te*-第2 不定詞+*gean*」が「…しに行く」の意味になる (§ 97 (7)(a)注)。

オ. Hij *gaat* trouwen. 「彼はもうすぐ結婚する」

フ. Hy {**giet* trouwen/*sil* trouwe}. 「同上」

Hy *giet te* trouwen. 「彼は結婚届けを出しに行く」(Tamminga 1973: 54 変更)

オ. Ik *ga* vissen. 「私は釣りに行きます」(Van der Woude 1971: 138)

フ. Ik *gean te* fiskjen. 「同上」(ib. 138)

この意味には *gean* 「行く」を欠く「*te*-第2 不定詞+話法の助動詞」が対応す

ることもある (§ 97 (7))。

オ. *Ga je vandaag niet kaarten?* 「君は今日、トランプをやりに行かないか」
(ib. 139)

フ. *Silst hjoed net te damjen?* 「同上」 (ib. 138 正書法変更)

オランダ語の *blijven* と違って、西フリジア語の *bliuwe* は姿勢動詞など一部の動詞以外に、第2不定詞とともに用いることはできない。

オ. *Het blijft regenen.* 「雨が降り続けている」 (ib. 1971: 141)

フ. **It bliuwt reinen.* 「同上」

bliuwe に「{*oant* 't (または *it*) + 第2不定詞/*te* + 第2不定詞}」を加えて表現することもできる ((8)(e))。

フ. **Ik bliuw noch in oerke timmerjen.* 「私はまだ1時間は大工仕事をやり続けるつもりだ」 (Van der Veen/Oldenhof 1990: 81)

Ik bliuw noch in oerke oan it timmerjen. 「同上」 (ib. 81)

Ik bliuw noch in oerke te timmerjen. 「同上」 (ib. 81)

(d) 第2不定詞を伴うその他の動詞

アスペクト動詞のほかに、慣用句の「第2不定詞＋動詞」の例を挙げる。

blikan dwaan 「わかる、明らかになる」 (*blike* 「明らかに…である」)

immen kennen leare 「…と知り合いになる」、*inoar kennen leare* 「互いに知り合いになる」

Dat hja ryk wie docht wol blikan, want hja hie sân pleatsen yn eigendom. 「彼女が金持ちだったということはよくわかる。七つ農場を所有していたからだ」 (ULI'S, B 17: 16 変更)

Doe't Piter grutter waard die it blikan dat er oars wie as oare bern. 「ピテルは大きくなったとき、ほかの子供たちとは違うということがわかった」 (Bosma-Banning 1981²: 39)

(5) 第2不定詞＋*komme*

(a) 第2不定詞＋*komme* 「…しながら来る」

§ 86 (4) で述べたように、運動の様態を表わすこの構文では、第2不定詞で現われる運動動詞は分離成分としての不変化詞を伴う分離動詞であることが多い。分離成分は *oan* (オ. *aan*/ド. *an*/エ. *on*) が多い。以下に用例を追加する。

Der *kaam* in fleanmasine *oanfleanen*. 「飛行機が飛んで来た」 (oan|flean 「飛んで来る」, 分離成分の境界を「|」で示す。以下同様) (WFT 3/1986: 391)

Dy *komt* mei in boekebus *oanriden*. 「その人は移動図書館とともに車でやって来る」 (oan|ride 「車・自転車などで乗りつける」) (ULP'S, C 16: 26)

Hy *kaam* der *oanstowen*. 「彼は突進して来た」 (oan|stowe 「突進して来る」) (Van der Veen/Oldenhof 1990: 47)

Der *kaam* in sturtsee *oanrôljen*. 「大波が押し寄せて来た」 (aan|rôlje 「(波が) うねり寄せる」) (Anglade 1966: 63 正書法変更)

第2 不定詞が分離成分 *oan* を伴う分離動詞以外の例もある。

Der *kaam* in tongerbui *opsetten*. 「雷雨が襲来してきた」 (op|sette 「現われる, 立ちのぼる」) (ib. 7)

Der *kaam* net ien *opdaagjen*. 「だれも姿を現わさなかった」 (op|daagje 「現われる, 姿を見せる」) (ib. 7)

Hja *kaam* ta de doar út *stoarteljen*. 「彼女はドアの外によろめきながら出てきた」 (stoartelje 「よろめく」) (Hoekstra 1997: 7 変更)

(b) [前置詞+第2 不定詞]+アスペクト動詞

この表現は前置詞句に第2 不定詞が含まれる点が特徴的である。ほとんどが固定した慣用句であり, 継続または始発のアスペクトを表わす。ドイツ語の機能動詞 (ド. Funktionsverb) と類似点がある。以下にいくつか用例を示す。

nei reinen stean 「雨模様だ」

oan sliepen ta komme 「寝ようになる」

jîn nei wenjen sette 「移住する, 転居する」

jîn nei sliepen jaan 「就寝する, 床に入る」

De loft *stiet nei reinen*. 「雨が降りそうな空模様だ (= 空は雨が降りそうな状態にある)」 (Zantema 1984: 645)

Yn 'e rin fan 'e jierren ha in protte minsken *har yn 'e stêd nei wenjen*

set. 「何年もの間にたくさんの人々が都市に移住した (= 都市に住むように移動した)」 (ULI'S, C 11: 2)

「前置詞＋第2 不定詞」の部分が「(前置詞句を支配する後置詞による) 後置詞句＋第2 不定詞」の例もある。

Yn 'e ûngetiid *komme* boeren en arbeiders amper [[*oan sliepen*] *ta*].
「干し草作りの時期には、農夫と出稼ぎ労働者はほとんど寝る暇がない」
(Zantema 1984: 1115)

「前置詞句＋(setten)＋komme」は特定の前置詞句を用いて固定した慣用句である。第2 不定詞 *setten* (← *sette* 「置く、据える」) にはそれほど明確な意味がなく、なくてもかまわない (Visser 1985: 358)。

{*der oan (ta)/der op (ta)*} (*setten*) *komme* 「…に来る・出かける」
earne wei (setten) komme 「…から来る」

Protten minsken, eins te folle, komme dêr op ta setten. 「多くの人々、じつはあまりに多くが、そこへやって来る」 (ULI'S, C 9: 12)

(6) 名詞句＋{*steane/sitten/lizzen/hingjen/rinnen*}＋{*hawwe/fine*}

hawwe 「持っている」/*fine* 「見つける」は知覚動詞構文と同様に「名詞句＋第2 不定詞」を伴うが、第2 不定詞の種類は以上の五つに限られ、名詞句目的語の姿勢(ポーズ)にかんする状態を表わし、「…を{掛かったままで/横たわったままで/置いた・据えたままで/立ったままで/歩いたままで}(あるのを){持っている/見つける}」の意味になる。*hawwe* を用いた場合は、「…を{掛けてある/横にしてある/置いてある・据えてある/立ててある/歩かせてある・走らせてある}」の意味でも解釈できる。歴史的にこの第2 不定詞が現在分詞に由来することは、§ 94 の注で述べた。

(a) *hawwe* 「持っている」を用いた用例

Nee, dat giet hielendal mis, want hy hat de stok te fier steane en hy giet skeane en ja, rekket yn it wetter. 「いや、これはまったく失敗です。というのは、彼は棒をあまりに遠くに立てすぎている (= 立ったままで持っている) からで、彼は斜めに傾いて、そして、ああ、水の中に落ちてし

まいります」(Bangma 1993²: 144 変更)

Tink mar dat ien dy't *de radio* net oan *stean hie*, ek graach witte wol, wat der sein is. 「ラジオをつけたままにしないで, 何が言われたかを知りたがる人がいることを考えてください」(ULI'S, C 7: 21)

Ik *ha in boat* by de mar *lizzen*. 「私はボートを湖のところに置いてある (=横たわった状態で持っている)」(Van der Veen/Oldenhof 1990: 47 変更)

Hy *hat trije skiep* yn 't lân *rinnen*. 「彼は羊を3頭, 牧場に放牧している (=歩いたままで所有している)」(Tiersma 1999²: 115 変更)

(b) fine 「見つける」を用いた用例

Hja *fân* him op 'e flie *sitten*. 「彼女は彼が床にすわっているのを見つけた」(Hoekstra 1997: 7 変更)

Wy *fûnen* har by de balke *hingjen*. 「私たちは彼女が梁(はり)で首を吊っているのを見つけた」(ib. 7 変更)

☞ 第2不定詞のかわりに *te*-第2不定詞を用いることもある。この構文は北東部の方言に特徴的である (Hoekema 1963/64, Tiersma 1999²: 115)。

Fan al har oerbepesizzers *hat se in foto* op it kammenet *te stean*. 「孫全員の写真を彼女は飾り棚の上に立ててある」(ULI'S, B 11: 6)

かつて西フリジア語では, 第2不定詞(動名詞-*en*<-*ene*)のかわりに現在分詞(-*end*<-*ende*)を用いていた(以下, 用例を含めて Hoekema 1963: 64 正書法変更)。

Wy *hawwe dêr lân lizzen* (<第2不定詞/動名詞 *lizzene*). 「私たちはそこに土地を持っている (=横たわったままで所有している)」

<Wy *hawwe dêr lân lizzend* (<現在分詞 *lizzende*). 「同上」

このほかに, 他動詞の場合には「*te* (<*to*) + 第2不定詞/動名詞」を用いる構文があった。

Wy *hawwe dat lân te brûken* (<*to brûkene*). 「私たちはその土地を利用すべく所有している(利用できる, 利用するのが適当である, 利用する必要がある)」

その後, 後者の構文からの類推として前者の構文で *te* (<*to*) を用いるようになり, 「名詞句 + *te* {*stean/lizzen*} + *hawwe*」構文が発達し, フリースラント州北東部で定着したと考えられる。

なお, デンマーク語などの北ゲルマン語では現在分詞を用いる構文が残ってい

る。

デ. *Vi har fem stole stående hjemme.* 「私たちは家にいすを5脚、持っている」

方言的な表現で *Ik bin geande.* 「私は歩いている」(現在分詞 *geande* 「歩いている」) のかわりに、フリースラント州北東部では *Ik bin te gean.* 「同上」と言うが、これも上記の説明に準じて考えられる。

なお、西フリジア語では「*mei*+名詞句…{*hingjen/lizzen/sitten/steane*}」で付帯状況「…を…したままで持っている」という意味を表わすが、この第2不定詞 *hingjen/lizzen/sitten/steane* が現在分詞に由来することは明らかである(第2不定詞は省略することもある。Hoekstra 1997: 8)。

Mei in honkbalkneppel ûnder it bêd lizzen, fielt er him feiliger. 「野球のバットをベッドの下に横に置いておくと、彼はより安心な気がする」(Hoekstra 1997: 8)

(7) *it* {*is/liket*}+形容詞+第2不定詞

「*it* {*is/liket*}+第2不定詞」構文はふつう様態の意味の形容詞を伴って、「…する場合に…である」という意味で非人称構文で用いる。構文の中心は{*is/liket*}+形容詞「…である」にあり、第2不定詞「…する場合に」はその添加成分(エ. adjunct)として副詞的にはたらいっている。以下の用例は「休む場合に心地よい」「住む場合に心地よい・心地が悪い」という意味であり、前置詞句 *by it* {*rêsten/wenjen*} 「休むときに/住む場合に」、または副詞節 *at jo* {*rêste/wenje*} 「同左」でほぼ同じ意味に置き換えられる。

Nei dien wurk is 't noflik rêsten. 「仕事を終えた後は心地よく休める(ことわざ)」(Beintema 1990:27, Dykstra 2000: 1153)

In protte minsken meie hjir net wenje. No, it is hjir goed wenjen fine wy. 「ここには住みたくないという人は多い。でもまあ、ここは住み心地がいいと私たちは思うよ」(Bangma 1993²: 80)

It liket my krap wenjen op sa'n boatsje. 「私はそんなボートは住み心地が悪いような気がする」(Bangma 1993²: 80)

(8) oan 't+第2 不定詞+wêze (前置詞句進行形)

(a) 前置詞句進行形とアスペクト

人や物事が特定の時間だけ持続する出来事の最中に存在することを示す表現形式を進行形と呼ぶ。西フリジア語の動詞には英語の 'be+ing' による進行形と違って、進行中の動作か否かという(文法的)アスペクトにかんする明確な意味的対立がない。たとえば、英語の write には「書く」という意味しかなく、「書いている」という意味は be writing で表わす必要がある。つまり、英語の write にはアスペクトにかんする示差的特徴が認められる。ところが、西フリジア語の skriuwe には「書く」と「書いている」というアスペクトの対立がない。これはオランダ語やドイツ語でも同様である。したがって、次の現在形・過去形による文は現在・過去の時点に進行中の動作とも、一般的な習慣・習性または動作を全体的にとらえた意味のどちらにも解釈できる。

Hy skriuwt in brief. 「彼は手紙を {書いているところだ/書く習慣がある・書く}」

Hy skreau in brief. 「彼は手紙を {書いているところだった/書く習慣があった・書いた}」

「oan 't+第2 不定詞+wêze」(oan it>oan 't [ɔənt]) 構文 (§ 60 (2)(s)③) を使えば、「…しているところだ」のように進行中の動作であることが意味的に明確になる。第2 不定詞が他動詞の場合、直接目的語名詞句は「oan 't+第2 不定詞」の左側(前)に現われ、全体で「名詞句…oan 't+第2 不定詞+wêze」という構文になる。oan 't は oan it とつづることもあるが、発音は [ɔənt] である。

Hy is in brief oan 't skriuwen. 「彼は手紙を書いているところだ」

Hy wie in brief oan 't skriuwen. 「彼は手紙を書いているところだった」

ただし、進行中の動作であることを示す必要が高い文脈では、この構文がほとんど義務的になる場合がある。たとえば、次の文ではたんに過去形を使うだけでは不自然である。

Doe't se deryn kaam, {wie er oan 't skriuwen/?skreau er}. 「彼女が入ってきたとき、彼は書いているところだった」(Ebert/Hoekstra 1996:

82 変更)

語形的には oan 't は「前置詞 oan (オ. aan/ド. an/エ. on) + 定冠詞 it」であり、「oan 't + 第 2 不定詞」は前置詞句に相当するので、「oan 't + 第 2 不定詞 + wêze」は前置詞句構文と言える。この構文による進行形の表現を「前置詞句進行形」(エ. prepositional progressive) と呼ぶことにする。

なお、進行形の表現にはこれ以外に、ゲルマン語一般で「姿勢動詞構文」による「姿勢動詞進行形」がある。西フリジア語では「{steane/sitte/lizze/hingje/rinne} + te-第 2 不定詞」がこれにあたる (§ 97 (4))。

(b) 不定詞標識の oan 't

この構文の第 2 不定詞は (2) の「限定詞 + 第 2 不定詞」と違って、名詞化 (de nominalisaasje/エ. nominalization) されていない。それは第 2 不定詞が動詞の結合価 (ド. Valenz) を受け継いで、名詞句目的語を伴うことからわかる。

Hy {is/wie} in brief oan 't skriuwen. 「彼は手紙を書いているところ
{だ/だった}」

*Hy {is/wie} oan 't skriuwen fan in brief. 「同上」

第 2 不定詞 skriuwen は定冠詞 it (>t) を伴っているが、名詞句の直接目的語 in brief 「手紙」を支配しており、in brief skriuwe 「手紙を書く」という動詞句の構造が保たれている。つまり、in brief 「手紙」は oan 't の左側に置かれているが、第 2 不定詞 skriuwen 「書く」と動詞句を形成している。これは in brief te skriuwen 「手紙を書く」という te-第 2 不定詞句と同様であり、oan 't は te に相当すると言える。

つまり、oan 't は通常の前置詞と定冠詞の結びつきとは性格を異にする。te-第 2 不定詞の te (オ. te/ド. zu/エ. to) が前置詞から「不定詞標識」(エ. infinitival marker) に発達したのと同様に、oan (オ. aan/ド. an/エ. on) はもはや前置詞ではなく、te と同様に oan 't という不定詞標識としてはたらいっていると考えられる (Ebert/Hoekstra 1996: 89)。

ただし、不定詞標識 oan 't は不定詞標識 te と違って、分離動詞では分離成分の小辞と動詞の間に te が割り込むが (op te iten), oan 't は割り込まない

(*op oan 't iten)。この点で oan 't は前置詞としての性格を残しており、完全に不定詞標識になっているとは言いがたい。

Hy is in hjerring {oan 't opiten/*op oan 't iten}. 「彼はニシンを一匹、たいらげているところだ」(分離動詞 op|ite「食べ尽くす、たいらげる」)(Ebert/Hoekstra 1996: 84 変更)

⇔Hy besiket in hjerring {*te opiten/op te iten}. 「彼はニシンを一匹、たいらげようとしている」

(c) 「前置詞＋定冠詞」としての oan 't

次の用例では名詞句が oan 't の左側に置かれておらず、「名詞＋第2 不定詞」で1語として続け書きされ、名詞抱合 (§ 83, 84) が起こっている。この第2 不定詞は名詞用法で、oan 't は「前置詞＋定冠詞」とであると言える。

Hy is oan 't briefskriuwen. 「彼は手紙を書いているところだ」(briefskriuwe ← brief「手紙」+skriuwe「書く」)

これが名詞抱合による表現であることは、brief「手紙」に限定詞や形容詞などの修飾語をつけたり、代名詞で置き換えることができないことから明らかである。

*Hy is oan 't {in brief/ lange brieven} skriuwen. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだ」

*Hy is oan 't {{him/it}/se} skriuwen. 「彼は {それ/それら} を書いているところだ」({de/it} brief「手紙」)

名詞句目的語の部分を「oan 't＋第2 不定詞」全体の左側(前)に出せば、oan 't は不定詞標識としてはたらし、動詞句表現になるので問題がない。

Hy is {in brief/ lange brieven} oan 't skriuwen. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだ」

Hy is {{him/it}/se} oan 't skriuwen. 「彼はそれ (単数形/複数形) を書いているところだ」

ただし、語彙的に固定した抱合動詞の語形は brieveskriuwe であり、おもに「文通する」という習慣・反復を伴う特定化した意味を表わす。

次例が名詞抱合によることは、han- が hân「手」と語形的に異なることが

ら明らかである。

De bern *binne oan it hanwaskjen*. 「子供たちは手を洗っている」(名詞抱合 *han* (<*hân* 「手」)+*waskje* 「洗う」)(ULFS, A 3: 10)

西フリジア語の *oan 't* は歴史的に「前置詞+定冠詞」に由来する。今日でもなお名詞用法の第2不定詞を伴い、名詞抱合によって他動詞の目的語を取り込みながら前置詞句を形成するのはそのなごりと言える。これはまた、*wurkje* 「働く」という動詞を用いた *oan 't wurkjen wêze* のほかに、*it wurk* 「仕事」という中性名詞を用いた *oan it wurk wêze* もともに「仕事をしているところだ」という意味になることから理解できる。

Auke is yn de tún oan it wurk. 「アウケは庭で仕事をしている」

Hy is oan it wurk mei in boek. 「彼は本を書いている」(Dykstra 2000: 828)

以上で述べたように、*oan 't* は不定詞標識としての性格を持つまでに発達し、第2不定詞が名詞句目的語を伴って動詞句型構文を形成することがある。この意味で西フリジア語の前置詞句進行形は進行形への発達途上にあり、「*oan 't*+第2不定詞+*wêze*」構文にはあいまいさが認められると考えられる。たとえば、第2不定詞が単独の自動詞の場合には、目的語を欠くために動詞句を形成しているかが不明確であり、*oan 't* が不定詞標識か前置詞かあいまいである。

Wy wiene krekt oan 't iten, doe't er thúskaam. 「彼が帰宅したときに、私たちはちょうど食事をしている最中だった」(Van der Woude 1971: 140 正書法変更)

Ik bin oan it praten. 「私は話をしているところです」(Van der Veen/Oldenhof 1990: 47)

Yn it petearke wie de mem oan it striken. 「会話をしながら母は編み物をしていた」

西フリジア語では第2不定詞を伴う *oan 't* だけでなく、*te* も不定詞標識か前置詞かであいまいである (§ 97)。名詞抱合の有無も同様にこれと関係している。同じく進行形の表現である「{*steane/sitte/lizze/hingje/rinne*}+第2不定

詞」構文 (§ 97 (4)) でも同様である。

(d) 意味的制限と他の用例

「oan 't+第2 不定詞」構文は英語の進行形 (be+-ing) と同様に、開始・終結を前提としない状態・性質の表現には使えない。

Kenne jim inoar? 「あなたがたは知り合いですか」 (Visser 1985: 330)

⇔ **Binne jim inoar oan 't kennen?* 「同上」

Sy liket hiel bot op har mem. 「彼女は母親にとってもよく似ている」 (Dykstra 2000: 370)

⇔ **Sy is hiel bot op har mem oan 't lykjen.* 「同上」

Ik weach 65 kilo. 「私は体重が 65 キロあります」 (ib. 797 変更)

⇔ **Ik bin 65 kilo oan 't weagen.* 「同上」

時間を示す副詞成分を伴って動作の継続を表わす場合にも、この構文は使えない。

**It bern wie twa oeren lang oan 't boartsjen.* 「子供は 2 時間の間、ずっとひとりで遊んでいた」 (Ebert/Hoekstra 1996: 90 変更)

主語が動作主でない場合にもこの構文は使えない。つまり、意図的で制御可能な動作である必要がある。

**It jonkje is oan 't sliepen.* 「男の子は眠っている」 (Ebert/Hoekstra 1996: 82)

**It famke is oan 't {laitsjen/gûlen}.* 「女の子は {笑っている/泣いている}」

**Dy studint is him oan 't ferfelen.* 「その学生は退屈している」

**De flagge is op 'e toer oan 't waaien.* 「塔の上で旗がたなびいている」

**It wetter is oan 't sieden.* 「お湯が沸いている」 (Ebert/Hoekstra 1996: 82)

**It is oan 't reinen.* 「雨が降っている」 (ib. 82)

☞ 「{steane/sitte/lizze/hingje/rinne}+te-第2 不定詞」構文は動作の継続や主語が動作主以外の表現にも用いることができる (§ 97 (4)参照)。ただし、姿勢の意味と矛盾しないことが条件になる。

(e) その他の進行形の表現

前置詞句構文による類似した進行形の表現としては, *dwaande* 「従事している, 多忙な (*mei*…に・で)」 (§ 92 (3)(f)②) がある。

Wypke *wie* krekt *dwaande* Sytske har fuotsjes dêr yn *te* *waskjen*.
「ヴィプケはちょうどシツケの足をその中に入れて洗っていた」 (ULI'S, B 2: 13 変更)

De bern *binne dwaande mei* hanwaskjen. 「子供たちは手を洗っている」

Ik *bin dwaande mei* wat wurk. 「私はちょっと仕事をしている」
(Tamminga 1963: 178 正書法変更)

オランダ語では *bezig zijn* 「従事している (*met*…に), 多忙な (*met*…で)」がこれに対応する。

オ. De kinderen *zijn bezig* hun handen te wassen. 「同上」 (ULI'S, A 3: 29)

Ik ben bezig met wat werk. 「同上」 (Tamminga 1963: 178)
「oan 't+第2不定詞+wêze」構文で *wêze* のかわりに *bliuwe* 「…し続ける, とどまる」を使うと, 「…しているところだ」という意味の進行形ではなく, 「…し続ける」という意味の継続アスペクトの表現になる。

Wy *bliuwe* noch in oerke oan it *timmerjen*. 「私たちはまだ1時間は大工仕事をやり続けます」 (Van der Veen/Oldenhof 1990: 81 変更)

これは *te*-第2不定詞で置き換えても表現できる (§ 97 (3)). (4)で述べたように, 「*bliuwe*+第2不定詞」は語彙的に固定しており, *te* が必要である。

Wy *bliuwe* noch in oerke {*te*/*Ø} *timmerjen*. 「同上」 (ib. 81 変更)

オランダ語では「aan het+不定詞+zijn」構文が西フリジア語の「oan 't+第2不定詞+wêze」構文に対応する。不定詞標識としての *aan het* と動詞句表現, 「前置詞句+定冠詞」としての *aan het* と名詞抱合という対応も西フリジア語と同様である。

オ. Hij *schrijft* {een brief/lange brieven}. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書く・書いているところだ」

Hij *schreef* {een brief/lange brieven}. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いた・書いているところだった」

Hij *is* {een brief/lange brieven} *aan het schrijven*. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだ」

Hij was {een brief/lange brieven} aan het schrijven. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだった」

オランダ語でも進行中の動作は直接目的語を動詞の直前に置くことによって表現できる。

オ. Hij is aan het brieven schrijven. 「彼は手紙を書いているところだ」
(ANS 1997: 1361)

この用例では brieven「手紙」は複数形であり、正書法でも brieven と schrijven「書く」は分かち書きする。しかし、brief は限定詞をつけたり、代名詞で置き換えることはできない。

オ. *Hij is aan het {een brief/lange brieven} schrijven. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだ」

*Hij is aan het {hem/ze} schrijven. 「彼はそれを (単数形/複数形) 書いているところだ」 (de brief「手紙」)

目的語の部分「aan het + 第2 不定詞」全体の左側 (前) に出せば動詞句表現になるので問題がないことは、西フリジア語と共通している。

オ. Hij is {een brief/lange brieven} aan het schrijven. 「彼は {手紙 (単数形)/長い手紙 (複数形)} を書いているところだ」

Hij is {hem/ze} aan het schrijven. 「彼はそれを書いているところだ」

このことから上記の構文は名詞抱合としての性格を備えていると言える。名詞が複数形になるのは、boekenkast「書棚」(boek「本」+kast「戸棚, ケース」)のように複数形形態素は複合語の成分に用いることがあるのと同様に、名詞抱合においても抱合名詞を形成する形態的役割を担っているためとも考えられる。次例も同様である。

オ. Hij is de aardappels aan het schillen. 「彼はジャガイモの皮をむいているところだ」 (Ebert/Hoekstra 1996: 86 変更)

Hij is aan het aardappelschillen. 「同上」 (ib. 86 変更)

ただし、オランダ語では西フリジア語と違って名詞抱合の使用範囲に制限が強く、この種の不定詞の名詞用法で名詞抱合が観察されるにすぎない。

「aan het + 不定詞」構文の不定詞が名詞化されておらず、動詞の結合価を受け継ぐ点も西フリジア語と同様である。

オ. *Hij was aan het schrijven van een brief. 「彼は手紙を書いているところだった」

分離動詞では分離成分の不変化詞と動詞の間に te は割り込むが、aan het は割り込まないことも西フリジア語と同様ある。

オ. Hij is een haring {aan het opeten/*op aan het eten}. 「彼はニシンを一匹、たいらげているところだ」 (分離動詞 op|eten「食べ尽くす, たいらげる」)

⇒Hij probeert (om) een haring { *te *opeten* / *op te eten* }. 「彼はニシンを一匹、
たいらげようとしている」

ゲルマン語には文法化の差が認められるものの、ほとんどの言語に同種の「前置詞句進行形」が認められる。英語の *be+ing* も歴史的には前置詞句進行形に由来する(古英語 *bēon+on+ing*)。英語と並んで文法化の度合いが高いアイスランド語の「*vera að* (エ. *at*) +不定詞」も前置詞句進行形のひとつである。前置詞にはこのほかに北フリジア語フェリング方言 (*Fering*) の *uun* (フ. *yn* / オ. ド. エ. *in*)、モーリング方言 (*Mooring*) および部分的にフェリング方言の *bai*、ドイツ語の *bei* (西フ. *by* / オ. *bij* / エ. *by*)、および意味的にこの *bai/ bei* に相当するデンマーク語の *ved* (エ. *with*) などがある (Ebert 1989, Ebert/Hoekstra 1996)。文法化の度合いは、

- ① 進行形と非進行形でのアスペクトの対立の有無
- ② 主語が動作主で意図的・制御可能な動詞に限られるか否か
- ③ 名詞句目的語の可否
- ④ 前置詞から不定詞標識への発達の有無

などから判断される。西フリジア語の前置詞句進行形構文は①②は満たさないが、③④はほぼ満たすという意味で進行形としての文法化がある程度、進んでいると言える。ドイツ語では「(gerade) *dabei sein*…*zu*-不定詞」と「*am*+不定詞+*sein*」がそれに相当するが、西フリジア語の構文に近い後者は①②を満たさず、③④も十分に満たすとは言いがたい。ただし、次の用例のように、目的語が代名詞である場合には③が比較的可能である。この点でこの構文にも進行形構文としての芽生えが認められる。

ド. *Das sind wir noch am Diskutieren*. 「それを私たちはまだ議論しているところです」 (Ebert/Hoekstra 1996: 98)

?? *Wir sind das Problem noch am Diskutieren*. 「私たちはその問題をまだ議論しているところです」 (ib. 98)

なお、「(gerade) *dabei sein*…*zu*-不定詞」では名詞句目的語を伴う他動詞であることが必要である。

ド. **Sie ist dabei zu lesen*. 「彼女は読んでいるところだ」 (Ebert/Hoekstra 1996: 97)

Sie ist dabei ein Buch zu lesen. 「彼女は本を読んでいるところだ」

§ 97 te-第2不定詞 (de te-ynfinityf)

(1) te-第2不定詞の分類

第2不定詞に te (オ. te/ド. zu/エ. to) がついた te-第2不定詞は、第2不定詞とは用法が大きく異なる。Hoekstra (1997: 22, 84 ff.) は te-第2不定詞を外置 (de ekstraposysje/エ. extraposition) と名詞抱合 (de nomenynkorporaasje/エ. noun incorporation) の有無という基準で4種類に分類している (③④は De Haan (1987: 65 ff.) では区別されていなかったものである)。

	外置	名詞抱合
① te-第2不定詞の動詞用法	有	無
② te-第2不定詞の形容詞用法	無	無
③ te-第2不定詞の前置詞句用法	無	有
④ te-第2不定詞の文用法 [=副詞用法, 筆者注]	有	有

① te-第2不定詞の動詞用法 (de ferbale te-ynfinityf, エ. verbal te-infinityf)	
Hy seit dat se Frysk <i>besiket</i> [<i>te praten</i>]. 「彼は彼女がフリジア語を話そうとしていると言っている」 (besykje 「…することを試みる, …しようとする」, prate 「話す」) ((2)の用例)	
② te-第2不定詞の形容詞用法 (de adjektivyske te-ynfinityf/エ. adjectival te-infinityf)	
Hy seit dat se swier [<i>te rissen</i>] is. 「彼は彼女はその気にさせにくいと言っている」 (risen 「持ち上げる, その気にさせる」) ((5)の用例)	
③ te-第2不定詞の前置詞句用法 (de preposysjonele te-ynfinityf/エ. prepositional te-infinityf)	
Hy seit dat se [<i>te toarnbeisykjen</i>] giet. 「彼は彼女がキイチゴを摘みに行くと言っている」 (toarnbeisykje 「キイチゴ摘みをする」 <toarnbei 「キイチゴ」+sykje 「探す」, gean 「行く」) ((7)の用例)	

- ④ te-第2 不定詞の文用法 (de sentinsjele te-ynfinityf/エ. sentential te-infinitive) [=副詞用法, 筆者注]

Hy seit dat er ús helpt [*te toarnbeisykjen*]. 「彼は彼女が私たちにキイチゴ摘みの手伝いをしてくれると言っている」(helpe「助ける」)((2)の用例) (以上①～④, ib. 14)

④の「te-第2 不定詞の文用法」はオランダ語やドイツ語には存在せず、西フリジアの特徴と言えるが、認定に問題がまったくないわけではない。また、「文(=CP)」という概念もつかみにくい。「文」よりも「副詞成分」として理解するほうが容易なので、以下では「te-第2 不定詞の副詞用法」(de adferbiale te-ynfinityf/エ. adverbial te-infinitve)と言い換えて、「文用法(副詞用法)」という名称で用いることにする(詳細は(7)(e)参照)。この4分類は判断が困難な場合もあるが、画期的な分類であり、オランダ語やドイツ語との共通点や相違点もとらえやすい。以下の説明でも必要に応じて言及する。ただし、以下の(2)～(7)はこの4分類のどれかと一対一に対応するとはかぎらないので、注意を要する ((2)(h), (3)(b)(c), (4)(b)～(e), (7)(d)(e))。

(2) te-第2 不定詞句を伴う他動詞(制御動詞)

(a) 補文としての te-第2 不定詞句

te-第2 不定詞は名詞句目的語や前置詞句などの副詞成分を伴って第2 不定詞句を形成し、母型文 (de matrikssin/エ. matrix sentence) の埋め込み文 (de ynbêde sin/エ. embedded sentence) として母型文の動詞 (de matrikstiidwurd/エ. matrix verb) の補文を形成することがある。この用法を「te-第2 不定詞の動詞用法」(de ferbale te-ynfinityf/エ. verbal te-infinitive) と呼ぶ。te-第2 不定詞句の主語は語彙的には表現されず、母型文の主語・目的語などと同一であると意味的に解釈される(英語と違って、西フリジア語では「for-名詞句+to-不定詞」のように主語を「for-名詞句」として語彙的に表現することはない)。母型文の動詞の種類には、te-第2 不定詞句を伴う他動詞(制御動詞)と te-第2 不定詞句を伴う話法動詞・アスペクト動詞(繰り上げ動詞)がある。この te-第2 不定詞は(1)で述べた動詞用法である。

ここでは前者の *te*-第2 不定詞句を伴う他動詞（制御動詞）を扱う。

(b) 個々の動詞と用例

te-第2 不定詞句の主語の解釈は、それを支配する母型文の動詞が母型文の主語あるいは目的語と同一であることを決定することに依存する。つまり、母型文の動詞が *te*-第2 不定詞句の主語を制御（*エ. control*）する。このような動詞を「制御動詞」（*エ. control verb*）と呼ぶ。

① 主語と同一

belibje 「…することを経験する」, *besykje* 「…することを試みる, …しようとする」, *ferjitte* 「…することを忘れる」, *hoopje* 「…することを希望する」, *oanbiede* 「…することを申し出る」, *sizze* 「…すると言う」, *ûnthjitte* 「…に…すると約束する」, *witte* 「…することを心得ている」
Beppe hie nea tocht, dat se nochris belibje soe, [oerbeppe te wurden], mar no is se it al trije kear. 「祖母はもう一度、曾祖母になる経験をするなどとはまったく思ってもみませんでした、これでもう3度目です」(*belibje*) (ULI'S, B 1: 9)

Jûns lei er op bêd te bidden, want hy leaude yn God en hope [al yn 'e himel te kommen]. 「夜になると彼はベッドに横になって祈りました。というのは、彼は神様を信じていて、ちゃんと天国に行けるようにと願っていたからです」(*hoopje*) (ULI'S, B 20: 10)

Troch sokke maatregels hopet er [wurkgelegenheid foar de oare wurknimmers hâlde te kinnen]. 「そのような措置によって、彼は他の労働者のために仕事の機会を保持できるように願っている」(*hoopje*) (ULI'S, C 13: 7 変更)

Ik hoopje [noch hiel lang op mysels bliuwe te kinnen]. 「私はまだずっと長い間、自分でやっていけるようにと望んでいます」(*hoopje*) (Bangma 1993²: 80)

Ik bea oan [him te helpen]. 「私は彼に援助することを申し出ました」(*oanbiede*) (Bosma-Banning 1981²: 126)

It persintaazje respondinten dat seit [hielendal neat fan it Frysk te

ferstean] is dus o sa lyts. 「フリジア語を何も理解しないと言っている回答者の割合は、したがって、きわめて微小である」 (sizze) (Gorter et al. 1984: 82)

Sy *wit wol* [*mei minsken om te gean*]. 「彼女は人と付き合う方法をよく心得ている」 (witte) (Zantema 1984: 1198 変更)

Wy *witte* [*de bushalte net te finen*]. 「私たちはバス停が見つからないのです」 (witte) (ULFS, C 18: 5)

② 目的語と同一

beprate 「…に…するように説得する」, *ferbiede* 「…に…することを禁止する」, *freegje* 「…に…するように頼む」, *helpe* 「…に…することを手伝う」, *hjitte/befelje* 「…に…することを命令する」, *oanriede* 「…に…するように忠告する」, *oerhelje* 「…に…することを納得させる, …に…するように説得する」, *twinge* 「…に…することを強制する」

Se *skille de dokter en frege him* [*de middeis even del te kommen*]. 「彼女は医者に電話して、昼に来てもらうように頼んだ」 (freegje) (ULFS, A 6: 8 変更)

Hja *twongen de piloat* [*nei Stiens te fleanen*]. 「彼らはパイロットにスティエンス (オ. Stiens 「スティーンス」) へ飛ぶように強制した」 (twinge) (ULFS, C 5: 8)

③ 主語・目的語と同一

同一の母型文の動詞でも、意味の相違に応じて *te*-第2 不定詞句の主語が母型文の主語または目的語と同一と解釈されることがある。

Hy *frege har* [*om har hier groeie te litten*]. 「彼は彼女に彼女の髪を伸ばすように (= 伸ばしてくださいと) 頼んだ」 (freegje 「…してほしいと頼む=要請する」, 目的語と同一) (Hoekstra 1997: 61 変更)

Hy *frege har* [*om syn hier groeie te litten*]. 「彼は彼女に彼自身の髪を伸ばさせてくれと (= 伸ばすのを許してほしいと) 頼んだ」 (freegje 「…してもいいかと頼む=許可を求める」, 主語と同一) (ib. 61 変更)

(c) 「(om…) te-第2 不定詞」: 補文標識 om 可

補文としての te-第2 不定詞句は動詞不定形の場合に用いる補文標識 om に導かれることがある。

Wy bepraten him [*om dat net te dwaan*]. 「私たちは彼にそれをしないように説得した」(beprate)

Ik koe him net oerhelje [*om ek mei te dwaan*]. 「私は彼にいっしょにやることを納得させることができなかった」(oerhelje) (Vledder/De Jager-De Boer 1991: 204 変更)

この場合の om の使用は原則として任意である。ただし、西フリジア語ではオランダ語と比べて om の使用が好まれる傾向がある。om をつけない表現は堅苦しく、オランダ語的な印象を与えることがある (Hoekema 1958: 17)。また、om を使用すれば、te-第2 不定詞句の始まる位置がはっきりする。

om を欠く用例。

Besykje [jo stânpunt sa goed mooglik *te beredene*arjen]. 「あなたの立場をできるだけ主張するようにしなさい」(besykje) (ULI'S, C 17: 11 変更)

Besykje dan [de tekst sa kreas mooglik *te lêzen*]. 「それからテキストをできるだけ上手に読んでみなさい」(besykje) (ULI'S, C 9: 16)

De man besiket [*te glimkjen*]. Is slagget net sa bêst. 「その男性はほほ笑もうとする。(しかし) あまりうまくいかない」(besykje) (ULI'S, B 6: 8)

同一の動詞で om の有無が併存する用例。

As oplossing sil besocht wurde moatte [de minske op 'en nij yn 'e kunde te bringen mei de natoer om him hinne]. 「解決策として、人間をもう一度自分のまわりの自然に親しませることが試みられる必要があるだろう」(besykje) (ULI'S, C 9: 16)

⇔ Yn dizze advertinsje wurdt besocht [*om de oandacht te lûken*] troch de kop: 'mear as in heal miljoen kij…'. 「この広告では『50 万匹以上の乳牛…』というタイトルで注意を引こうとしている」(besyk-

je) (ULI'S, B 11: 26)

By it boadskipjen *ha ik fergetten* [sâlt *te keapjen*]. 「買い物をしたときに私は塩を買うのを忘れた」(ferjitte) (Vledder/De Jager-De Boer 1991: 85 変更)

⇔ Jimme *fergeaten* juster [*om* buorfrou mei *te nimmen*]. 「あなたがたは昨日、隣のおばさんを連れて行くのを忘れた」(ferjitte) (ULI'S, C 13: 5)

Ik *fergeat* [*om* de doar op slot *te dwaan*]. 「私はドアに鍵をかけるのを忘れた」(ferjitte) (Bosma-Banning 1981²: 127)

Freegje jo kursuslieder [*jo sinnen te kontrolearjen*]. 「講師の先生にあなたの文章をチェックしてもらうようにお願いしなさい」(freegje) (ULI'S, B 12: 13)

⇔ Jo *wurde frege* [*om* in pear rigels *te skriuwen*]. 「何行か文をつづってください (=あなたは何行か文をつづることを依頼されます)」(freegje) (ULI'S, B 20: 7 変更)

Hja *twongen* [de piloat nei Stiens *te fleanen*]. 「彼らはパイロットにスティエンス(オ・Stiens「スティーンズ」)へ飛ぶように強制した」(twinge) (ULI'S, C 5: 8)

⇔ Wêrom *wurde* de minsken op it plattelân der yn guon gefallen suver ta *twongen* [*om* in eigen auto *oan te skaffen*]? 「なぜ田舎の人々はある場合には自家用車を調達することを強いられるのだろうか」(twinge) (ULI'S, C 18: 17)

「(om…) *te*-第2不定詞句」が他動詞に先行する場合には、補文標識 *om* は現われない (Hoekstra 1997: 134)。

Hy seit dat Anneke him *frege* [{*om/Ø*} mei har nei Utert ta *te gean*]. 「彼はアネケが彼に彼女といっしょにユトレヒト(オ・Utrecht)へ行ってくれと頼んだと言っている」

Hy seit dat Anneke him [{**om/Ø*} mei har nei Utert ta *te gean*] *frege*. 「同上」

(d) 「(*om…) te-第2 不定詞句」：補文標識 om 不可

補文標識 om が使えない動詞もある。発言や感情・認識の意味の動詞がおもなものである (ANS 1997: 1111, Hoekstra 1997: 134)。日本語では「…である」と…、…すると…」のように、te-第2 不定詞句が「…と」と訳せるものが多い。つまり、te-第2 不定詞句を目的語として十分に支配しているとは言えず、他動詞としての性格が一般的に弱い。

freezje「…と恐れる」、hoopje「…と希望する」、meidiele「…と伝える」、miene「…と思う」、sizze「…と言う」など

Hy *miende* [{*om/Ø}] *dat ferwachtsje te kinnen*. 「彼はそれが期待できと思った」(miene) (De Haan 1992: 59 変更)

(e) te-第2 不定詞または第2 不定詞を伴うもの

leare「…することを教える・習う」は te-第2 不定詞句を支配するが、目的語のない不定詞だけの1語の場合には te を伴わず、第2 不定詞を名詞用法で用いることがある (Eisma 1989:24)。

① leare「教える」の用例

Ik *learde* har de wurden *te staverjen*. 「私は彼女にそれらの語のつづりかたを教えた」(Eisma 1989:24 変更)

⇔Honger *leart* de bear *dûnsjen*. 「空腹は熊に踊ることを教える (=腹が減っては戦(いくさ)はできぬ。ことわざ」(Beintema 1990: 62)

② leare「習う」

De minske sil wer *leare* moatte *te sjen, te harkjen en te ferstean*. 「人間は見ることと聞くことと理解することを再び学ぶ必要があるだろう」(ULP'S, C 9: 16 変更)

Moatte wy *leare te libjen* mei in grut tal wurkleazen? 「私たちは大勢の失業者と生きることを学ばなければならないのだろうか」(ULP'S, C 13: 8)

⇔It is winter en no silst *riden leare*. 「もう冬になったのだから、お前はスケートを習わなくてはいけない」(ULP'S, B 11: 11)

De jonges wolte *silen leare*. 「男の子たちはヨットを習いたいと思って

いる」(Bosma-Banning 1981²: 159)

第2不定詞が定冠詞 *it* などの限定詞を伴うことがある。

Do hast my it silen leard. Wist it noch? 「君はぼくにヨット乗りを教
えてくれたね。覚えていたかい」(Bosma-Banning 1981²: 158)

doare 「あえて…する」と *hoege* (*hoeve*) 「…する必要がある」は第1不定
詞あるいは第2不定詞を伴うことがある (§ 77 (2))。

(f) 名詞句の取り出しと *te*-第2不定詞句の外置

- ① *te*-第2不定詞句内の名詞句はその外に取り出すことができる。次の文は
名詞句が主文の前域に移動した例である。

Eins wie er bang foar hynders en dat_i besocht er [_____i fuort te razen].
「じつは彼は馬がこわかったが、そのことを彼は念頭から捨て去ろうとし
た」(*besykje*) (ULI'S, B 12: 5 変更)

ただし、補文標識 *om* に導かれた「*om te*-第2不定詞句」からの名詞句
の取り出しはできない。

Dat_i haw ik fergetten [_____i te dwaan]. 「それを私はやり忘れた」
(Bosma-Banning 1981²: 127)

⇔**Dat_i haw ik fergetten [om _____i te dwaan].* 「同上」

- ② *te*-第2不定詞句の外置

te-第2不定詞句は全体で右枠の外に枠越えし、外置することができる。

De measte hûsdokters binne der wol foar, dat de minsken besykje
[wat oan harren kwaaltsjes te dwaan]. 「大部分の家庭医は人々が自分
の疾患について何かしようと試みる方が良いと思っている」(ULI'S, C
6: 34)

It bestjoer en de direksje sil yn oerlis mei de fakbûnen besykje [in
oplossing te finen foar de wurknimmers]. 「執行部と理事会は労働組
合と相談して、労働者のために解決策を見つけようと試みるだろう」
(ULI'S, C 13: 7 変更)

- (g) 第3構文 (分裂不定詞句)

(f)で述べたように、目的語補文の *te*-第2不定詞句は外置の有無によって

母型文の動詞との語順に相違が生じる。この場合、外置を起こした用例のほうが好ましい印象を与えることが多い（外置を起こさず、母型文の動詞に先行する te-第2 不定詞に補文標識 om がつかないことは(c)で述べた）。

① 外置：有

Se sizze dat er my *ferbean hat* [dat boek *te keapjen*].「同上」(ferbiede)
(De Haan 1993: 122 変更)

Hja seit dat er *mient* [dat net *ferwachtsje te kinnen*].「同上」(miene)
(ib. 117 変更)

② 外置：無（あまり好まれない）

Se sizze dat er my [dat boek *te keapjen*] *ferbean hat*.「彼らは彼がその本を買うことを禁止したと言っている」(ferbiede) (De Haan 1993: 122 変更)

Hja seit dat er [dat net *ferwachtsje te kinnen*] *mient*.「彼女は彼がそれを期待できないと思っていると言っている」(miene)

以上の二つに加えて、te-第2 不定詞句の目的語と te-第2 不定詞の間に母型文の動詞が割り込んでいる語順がある。このような「分裂不定詞句構文」（エ. split infinitival argument）を「第3 構文」（オ. derde constructie/エ. third construction）と呼ぶ。

③ 第3 構文（分裂不定詞句構文）

Se sizze dat er my [dat boek] *ferbean hat* [*te keapjen*].「同上」
(ferbiede) (De Haan 1993: 122 変更)

Hja seit dat er [dat] *mient* [net *ferwachtsjen te kinnen*].「同上」
(miene) (ib. 117 変更)

te-第2 不定詞が「第1 不定詞 (…） te-第2 不定詞」となる場合には、分裂のしかたは「[名詞句目的語＋第1 不定詞]…te-第2 不定詞」でも「名詞句目的語…[第1 不定詞＋te-第2 不定詞]」でもかまわない。

i) [名詞句目的語＋第1 不定詞]…te-第2 不定詞

Hja seit dat er [dat boek *keapje*] *mient* [*te moatten*].「彼女は彼がその本を買わなければならないと思っていると言っている」(miene) (ib.

123 変更)

ii) 名詞句目的語…[第 1 不定詞+te-第 2 不定詞]

Hja seit dat er [dat boek] *mient* [*keapje te moatten*]. 「同上」(miene)
(ib. 123 変更)

(h) te-第 2 不定詞の用法

以上で述べたことと (1) で述べた te-第 2 不定詞の用法との関係には注意を要する。

Hja seit dat er ús *helpt* [(om) de foto's yn *te plakken*]. 「彼女は彼が私たちに写真を貼りつけるのを手伝うと言っている」((om…)te-第 2 不定詞句) (Hoekstra 1997: 92 変更)

Hja seit dat er ús [de foto's yn] *helpt te plakken*. 「同上」(第 3 構文(分裂不定詞句), 動詞用法) (ib. 92 変更)

Hja seit dat er ús *helpt* [*te fotoynplakken*]. 「同上」(名詞抱合, 文用法(副詞用法)) (ib. 92 変更)

(3) te-第 2 不定詞句を伴う話法動詞・アスペクト動詞(繰り上げ動詞)

(a) まとめと用例

母型文の主語が動作主ではなく、義務・推量などの話法の助動詞 (moatte/sille など) に準ずるような話法の意味や、始発・継続・習慣・終結などのアスペクトの意味を表わす動詞がある。前者を「話法動詞」、後者を「アスペクト動詞」と呼ぶ。te-第 2 不定詞句は補文標識 om を伴わない。これは母型文の動詞が動作主主語と te-第 2 不定詞句目的語を要求する (2) の他動詞 (制御動詞) とは異なる。母型文の主語は非動作主で、te-第 2 不定詞とひとつの命題を構成し、そこから非動作主の主語が母型文の主語に繰り上がることで成立する。このような動詞を「繰り上げ動詞」(エ. raising verb) と呼ぶ。

① 話法動詞

blike 「明らかに…だ」, doare 「あえて…する」 (§ 77 (2)), hearre 「…するのがふさわしい」, hoege(hoeve) 「…する必要がある」 (§ 77 (2)), lykje 「…らしい」, skine 「…らしい」

Op in fyts *heart* in skille *te sitten*. 「自転車にはベルがあつてしかるべきだ」(hearre) (ULI'S, A 18: 5)

De bazen fan de hûnen *hearre* harren beesten under tafersjoch *te hâlden*. 「犬の飼い主は自分たちの犬(=動物)を監視するのが当然である」(hearre) (ULI'S, C 7: 21)

It *like mis te gean*. 「それは失敗しそうだった」(lykje) (Dykstra 2000: 370)

Der *skine* altyd noch minsken *te wêzen*, dy't in bytsje skruten binne en stap samar yn 'e bibleteek. 「図書館に遠慮なく足を踏み入れることに少し気遅れするような人々がいまだにいるようだ」(skine) (ULI'S, C 20: 6 変更)

② アスペクト動詞

beginne 「…し始める」, bliuwe 「…したままでいる」, komme 「…することになる」 ((5)(f)「…されるようになる」との区別に注意), ophâlde 「…し終わる」, plichtsje/pliigje 「…するのが常である」, reitsje 「…することになる」

It *begûn te reinen*. 「雨が降りだした」(beginne) (ULI'S, B 1: 19 変更)

It *begjint te waaien*. 「風が吹き始めます」(beginne) (ULI'S, B 4: 8)

Ik *kom* it wol *te witten*. 「私はそのことがわかるようになりますと思います」(komme) (Bosma-Banning 1981²: 55)

Der *komt* ek noch mear wyn *te stean*, benammen by de kust lâns en yn it waadgebiet. 「とくに海岸沿いやヴァート地帯(=北海の海岸沿いの干潟地帯)では、風がさらに強く吹くようになるでしょう」(komme) (Bangma 1993²: 73)

Dêr *komst* moai *te sitten*. 「そこなら君は暮らしやすいことになるよ」(komme) (Visser 1985: 904)

Dêr *komt* fansels hiel wat by *te sjen*. 「それにはとてもたくさん見るべきものが加わる(=ある)でしょう」(komme) (ULI'S, B 17: 22)

Sy *plichte* hjir gauris *te kommen*. 「彼女はここによく来たものだ」
(*plichtsje/pliigje*) (Zantema 1984: 761 変更)

- (b) 語順「話法・アスペクト動詞+te-第2不定詞」とte-第2不定詞の用法
この語順のte-第2不定詞の用法は動詞用法であり、右枠で動詞群を形成すると、te-第2不定詞は「オーヴェルディープ(Overdiep)の法則」 (§ 99 (3)) に従って右側(後ろ)へ外置される。

Dochs binne der út 'e dyk dolde Friezen dy't by skriftlik gebrûk mar gjin erch yn dit hollânisme *lykje te hawwen*. 「しかし、生粋のフリジア人の中には文章を書くときにこのオランダ語法に気がついていないような人々もいる」(*lykje*) (Tamminga 1973: 214 変更)

Lês dat formulier *foar't jo begjinne te skriuwen*. 「書き始める前にその用紙に目を通しなさい」(*begjinne*) (ULF'S, C 10: 11)

Sadree't it *begjint te winterjen*, wurdt der praat oer dizze Fryske iismaraton. 「冬になるとすぐに、このフリースラントのマラソンのことが話題になる」(*begjinne*) (ULF'S, B 5: 7)

Dêr is er oan syn dea ta *bleaun te wenjen*. 「そこで彼は死ぬまで住み続けた」(*bliuwe*) (Stienstra 1982: 47)

Dykstra frege oft der noch net ris besjoen wurde koe oft de dyk net noch wat fierder fan it doarp ôf *komme koe te lizzen*. 「ディクストラはその道がもう少し村から離れたところに位置するようになることができるかどうか、まだ検討される余地はないかと質問した」(*komme*) (ULF'S, C 8: 12)

- (c) その他の語順とte-第2不定詞の用法

上述の語順はすべての場合に当てはまるわけではない。次の用例ではte-第2不定詞te wittenがアスペクト動詞kommeの左側(前)に置かれている。

Hy seit dat se dat *te witten kaam*. 「彼は彼女にはそれがわかるようになったと言っている」

このte wittenはte-第2不定詞の前置詞句用法の例と言える。つまり、te

witten komme は本来、動詞用法の te-第 2 不定詞が意味的に「わかるようになる」(エ. realize)という慣用語として定着し、前置詞句用法に移行した例と考えられる ((7)「te-第 2 不定詞+{gean/wêze}」参照)。

☞ te witten dwaan 「理解させる」も同様である。

De boargemaster *die te witten* dat dy saak noch net útiten wie. 「市長はその件がまだ片付いていないことを周知させた」(ULI'S, C 8: 12)

なお、De Haan (1987: 68) は te witten komme, te witten dwaan の語順を孤立したイディオムの場合として考察の対象から除外している。

他のアスペクト動詞でも同様である。「komme+te-第 2 不定詞」の例。

Hy seit dat se by him *kaam te sitten*. 「彼は彼女が自分のそばにすわったと言っている」

この用例の第 2 不定詞 te sitten は、厳密には動詞用法と文用法(副詞用法)の 2 通りに解釈できる。動詞用法では、komme は「…することになる」という意味のアスペクト動詞で非対格動詞(能格動詞, エ. unaccusative)であり、主語は非動作主である。by him 「彼のそばに」は sitte 「すわっている」と結びつき、「彼女は偶然、彼のそばにすわる (by him sitte) ことになった (kaam)」と解釈される。一方、文用法(副詞用法)では、komme は「来る」という意味の運動動詞(エ. verb of motion)で非能格動詞(エ. unergative)であり、主語は動作主である。by him 「彼のそばに」は komme 「来る」と結びつき、「彼女は意図的に、すわるために (te sitten) 彼のそばに来た (by him kaam)」と解釈される。次例についても同様である。

Nei myn trouwen *bin ik hjir kommen te wenjen*. 「結婚後、私はここに移り住みました」(ULI'S, C 15: 18)

i) 動詞用法

komme 「…することになる」、アスペクト動詞、非対格動詞(能格動詞)、非動作主主語、hjir wenje 「ここに住む」

「結婚後、私はここに住むようになりました」

ii) 文用法(副詞用法)

komme 「来る」、運動動詞、非能格動詞、動作主主語、hjir komme 「こ

こに来る」

「結婚後、私は住むためにここに来ました」

同様に, bliuwe も非対格動詞で主語が非動作主の場合には「…したままでいる」という意味のAspect動詞であり, te-第2不定詞は動詞用法と解釈される。一方, 次例のように非能格動詞として用いて主語が動作主である場合には, 「とどまる, 滞在する」という意味のふつうの動詞になり, te-第2不定詞は文用法(副詞用法)と解釈されることになる。

Bliuwe se ek te iten? 「あの人たちも食事をしていくのですか」

Ik bliuw hjir jûn te iten. 「私はここにて夕食をすませます」(ULI'S, B 15: 21)

te-第2不定詞の動詞用法, 前置詞句用法, 文用法(副詞用法)は本来, 互いに異質だが, 微妙な意味と語順の差を伴って同時に見られることがある。

(4) 「{stean/sitte/lizze/hingje/rinne}+te-第2不定詞」(姿勢動詞進行形)

(a) まとめ

身体的な姿勢(ポーズ)を表わす次の五つの動詞, すなわち「姿勢動詞」(エ. postural verb), stean「立っている」/sitte「すわっている」/lizze「横になっている」/hingje「ぶら下がっている」/rinne「歩いている」には, 語彙的に継続Aspect(エ. durative aspect)の意味が備わっている。この五つの姿勢動詞を te-第2不定詞とともに用いた「姿勢動詞構文」は, 進行形の表現になる。これを「姿勢動詞進行形」(エ. postural verb progressive)と呼ぶ。これは「前置詞句進行形」 (§ 96 (8)) とともに西フリジア語の代表的な進行形表現である。

ただし, 姿勢動詞はAspectの意味と同時に, 姿勢にかんする語彙的意味を保っている (Van der Woude 1971: 141)。たとえば, sitte「すわっている」を用いた次例では, 「すわっている」ことが条件になる。

Hy sit te skriuwen. 「彼は(すわって)書いている」(ULI'S, C 15: 17)

この点で, 上記の五つの姿勢動詞は進行形の助動詞として十分に発達しているとは言えない。

以下に個々の用例を示す。

① *steane*+*te*-第2 不定詞

Stean dêr net te laitsjen. 「そこで（立って）笑っているな」(ULI'S, C 17: 19)

Wy steane by de bushalte te wachtsjen. 「私たちはバス停のところで（立って）待っています」(ULI'S, C 18: 11 変更)

Wy stiene te wachtsjen op 'e trein. 「私たちは電車を（立って）待っていた」(Bangma 1993²: 96)

Hy stie faak nei it silen te sjen. 「彼はよくヨット競技を（立って）見ていた」(Bosma-Banning 1981²: 113)

② *sitte*+*te*-第2 不定詞

Efkes letter sitte se lekker te iten. 「しばらくすると、彼らはおいしそうに（すわって）食事をしている」(ULI'S, A 11: 3)

Hja sieten rêstich te praten. 「彼らは静かに（すわって）話をしていた」(ULI'S, B 18: 7)

Sitte jo te wachtsjen? 「あなたは（すわって）待っているのですか」(Bosma-Banning 1981²: 56)

③ *lizze*+*te*-第2 不定詞

Jûns lei er op bêd te bidden, want hy leaude yn God en hope al yn 'e himel te kommen. 「夜になると彼はベッドで（横になって）祈っていました。というのは、彼は神様を信じていて、ちゃんと天国に行けるようにと願っていたからです」(ULI'S, B 20: 10)

It lange gers leit yn sweeën efter har op it lân te droegjen. 「長い草は刈り取った束になって地面に（横たえて）干してある」(ULI'S, C 12: 7)

④ *hingje*+*te*-第2 不定詞

De druven hongen te rypjen yn 'e sinne. 「ブドウは日差しの中で（垂れ下って）熟していた」(Ebert/Hoekstra 1996: 83 変更)

⑤ *rinne*+*te*-第2 不定詞

It jongfee rint fredich yn de achte te weidzjen. 「若い家畜が牧場での

んきに (歩きながら) 草を食べている」(ULI'S, C 10: 21)

「前置詞句進行形」(oan 't+te-第2不定詞+wêze)とは異なって、「姿勢動詞進行形」では主語が動作主以外の表現も可能である。

It jonkje leit te sliepen. 「男の子は (横になって) 寝ている」(Ebert / Hoekstra 1996: 84 変更)

⇔*It jonkje is oan 't sliepen. 「男の子は寝ている」(ib. 84 変更)

It wetter stiet te sieden. 「お湯が煮立っている」(ib. 84)

⇔*It wetter is oan 't sieden. 「同上」(ib. 84)

時間を示す副詞成分がついて動作の継続を表わす場合にも、「姿勢動詞進行形」は使うことができる。

It bern siet twa oeren lang allinnich te boartsjen. 「子供は2時間の間、ずっとひとりで (すわって) 遊んでいた」(ib. 90 変更)

⇔*It bern wie twa oeren lang allinnich oan 't boartsjen. 「子供は2時間の間、ずっとひとりで遊んでいた」(ib. 90 変更)

☞ オランダ語で対応するのは「{staan/zitten/liggen/hangen/lopen}+te-第2不定詞」である。西フリジア語とは異なって、姿勢動詞は「姿勢」の意味が薄れており、アスペクトの機能を発達させている (Van der Woude 1971: 141)。

(b) 語順「steane など+te-第2不定詞」とte-第2不定詞の用法

進行形表現としての上記の構文は、右枠では「{steane/sitte/lizze/hingje/rinne}+te-第2不定詞」の語順になる。この場合の姿勢動詞は姿勢にかんする語彙の意味が背景に退いており、おもにアスペクトの意味を表わす。つまり、後述する (d) とは異なって非対格動詞であり、主語は動作主としての性格が薄い。

Ik ha in oere by him stien te praten. 「私は彼のところで1時間立ち話をしていた」(ULI'S, C 17: 19)

Doet er by de twadde bocht stie te sjen, krige er ynienen sin oan swimmen. 「二つ目のカーブした場所を見ている (=立って見ている) と、彼は突然、泳ぎたい気持ちになった」(Bosma-Banning 1981²: 61)

Minsken dy't sûntsjes sitte te praten as der oaren by binne, binne net

fatsoenlik. 「ほかの人たちが話の輪の中にいるときにひそひそ話をする人は、礼儀正しくない」(ULI'S, C 7: 12)

これは(3)の「skine+te-第2不定詞」などと同様に、「オーヴェルディープの法則」 (§ 99 (3)) によって te-第2不定詞が外置された構文と考えられる。つまり、te-第2不定詞の動詞用法の例である (Hoekstra 1997: 93ff.)。したがって、名詞句目的語を伴う動詞句型の構文を示し、名詞抱合も起こらない。

Hja seit dat er op bêd de bibel lei te lêzen. 「彼女は彼がベッドの上で(横になって)聖書を読んでいたと言っている」

Hja seit dat er in brief siet te skriuwen. 「彼女は彼が手紙を(すわって)書いていたと言っている」(Hoekstra 1997: 94 変更)

Hja seit dat er ôf stie te waskjen. 「彼女は彼が(立って)皿洗いをしていたと言っている」(ib. 94 変更)

上記の最初の用例について言えば、「彼が何をしていたかと言えば、それはベッドの上で聖書を読んでいたということである。そのとき、彼は横になっていた」という解釈になる。つまり、「ベッドの上で聖書を読む」(op bêd de bibel te lêzen) が中心的な意味であり、「横になっていた」(lei) は付帯動作を副詞的に添えているにすぎない。

(c) 語順「te-第2不定詞+stean など」と te-第2不定詞の用法

これとは逆の語順が見られることもある。たとえば、次例では両方の語順が可能である。

Hja seit dat de wask {hong te droegjen/te droegjen hong}. 「彼女は洗濯物が(掛けて)干してあったと言っている」(Hoekstra 1987: 38 変更)

Hja seit dat er {lei te sliepen/te sliepen lei}. 「彼女は彼が(横になって)寝ていたと言っている」(ib. 38 変更)

Hja seit dat er {siet te lêzen/te lêzen siet}. 「彼女は彼が(すわって)読書をしていたと言っている」(Hoekstra 1997: 93 変更)

「te-第2不定詞+stean など」の語順は慣用句に多く見られ、te droegjen hingje 「洗濯物が干してある」、te sliepen lizze 「寝ている」、te lêzen sitte 「読書している」はそれぞれ固定した表現であり、te-第2不定詞に任意の動詞

を用いることはできない。また、この語順は名詞句目的語がない場合に限られる（つまり、名詞抱合を伴わない動詞句型構文は不可能である）。

Hja seit dat er fan 'e moarn yn 'e bibleteek *in tydskrift* {*siet te lêzen* / **te lêzen siet*}。 「彼女は彼が今朝、図書館で（すわって）雑誌を読んでいたと言っている」（Hoekstra 1997: 94 変更）

「te-第2 不定詞+stean など」の語順の te-第2 不定詞は姿勢動詞と密接に結びついており、分離動詞の分離成分に似たものになっていると考えられる。つまり、(7) の「…しに行く」という意味の「te-第2 不定詞+gean」と同様に、te-第2 不定詞の前置詞句用法の例である。

(d) 語順「stean など+te-第2 不定詞」（名詞抱合：有）と te-第2 不定詞の用法

この構文の語順には第3のタイプがある。これは(b)と同じように見えるが、本質的に異なる。なぜなら、次の例のように、目的語は名詞抱合によって第2 不定詞に取り込まれ、名詞句として現われず、動詞句型構文を形成することはないからである。

Hja seit dat er op bêd *lei te bibellêzen*. 「彼女は彼がベッドの上で聖書を読みながら横になっていたと言っている」

Hja seit dat er *siet te briefskriuwen*. 「彼女は彼が手紙を書きながらすわっていたと言っている」（Hoekstra 1997: 94 変更）

Hja seit dat er *stie te ôfwaskjen*. 「彼女は彼が皿洗いをしながら立っていたと言っている」（ib. 94 変更）

意味的にも、この場合の姿勢動詞は(c)と異なってアスペクト的意味は表わすが、それは姿勢動詞に固有の語彙的アスペクトによる。むしろ、それよりも姿勢にかんする語彙的な意味が強く前面に出ている。つまり、非能格動詞であり、主語は動作主である。te-第2 不定詞は副詞的にはたらいっており、付帯動作を添えるにすぎない。

上記の最初の例について言えば、「彼が何をしていたかと言えば、それはベッドの上で横になっていたということである。そのとき、彼は聖書を読んでいた」という解釈になる。つまり、「ベッドの上で横になっていた」（op bêd

lei) ことが中心的な意味であり、「聖書を読む」(te bibellêzen) は付帯動作を副詞的に添えるにすぎない。

したがって、これは「te-第2 不定詞の文用法(副詞用法)」の例であると言える(Hoekstra 1997: 93ff.)。te-第2 不定詞の te は前置詞的であり、第2 不定詞は名詞用法であって、場所を示す副詞成分(op bêd「ベッドの上で」)があるために姿勢動詞(lei「横になっていた」)と強く結びつくことができず、副詞的に添えられるにすぎないと考えられる。

このように、第2 不定詞の文用法(副詞用法)は前置詞句用法とは本来、異質であるが、同時に相互に関係し、さらに動詞用法とも関係が認められる。第2 不定詞の文用法(副詞用法)には前置詞句用法ないし動詞用法からの移行としてとらえられる場合もあると言える。

☞ 「oan 't+te-第2 不定詞+wêze」構文と違って、「stean など+te-第2 不定詞」構文では、動詞句型構文を示す場合に分離動詞はふつうに分離することができる。これは (§ 96 (8)) で述べたように、oan 't よりも te のほうが不定詞標識として発達しているためと考えられる。

Hy wie in hjerring { *op oan 't iten/oan 't opiten }. 「彼はニシンを平らげているところだった」(Ebert/Hoekstra 1996: 83 変更)

Hja stie de panne { ôf te waskjen/*te ôfwaskjen }. 「彼女はフライパンを(立て)洗っていた」(ib. 84 変更)

(e) 「{stean bliuwe/sitten gean など}+te-第2 不定詞」と te-第2 不定詞の用法

この構文は「te+第2 不定詞」が stean bliuwe「立ちどまったままではいる、立ち続ける」/sitten gean「すわる、腰を下ろす」の付帯動作を表わし、副詞的にはたらいっている。stean bliuwe/sitten gean は非能格動詞であり、主語は動作主である。次例のように、te-第2 不定詞は外置されており、これはte-第2 不定詞の文用法(副詞的用法)の例であると言える。

De hûn bliuwt hjir stean te wachtsjen. 「犬はここで立って待ち続けている(=待つために立ち続けている)」(ULI'S, B 15: 21)

Us pake giet altyd by de kachel sitten te krantsjen. 「祖父はいつも新聞を読むために暖炉のそばに腰を下ろす」(ULI'S, B 15: 21)

De skipper *wie* op 'e dyk *stean bleaun te praten*. 「船乗りは堤防の上で話をしながら立ちどまっていた」(ULI'S, B 20: 22)

(5) 「te-第2 不定詞+wêze」(受動・可能/必然)

(a) まとめと用例

この構文は受動の意味で用い、可能「…され得る」・必然「…されるべきだ」の意味を伴う。この te-第2 不定詞は *wêze* (オ. *zijn*/ド. *sein*/エ. *be*) とともに述語を形成し、形容詞派生接尾辞 *-ber* 「…され得る」(オ. *-baar*/ド. *-bar*/エ. *-able/-ible*) で置き換えてもほぼ同じ意味になる。したがって、この te-第2 不定詞は形容詞的用法に分類される (De Haan1987: 69ff.)。

動作主は明示されないことが多いが、不可能ではない。

Hja seit dat dit verhaal *troch Pyt net te begripen is*. 「彼女はこの話はピトによっては理解され得ないと言っている」(De Haan 1987: 69 変更)

第2 不定詞には知覚・認識の意味の動詞を用いた用例が目立つ。語によっては *sjen* 「見る, 理解する」— *te sjen wêze* 「見える, わかる」— *sjen litte* 「見せる, 理解させる」のように、態 (エ. *voice*) にかんする関連表現を形成することもある。以下にいくつか用例を示す。

Is dêr fierder noch wol wat te belibjen? 「そこではそのほかにまだ何か体験できる (= 体験され得る) ことはありますか」(Bangma 1993²: 176)

Ek dat is wol te ferklearjen. 「そのこともたぶん説明できる (= 説明され得る) だろう」(Breuker et al. 1992: 17)

De antwurden binne te finen op it antwurdblêd. 「解答は答のページに出ています (= 見られ得る)」(ULI'S, B 19: 5)

Hja *wie* net mear *te kennen*. 「彼女は面影がなかった (人が変わった = 再び認識され得なかった)」(Zantema 1984: 486)

It is noch helendal *net te sizzen* wa't hjir as bêste útkomt. 「だれが1位になるかは、まだ全く言えない」(Bangma 1993²: 146 変更)

Dat is te sjen oan de wurden dy't er brûkt. 「それは彼が使っている言葉からわかる」(ULI'S, B 11: 24 変更)

Yn it ferline *binne* noch wol spoaren fan sa'n beynfloeding *te sjen*.
「過去にはまだそのような影響の痕跡が見られる」(Breuker et al. 1992: 17)

Der *wie* net ien *te sjen*. 「だれも見当たらなかった」(ULI'S, B 18: 21 変更)

Yn 'e beammen *binne* ek wat bisten *te ûntdekken*. 「木々の間には獣たちも何頭か見つけられる」(ULI'S, B 7: 7)

知覚・認識の意味以外の動詞を第2不定詞に用いた例もある。以下にその用例を示す。

Kofjemolke is lekker yn 'e kofje, mar sa *is* it net *te drinken*. 「コーヒー用のミルクはコーヒーに入ればおいしいが、そのままでは飲むに耐えない」(ULI'S, B 10: 7)

It *is te dwaan*. 「それは実行可能だ」(Zantema 1984: 208)

Der *is* in protte *te dwaan*. 「たくさんやるべきことがある」(Visser 1985: 151 変更)

Dat *is* net *te dwaan*. 「それはするべきではない(ふさわしくない)」(Visser 1985: 151)

Der *is* gjin hûs mei jimme *te hâlden*. 「あんたたちはもうどうしようもないわね(=あなたたちと保たれるべき家はない。子供に向かって)」(Bangma 1993²: 74)

Alle boeken dy't mei Fryslân te krijen hawwe, *binne hjir te lienen*. 「フリースラントと関係があるすべての本がここで借りられる」(ULI'S, C 16: 22)

Dêr *is* gjin salve oan *te striken*. 「それにつける軟膏は無い(=それにたいしてはなすべきことがない)」(Zantema 1984: 842)

オランダ語では「te-不定詞+zijn」、ドイツ語では「zu-不定詞+sein」が対応する。英語の「be+to-不定詞」はおもに能動態の意味になる点で異なる。

(b) 副詞用法の形容詞+te+第2不定詞+wêze

te-第2不定詞の直前に副詞的に用いた状態の意味の形容詞をつけて、可能

性の程度を表わすことがある。これは副詞用法の形容詞が後続する形容詞を修飾するのと同様である。たとえば、次の用例で ‘…is dúdlik te sjen」は「はっきりわかる」の構造は「[明確に (dúdlik) 理解可能 (te sjen)] である (is)」であり、「*[理解する (ため/場合) には (te sjen)] 明確である (is dúdlik)」ではない。

De gefolgen fan dy nije foarskriften *binne dúdlik te sjen*. 「その新しい規定の結果ははっきりわかる」(dúdlik「明確な」→「明確に」)(ULF'S, C 14: 13)

It is feest yn it doarp. Dat *is goed te sjen*. 「村はお祭りです。その様子はよくわかります」(goed「良い」→「良く」)(ULF'S, A 17: 7)

Yn oarmans boeken *is it tsjuster te lêzen*. 「他人の本は暗くて読みにくい (= 他人の評価は慎重に。ことわざ)」(tsjuster「暗い, 不明確な」→「暗く, 不明確に」)(Beintema 1990: 20)

(c) 叙述用法の形容詞 + wêze + om…te-第2 不定詞

注意が必要なのは、第2 不定詞が補文標識の om ((9), (2)(c)) を伴った「形容詞 + wêze + om…te-第2 不定詞」の構文である。この場合、形容詞は副詞用法ではなく、叙述用法とみなされる。つまり、「om…te-第2 不定詞」は副詞成分としてはたらく一種の前置詞句であると考えられ、「…するのに…である」という意味である。たとえば、次の用例で ‘is…slim om oan te learen」の構造は「[習得する (ため/場合) には (om oan te learen)] 困難である (is slim)」であり、「*[困難に (slim) [習得可能 (om oan te learen)]] である (is)」ではない。この om は省略できない。

De útspraak fan in frjemde taal, likefolle hokker, *is slim [om oan te learen]*. 「外国語の発音は、どの言語だろうと、習得するのはむずかしい」(Breuker 1984: 17)

Dizze fioele *is gaadlik [om der sonates op te spyljen]*. 「このヴァイオリンは (それで) ソナタをひくのに適している」(Hoekstra 1997: 34)

この構文は英語の「tough 構文」に相当する。

次の構文にも注意 (§ 61 (6)(d))。

Bedoarne kofjemolke is hielendal [*om fan te grizen*]. 「腐ったコーヒー用のミルクはほんとうに嫌気がする」(grize「嫌気がする(fan…に)」(ULI'S, B 10: 7 変更)

(d) 動詞群の語順「te-第2不定詞+wêze」

右枠では「te-第2不定詞+wêze」がこの語順で動詞群 (§ 99) を形成する。これは「形容詞+wêze」の語順と同じであり、te-第2不定詞が形容詞に相当する形容詞用法とみなせば理解できる。この語順は「オーヴェルディープ (Overdiep) の法則」 (§ 99 (3)) に反しているが、「te-第2不定詞+wêze」が典型的な動詞群を構成しているのではなく、「形容詞+wêze」と同等の形容詞構文であると理解すれば説明がつく。

i) Wy sjogge alles wat der *te sjen is*. 「私たちは見られるものはすべて見えています」(ULI'S, B 16: 13)

Dy't net *te rieden is*, is net te helpen. 「忠告できない (= 忠告され得ない) 者は助けられない (= 助けられ得ない)」(Zantema 1984: 814)

ii) Yn 'e tekst wurdt praat fan allegear dingen dy't yn Fryslân net *maklik te finen wêze* sille. 「テキストではフリースラントでは簡単には (maklik) 見つからないようなものばかりが話題になっている」(ULI'S, B 20: 22)

Dat soe sjoen de lizzing hiel *skoan te begripen wêze*. 「そのことは位置を考慮すれば、とても良く (skoan) 理解できよう」(Breuker et al. 1992: 17)

(e) 分離動詞の分離：可

この構文の te-第2不定詞は、右枠では (2) の制御動詞や (3) の繰り上げ動詞と同様に通常の動詞句を形成し、分離動詞は分離成分と動詞の間に te が入って分離する (名詞抱合の有無は名詞句目的語が主語として現われるので対象にならない)。

Wy sille in tal foarbylden jaan mar in feste regel *is* hast net *ôf te lieden*. 「私たちは数多くの例を挙げようと思いますが、確固たる規則はほとんど導き出せません」(分離動詞 *ôf|liede* 「派生する」)(ULI'S, C 5:

13 変更)

(f) その他の関連表現

wêze を他の動詞に置き換えた関連表現がある。コブラ動詞(連結詞)としてはたらく *falle/steane/komme/wurde* がその例である。とくに能動態の意味の「{*komme/steane*}+te-第2不定詞」((3)(4))とは区別することが必要である(語順にも注意)。

① te-第2不定詞+*falle* 「…され得る, …されるべきだ」

Dat falt net te ûntkennen. 「それは否定できない」

Der falt yn dizze lieten gâns te priizgjen. 「これらの歌には称賛すべきことがたくさんある」(WFT 1988/5: 19 正書法変更)

Elk wurd hat wol syn funksje yn de sin, mar de measten hawwe in nauwere, eigen relaasje mei ien of mear oare wurden yn de sin, sadat in sin ornaris yn groepen te ferdielen falt. 「どの語にも文中では自分の役割があるが、ほとんどの語は文中のひとつあるいはいくつかの語とより密接な独自の関係があるので、文はふつう複数のグループに分けられることになる」(Boersma/Van der Woude 1980²: 62)

② te-第2不定詞+*steane* 「…され得る, …されるべきだ」

Wat stiet my te dwaan? 「私は何をすべきだろうか(=私には何をするのがふさわしいのか)」(Visser 1985: 151)

③ te-第2不定詞+*komme* 「…されるようになる」

(3)(a)② 「…することになる」との区別に注意。

Dêr komt fansels hiel wat by te sjen. 「その場合にはもちろんとてもたくさん見るべきものが出てくるだろう」(ULF'S, B 17: 22)

④ te-第2不定詞+*wurde* 「…されるようになる」

Om 1750 hinne *waard* de ierappel better *te beteljen*. (1750 年頃, ジャガイモがより良く買える(=支払える)ようになった」(ULF'S, B 3: 11)

(g) 「限定詞+te-第2不定詞+名詞」(冠飾句)

te-第2不定詞は *wêze* を欠いて、形容詞の限定用法に準じて名詞を修飾することができる。語尾 *-e* の有無は形容詞と違って自由である。

dy net *te ferjitten(e)* dei 「あの忘れられない日 (=忘れられ得ない日)」
(Hoekstra 1994: 526)

次の文はどれも語尾 -e を伴わない用例である。

Dit binne [*de te bestudearjen* boeken]. 「これが研究すべき (=研究されるべき) 書物です」 (Boersma/Van der Woude 1980²: 79 変更)

Jo sjogge hjir [*de ûnder de bern te ferdielen* giele flachjes]. 「あなたはここに子供たちに配ることになっている (=配られるべき) 黄色の小旗が見えますね」 (ib. 79 変更)

[Dy nij oan *te lizzen* rykswei mei fjouwer banen] sil it doarp yn twaen snije. 「その新しくできることになっている 4 車線の国道は村を二つに切り裂くだろう」 (ULI'S, A 15: 8 変更)

(6) 「名詞句 + *te* - 第 2 不定詞 + *hawwe*」 (可能・適切・必要・義務/必然)

(a) 意味と用法

この構文では第 2 不定詞として現われる動詞は他動詞であり、名詞句はその目的語としてはたらく。「…するべきことがある」という能動態の意味で、「可能・適切・必要/必然」といった多様なニュアンスを表わす。たとえば、次例は文脈によってさまざまに解釈できる。

Wy *hawwe* dat lân *te brûken*. 「私たちはその土地を利用するべく所有している (=利用できる, 利用するのが適切である, 利用する必要がある, 利用する義務・必然性がある)」

以下にその他の用例を示す。

Do *hast* net folle *te dwaan* wol? 「君はすることがそれほどないんだろう?」 (Bosma-Banning 1981²: 22)

Ha jo noch mear *te freegjen*? 「あなたはまだまだもっと聞くことがありますか」 (ULI'S, C 15: 18)

Ik *hie* bygelyks it manfolk *te meunsterjen*. 「私はたとえば男の人たちを検査しなければならなかった」 (WFT 8/1991: 178 正書法変更)

Wa *hat* noch wat *te sizzen*? 「だれがまだ何か言うことができますか」

(Bosma-Banning 1981²: 13)

Ik *haw* in ernstich wurd mei dy *te sprekken*. 「私は君と真面目な話がある」 (ib. 38)

次の例では「…しなければならない」という義務・必然の意味が明確に現われている。

Hja *hiene* har *te hâlden* oan de tsjinstregeling. 「彼らは勤務規定を守らなくてはならなかった」 (ULI'S, B 18: 7 変更)

次は *te tankjen hawwe* 「…を負っている (oan …に), …のおかげだ」という慣用句の用例である。

It Hearrenfean *hat* syn ûntstean *te tankjen* oan it fean, dat fermakke waard ta turf. 「エト・イエレンフェアン(オ・Herenveen「ヘーレンヴェーン」)は泥炭に変質した湿地帯にその成立を負っている」 (ULI'S, B 17: 21)

(b) 動詞群の語順「te-第2不定詞+hawwe」(名詞抱合：無)とte-第2不定詞の用法

この構文では右枠の動詞群の語順は「te-第2不定詞+hawwe」となり、名詞抱合は起こらない。したがって、これは第2不定詞の形容詞用法と言える。

Om tsjin de bruorren en susters medisinemakkers konkurrearje te kinnen, is it needsaaklik, dat in fabryk *wat bysûnders te bieden hat*. 「同業の製薬会社たちと対抗するために、製作所は何か特別なものを提供できることが必要だ」 (ULI'S, C 11: 7)

Heit harke mar amper nei *wat Piter allegearre te sizzen hie*. 「父はピテルの言い分(＝言うべきこと)にまずほとんど耳を貸さなかった」 (ULI'S, C 11: 9)

(c) 注意すべき表現

① *te krijen hawwe* 「関係がある (mei …と)」

Alle boeken dy't mei Fryslân *te krijen hawwe*, binne hjir te lienjen. 「フリースラントと関係があるすべての本がここで借りられる」 (ULI'S, C 16: 22)

It FLMD yn Ljouwert bewarret alles wat *te krijen hat* mei de Fryske

skriuerij. 「リャウエト (オ・Leeuwarden 「レーヴァルデン」) のフリジア語文学博物館文書館 (FLMD) はフリジア語文献にかんするすべてのものを所蔵している」 (FLMD: Frysk Letterkundich Museum en Dokumintaasjesintrum) (ULI'S, B 16: 20)

Rekreaasje *hat te krijen* mei frije tiid. 「レクリエーションは自由な時間と関係がある」 (ULI'S, C 5: 7 変更)

Dêr *hawwe* wy neat mei *te krijen*. 「そのこととは私たちは何の関係もない」 (Zantema 1984: 537 変更)

- ② it te krijen *hawwe* 「わずらう, かかわる, 苦しむ (mei …を・と)」

Hy *hat it dêr tige* mei *te krijen*. 「彼はそのことで大いに悩んでいる」 (WFT 11/1994: 322 正書法変更)

オランダ語やドイツ語では上記の構文に次のものが相当する。

フ. 名詞句+te-第2不定詞+*hawwe* 「…すべきことがある」

te krijen hawwe 「関係がある (mei …と)」

オ. 名詞句+te-不定詞+*hebben* 「同上」

te maken hebben (met …と) 「同上」

ド. 名詞句+zu-不定詞+*haben* 「同上」

zu tun haben (mit …と) 「同上」

英語の「have to-不定詞」構文は不定詞として現われる動詞が自動詞でもよく、話法の助動詞 *must* と並んで義務・必然の意味を明確に表わす点で上記の3言語とは異なる。have to do 「関係がある (with …と)」はこの3言語と共通している。

- ③ 名詞句+te-第2不定詞+*krije* 「…すべきことになる」

hawwe 「持っている」を *krije* 「得る」にすれば、動作や状態の開始を示す表現になる。

Jo *krije* sels it ferhaal fan in oar *te beoardieljen*. 「あなたは自分でほかのだれかの話を判定するべきことになります」 (ULI'S, C 10: 11)

Jo kinne puntsgewiis opskriuwe wat jo op 'e bân *te hearren krijе*. 「あなたはテープで耳にする(=聞くことを得る)ことを逐次、書き取ることができます」 (ULI'S, C 8: 4)

Jo *krije* de tekst yn fragminten *te hearren*. 「あなたはテキストを断片

的に聞くことになります (=聞くことを得る)」(Bangma 1993²: 202)

(7) 「te-第2 不定詞+{gean/wêze/話法の助動詞}」

(a) 意味と用例

3種類の動詞(助動詞)によるこの構文では、te-第2 不定詞が目的としての動作を表わし、その動作を行なうために移動するという方向性を含意する点で共通している。

① te-第2 不定詞+gean 「…しに行く」

これは上の意味をもっとも典型的に表わす構文である。

Nei kofjedrinken *geane* se in eintsje *te farren*. 「コーヒーを飲んだ後で、私たちはちょっと船遊びに行きます」(ULI'S, B 18: 11)

Do *giest* moarn net *te silen*. 「おまえは明日、ヨットをやりに行くんじゃないありませんよ」(ULI'S, B 20: 12)

Geane jimme wol gauris *te sinezen* dan? 「それじゃ、あなたたちは中華料理を食べに行ったりすることもあるの?」(Bangma 1993²: 128)

② te-第2 不定詞+wêze 「…しに出かけている」

「…しに出かけて不在である」という能動態の意味を表わす。「行く」という意味の動詞の過去分詞 (gongen/gien ← gean 「行く」) が省略されたような構文と言える。

De frou *wie te fiskjen*. 「妻は釣りに出かけていた」(ULI'S, B 1: 19 変更)

De boer is *te melken*. 「農夫は乳しぼりに出かけている」

☞ オランダ語では「zijn+不定詞」が対応する。

オ. Moeder is *vissen*. 「母は釣りに出かけて留守です」(ABN 1997²: 1035)

③ te-第2 不定詞+話法の助動詞

話法の助動詞の種類に応じて「…しに {行ける (kinne)/行くつもりだ・もうすぐ行く (sille)/行きたい (wolle)}」などの意味を表わし、①の gean 「行く」が省略された構文に相当する。

Hy *sil te fiskjen*. 「彼は釣りに行くつもりだ (もうすぐ釣りに行く)」

(ULI'S, B 15: 22)

Men *kin te aaisykjen, te fiskjen en te silen*. 「野鳥の卵捜しに行ったり、魚釣りに行ったり、ヨット乗りに行ったりできる」(ULI'S, A 19: 19)

Ik *sil nei hûs te iten*. 「私は食事を取りに家に帰るつもりです」(ULI'S, B 14: 10)

Wy *sille te reedriden*. 「私たちはスケートをしに行く予定です」(Zantema 1984: 862)

Hy *wol te fiskjen*. 「彼は釣りに行きたがっている」(ULI'S, C 15: 17)

Ja, dat wit ik wol, mar ik *woe in dei te winkeljen*. 「ええ、それはわかってるけど、一日、買い物に行きたいのよね」(ULI'S, A 4: 9)

☞ オランダ語では *gaan* 「行く」(フ. *gean*) が現われる。しかし、*te*-不定詞は用いず、*te* のない不定詞を用いる。

フ. Men *kin te aaisykjen, te fiskjen en te silen*. 「野鳥の卵捜しに行ったり、魚釣りに行ったり、ヨット乗りに行ったりできる」(ULI'S, A 19: 19)

オ. Je *kunt gaan eierenzoeken, vissen en zeilen*. 「同上」(ib. 19)

オランダ語の *gaan* は不定詞を伴って近接未来を表わすので、「*gaan*+不定詞」は西フリジア語の「*te*-第2 不定詞+*sille*」に意味的に対応する。この場合にもオランダ語では *te*-不定詞は用いない。

フ. Hy *sil te fiskjen*. 「彼は釣りに行くつもりだ(もうすぐ釣りに行く)」(ULI'S, B 15: 22)

オ. Hij *gaat vissen*. 「同上」(ib. 19)

フ. Wy *sille te reedriden*. 「私たちはスケートをしに行く予定です」(Zantema 1984: 862)

オ. Wij *gaan schaatsenrijden*. 「同上」(Bosma-Banning 1981²: 13 変更)

つまり、この *te*-不定詞の用法はオランダ語には存在しない (§ 96 (4)(c)注)。

(b) 名詞抱合：有，分離動詞の分離：不可

この構文は「名詞句目的語+第2 不定詞」という動詞句を形成せず、*te*-第2 不定詞は名詞句目的語を名詞抱合によって抱合して、複合動詞になる。また、分離動詞も分離しない。これはこの構文の *te*-第2 不定詞に動詞的性格が弱く、名詞的性格が強いことを示している。

Hja seit dat er *te pianospyljen {giet/is/sil}*. 「彼女は彼はピアノ演奏に{行く/行っている/行くつもりだ}と言っている」(*pianospylje* 「ピアノ

をひく」← piano「ピアノ」(op 'e piano「ピアノで」)+s pylje「演奏する」
(De Haan 1987: 71 変更)

⇨*Hja seit dat er *piano te s pyljen* {*giet/is/sil*}. 「同上」(ib. 71 変更)
Ik tink dat er *te oprêden* {*giet/is/sil*}. 「私は彼は掃除をしに {出かける/出かけている/出かけるつもりだ} と思う」(op|rêde「掃除をする(分離動詞)」)(Hoekstra 1997: 86 変更)

⇨*Ik tink dat er *op te rêden* {*giet/is/sil*}. 「同上」(ib. 86 変更)

Yn 'e maitiid *geane* wy nei It Amelân *te aaisykjen*. 「春になると、私たちはアームローン島(オ. Ameland「アームラント島」)へ野鳥の卵探しに行きます」(aaisykje「(野鳥の) 卵探しをする」← aai「卵」+sykje「探す」)(ULFS, A 19: 15)

(c) 動詞群の語順: 「te-第2 不定詞+{gean/wêze/話法の助動詞}」

上例にもあるように、この構文の te-第2 不定詞は(2)の制御動詞や(3)の繰り上げ動詞などとは異なって、右枠では「gean/wêze/話法の助動詞」の左側(前)に置かれ、外置されることはけっしてない。これもこの構文の te-第2 不定詞に動詞的性格が弱く、名詞的性格が強いことを示している。

Gabe *giet te aaisykjen*, wylst syn frou *te boadskipjen giet*. 「妻は買い物に行く一方で、ガーベは野鳥の卵探しにでかける」(ULFS, A 19: 19)
Op plakken wie it wenst, dat as in jong pear *te trouwen gyng*, de freonen soargen dat it hûs klear wie as hja werom kamen. 「田舎の村では若いカップルが結婚式を挙げると、二人が戻る頃に友人たちが家を整えておくのが習慣だった」(ULFS, C 14: 7)

Hja seit dat er *te ôfwaskjen is*. 「彼女は彼は洗浄に出かけていていると言っている」(De Haan 1987: 71 変更)

Juster *ha* wy *te swimmen west*. 「昨日、私たちは泳ぎに行って来ました」(ULFS, C 10: 19)

(d) te-第2 不定詞の前置詞句用法

この構文の te-第2 不定詞は、意味的にも「…という動作を行なう場所へ」(行く (gean)/出かけている (wêze)/行きたい (wolle)) という動作の目的と

方向成分を含意している。つまり、te-第2不定詞は *gean*「行く」の語彙的意味を補充しており、方向を示す前置詞や分離動詞の分離成分である不変化詞に相当する (Tiersma 1999²: 127)。たとえば、*te hierknippen gean*「散髪に行く」の *te hierknippen*「散髪に」は *nei Ljouwert ta gean*「リャウエト (オ・Leeuwarden「レーヴァルデン」) へ行く」の *nei Ljouwert ta*「リャウエトへ」や、分離動詞 *fuort|gean*「立ち去る」の分離成分である不変化詞 *fuort*「離れて」に相当する。この3者は *gean* の左側 (前) に置かれ、外置されない点で共通している (Hoekstra 1997: 86)。

Ik tink dat er {te hierknippen/ nei Ljouwert ta/ fuort} {giet/ is/ sil}. 「私は彼が {散髪に行く/ 行っている/ 行くつもりだ} / {リャウエトへ行く/ 行っている/ 行くつもりだ} / {立ち去る/ 立ち去っている/ 立ち去るつもりだ} と思う」(*hierknippe*「散髪する」← *hier*「髪」+ *knippe*「切る」)

**Ik tink dat er {giet/ is/ sil} {te hierknippen/ nei Ljouwert ta/ fuort}*. 「同上」

以上の事実はこの *te* が不定詞標識ではなく、「…へ」という方向の意味の前置詞 (ド・zu/エ・to) であることを示している。この第2不定詞は名詞用法であり、前置詞 *te* に支配され、「前置詞 *te* + 名詞用法の第2不定詞」という構造になっていると解釈できる。したがって、この *te*-第2不定詞は「*te*-第2不定詞の前置詞句用法」に分類できる (De Haan 1987: 70ff.)。

(e) *te*-第2不定詞の前置詞句用法と文用法 (副詞用法)

ところが、次の文では右枠でこの動詞群が「{*gean/wêze*} + *te*-第2不定詞」という逆の語順で現われている。

Hy wit dat ik altyd nei Ljouwert ta gean te kleankeapjen. 「彼は私がいつもリャウエト (オ・Leeuwarden「レーヴァルデン」) へ洋服を買うに行くことを知っている」(*kleankeapje*「洋服を買う」← *klean*「洋服」+ *keapje*「買う」) (Hoekstra 1997: 98 変更)

Fan 'e moarn hat Hindriks Tsjits by my west te kofjedrinken. 「今朝、ヒンドリクス・チイツが私のところにコーヒーを飲みに来ていた」(*kofjedrinke*「コーヒーを飲む」← *kofje*「コーヒー」+ *drinke*「飲む」)

(ULI'S, B 15: 7)

この構文はともに名詞抱合を起こしている点で *te*-第2 不定詞の前置詞句用法と共通するが、*te*-第2 不定詞が外置を起こしている点で異なっている。

両者の相違は方向・位置（静止した場所）を示す副詞成分 (*nei Ljouwert ta* 「リャウエトへ」、*by my* 「わたしのところに」) の有無に関係している。それがない場合には *te*-第2 不定詞は外置されない。

Ik tink dat er te hierknippen {giet/is}. 「私は彼が散髪に {行く/行っている} と思う」 (Hoekstra 1997: 86 変更)

この用例では *te*-第2 不定詞は *gean/wêze* の意味を補足し、*te hierknippen {gean/wêze}* 「散髪に {行く/行っている}」全体で意味的にひとつのまとまり形成すると考えられる。これはドイツ語の *spazieren gehen* (旧正書法 *spazieren|gehen*) 「散歩する、散歩に行く」に相当し、旧正書法では一部の分離動詞の分離成分として扱われた不定詞である。

ところが、方向・位置を示す前置詞句などの副詞成分があると、これがすでに *gean/wêze* の意味を補足し、*nei Ljouwert ta gean* 「リャウエトへ行く」、*by my wêze* 「私のところにいる」のように全体で意味的にひとつのまとまりを形成してしまう。これは *fuort|gean* 「去る」(オ. *weg|gaaan*/ド. *weg|gehen*) のような分離動詞の分離成分である不変化詞に相当すると言える。したがって、*te*-第2 不定詞はもはや *gean/wêze* と直接的に結びつくことができなくなり、*gean/wêze* の左側（前）に置かれず、右側（後）に外置されると考えられる。

こうして外置された *te*-第2 不定詞は「…のために」という目的の意味を表わし、副詞成分としての性格が強い。主語は動作主であり、動詞は非能格動詞である。Hoekstra (1997: 87ff.) はこの *te*-第2 不定詞を前置詞句用法 (De Haan 1987: 70ff.) から区別して「*te*-第2 不定詞の文用法」(*de sentinsjele te-ynfinityf*, エ. *sentential te-infinitive*) と呼んでいる。ただし、「文」としての *te*-第2 不定詞の性格には議論の余地があると思われ、前置詞句用法からの区別もそれほど明確ではない場合もある。そこで、(1) で述べたように、便宜的にこれを「*te*-第2 不定詞の文用法 (副詞用法)」と言い換えることにす

る。

以上のことは *gean/wêze* を含まない話法の助動詞との組み合わせでも同様である。たとえば、次例の *te*-第2 不定詞はそれぞれ前置詞句用法と文用法（副詞用法）」と考えられる。

Ik sil te iten. 「私は食事に行くつもりです」（前置詞句用法）

Ik sil nei hûs te iten. 「私は食事を取りに家へ帰るつもりです」（文用法（副詞用法））（ULFS, B 14: 10）

このように、第2 不定詞の前置詞句用法と文用法（副詞用法）は本来、別の範疇に属するが、相互関係も認められる。

なお、前置詞句と *te*-第2 不定詞が同時に *gean/wêze* の意味を補足する形で、その左側（前）に現われることはできない。

**Hy wit dat ik altyd nei Ljouwert ta te kleankeapjen gean.* 「彼は私がいつもリャウエトへ洋服を買いに行くことを知っている」

**Fan 'e moarn hat Hindriks Tsjits by my te koffjedrinken west.* 「今朝、ヒンドリクス・チイツがうちにコーヒーを飲みに来ていた」

☞ これは英語で「川へ魚釣りに行く」を *go fishing {at/in} the river* または *go to the river to fish* と言い、**go fishing to the river* とは言わない事実との比較からも理解できる。つまり、*go to the river* 「川へ行く」と *go fishing* 「魚釣りに行く」を合わせた場合、「川へ」と「魚釣りに」の両方を *go* 「行く」と直接結びつけることはできず、どちらかを付加詞（エ. adjunct）として副詞的に表わす必要がある。

ドイツ語では次のように不定詞と *zum*-不定詞で区別して表現する。

Gehen wir heute Abend essen. 「今晚、食事に行きましょう」（*essen gehen* 「食事に行く」）

Gehen wir heute Abend in ein gutes Restaurant zum Essen. 「今晚、良いレストランへ食事に行きましょう」（*in ein gutes Restaurant gehen* 「良いレストランへ行く」）

Essen gehe ich in Susukino. 「食事に私はススキノへ行きます」（*essen gehen* 「食事に行く」）

Zum Essen gehe ich nach Susukino. 「同上」（*nach Susukino gehen* 「ススキノへ行く」）

(8) 「前置詞…te-第2 不定詞」と前置詞の om

(a) 「前置詞…te-第2 不定詞句」(副詞成分)

sûnder「…することなしに」, troch「…することによって」, nei「…した後
に」, ynstee fan「…するかわりに」といった前置詞とともに te-第2 不定詞
句を用いて、副詞的な補文を形成することがある。

[*Sûnder lûd te meitsjen*] gie Saapke nei it achterhûs. 「音を立てずに、
サーブケは裏の離れの方に行った」(ULI'S, B 2: 23)

Men kriget oer it generaal it bêste ynsjoch yn problemen [*troch dy
problemen sels op te lossen*]. 「一般に問題への最良の洞察はその問題
を自分で解くことによって得られる」(ULI'S, C 15: 13)

[*Ynstee fan nei Amsterdam ta te gean*] bleau er thús. 「アムステルダ
ムへ行くかわりに、彼は家にとどまった」(Hoekstra 1997: 134 変更)

(b) 「om…te-第2 不定詞句」(副詞成分)：前置詞の om

「om…te-第2 不定詞句」は「…するために」という意味で用いる。この om
は(a)の前置詞と同様に「…のために」(目的)という明確な語彙的意味を持っ
ており、省略できず、義務的である。この om は補文標識ではなく、(a)と同
様に前置詞とみなすほうが適当と考えられる。

[*Om de opbringst fan it lân te fergrutsjen*] wurdt in protte keunst-
dong brûkt. 「土地の収穫を高めるために、人口肥料がたくさん使用され
る」(ULI'S, B 9: 14)

[*Om skuorbot foar te kommen*], soe mear griente iten wurde moatte.
「壊血病を予防するために、もっと野菜を食べる(＝野菜が食べられる)
必要があるだろう」(ULI'S, B 11: 21)

Men moat ite [*om te libjen*] en net libje [*om te iten*]. 「人は生きるた
めに食べるべきであり、食べるために生きるべきではない(ことわざ)」
(Dykstra 2000: 1151)

Wy wurkje [*om te libjen*], en libje net [*om te wurkjen*] wol? 「私たち
は生きるために働くのであって、働くために生きるわけではないでしょ
う?」(Bangma 1993²: 170)

Wy geane nei it loket ta [*om in kaartsje te keapjen*]. 「私たちはチケットを買うためにカウンターへ行きます」(ULFS, C 18: 11)

De natoer is wichtich foar de minske [*om ta rêst te kommen*]. 「自然は人間にとって安らぎを得る(＝安らぎに至る)ために重要だ」(ULFS, C 9: 16)

Tiisdei kaam de feestkommisje by elkoar [*om te bepraten* wat der allegearre noch dien wurde moat] [*om it feest goed ferrinne te litten*]. 「火曜日に祭りの委員会の人たちが祭りを成功させるために、およそ何かなされなければならないかを話し合うために、集まった」(ULFS, A 17: 12)

As immen [*om in hûs te keapjen*] in protte jild liene moat, wurdt wolris sein dat er in hûs mei in sulveren dek hat. 「ある人が家を購入するために大金を借りなければならない場合、その人は銀の屋根のついた家を持っていると言われることがある」(ULFS, C 2: 13 変更)

De oerheid moat no maatregels nimme [*om it wurk rjochtfeardich te ferdielen*]. 「政府は[雇用を公正に分配するために][方策を取る必要がある]」(「政府は[雇用を公正に分配するための方策]を取る必要がある」)(ULFS, C 13: 14)

次の「om…te-第2 不定詞句」は断り書きの意味の副詞成分である。

Jo binne [*om sa te sizzen*] ûnder de minsken en sitte net allinne. 「あなたは言わば人々の中にいて、ひとりぼっちですわっているのではないのです」(ULFS, C 18: 12)

Myn administrateur, [*om myn boekhâlder ris deftich te beneamen*], prate wat ôf om de priis sa leech mooglik te hâlden. 「私のマネージャー、おかげさ言えば私の帳簿係は、値段をできるだけ低くおさえるために、何か打ち合わせをしました」(ULFS, A 13: 8)

- (c) ‘te+形容詞～om…te-第2 不定詞句’ 「あまりに…なので…できない；…するためにはあまりに…すぎる」(副詞成分)

この「om…te-第2 不定詞句」も副詞的に用いており、(b)と同様に、om は

目的の意味を表わす前置詞に準じて理解できる。ただし、(b)とは異なって、「om…te-第2不定詞句」は「te+形容詞」と意味的に相関関係がある。

Se binne *te beroerd om de skonken te brûken*. 「彼らはあまりに怠惰なので、足を使うことができないほどだ」(ULI'S, A 18: 8)

De bern binne *te beroerd om te rinnen*. 「子供たちは歩くことができないほど怠惰だ」(ULI'S, A 18: 8 変更)

Ik bin *te âld om te silen, te swimmen en te reedriden*. 「私はもう年だから、ヨットも泳ぎもスケートもできない」(ULI'S, A 19: 19)

Ik bin *te wurch om te fytsen*. 「私はくたくたに疲れたので、自転車には乗れない」(Van der Veen/Oldenhof 1990: 46)

(9) 補文標識の om

(a) 前置詞の om と補文標識の om

補文標識の om は副詞成分で用いる前置詞としての om 「…のために」と違って明確な語彙の意味を持たず、母型文の主語・叙述語・目的語としてはたらいっており、補文標識とみなすのが適当である。補文標識の om は「(om…)te-第2不定詞句」を伴う他動詞(制御動詞(2))の場合と同様に省略可能で、義務的ではない。補文標識の om を使えば te-第2不定詞句の初めがはっきりする。文頭では om を省略することが多いが(Tiersma 1999²: 118), それは文頭では te-第2不定詞句の初めを表示するとくに必要がないためと考えられる。

ただし、(2)(c)で述べたように、西フリジア語ではオランダ語に比べて補文標識 om を省略しない傾向がある(Hoekema 1958: 17)。オランダ語では書き言葉で om を省略し、話し言葉で省略しない傾向がある(ANS 1997²: 1111)。次例では om をつけたほうが西フリジア語的で、つけないとオランダ語的な印象を与えることがある。

It is de muoite net mear wurdich [*om dat stealsje op te warmjen*].
「その食べ残しを暖めるのはもはや労力のむだだ」(西フリジア語的)
(Hoekema 1958: 17 正書法変更)

It is de muoite net mear wurdich [Ø dat stealsje *op te warmjen*].

「同上」(オランダ語的) (ib. 17 正書法変更)

以下、補文標識の *om* の用法について個別に説明する。

(b) 主語

[*Om it moai te krijen*] is neat, mar [*om it moai te hâlden*], dat seit wat. 「うまく手に入れることは何でもないが、うまく保持することは価値がある (=何かを語る。ことわざ)」 (Zantema 1984: 537)

次は補文標識の *om* を伴っていない用例である。

[*Jild te winnen*] is in geunst, [*'t goed te brûken*] is in keunst. 「金を得るのは天の恵みだが、それをうまく使うのはひとつの技である」 (Bangma 1993²: 69)

Heit te wurden kin men ha, [*heit te wêzen*] falt net ta. 「父親になることはたやすいが (=持つことができるが)、父親であることはむずかしい (=うまくいかない)」 (Beintema 1990: 58)

「(*om*…) *te*-第2 不定詞句」は主語の場合, 「*it*~(*om*…) *te*-第2 不定詞句」のように言語使用上の理由で仮主語の *it* で置き換えて外置することがある。

It falt net altyd ta [om heit te wêzen]. 「父親であることはいつもうまくいくとは限らない」 (Dykstra 2000: 699)

次は補文標識の *om* を伴う用例である。

It falt net ta [om altyd wenromte te finen foar studinten]. 「学生たちのためにつねに住居を見つけるのは、うまくいくとはかぎらない」 (Bangma 1993²: 80)

It spant wolris [om de fuotten ûnder 't liif te hâlden]. 「両足を胴体の下に保つのは緊張を要することがある (=どんな状況でもしっかりとしていることはむずかしい。ことわざ)」 (Beintema 1990: 47)

It is foar josels tige wichtich [om wat oan sport te dwaan]. 「何かスポーツをすることがあなた自身にとってとても大切です」 (UII'S, C 5: 15)

次は補文標識 *om* を伴っていない用例である。

It is tige wichtich [dy wurden te learen]. 「それらの語を学ぶことがとても重要です」 (ULI'S, C 5: 17 変更)

(c) 目的語

[Heit te wurden] kin men ha, heit te wêzen falt net ta. 「父親になることはたやすいが(=持つことができるが), 父親であることはむずかしい(=うまくいかない)」 (Beintema 1990: 58)

「(om…) te-第2 不定詞句」が目的語として母型文の中央に埋め込まれると、理解が困難になる。そこで、「it (=目的語)～(om…) te-第2 不定詞句」のように、仮目的語の it で置き換えて外置することが多い。

Wy hawwe it altyd prachtich fûn [om mei it iepenbier ferfier te reizgjen]. 「私たちは公共の交通手段で旅行することをいつもすばらしいと思いました」 (ULI'S, C 18: 12)

(d) コブラ動詞(連結詞)の叙述語

「名詞句(=主語) is～(om…) te-第2 不定詞句」のように用いて、主語名詞句の内容を示す。

De bêste stratezjy is [om earst in boadskipslistke te meitsjen]. 「一番良い方策はまず買い物のリストを作ることよ」 (Bangma 1993²: 83)

Ien fan de belangrykste dingen dy't wy foar it Frysk dwaan kinne is [om sa folle mooglik ús brieven yn it Frysk te skriuwen]. 「私たちがフリジア語のためにすることができるもっとも重要なことのひとつは、できるだけたくさん手紙をフリジア語で書くことです」 (Stienstra 1982: 45)

(e) 形容詞の目的語

「形容詞+(om…) te-第2 不定詞句」のように形容詞の目的語としてはたらく用法もある。

Binne jo ree [om ús te helpen]? 「あなたは私たちに手を貸してくれる用意はありますか」 (Bosma-Banning 1981²: 16)

(f) 前置詞目的語

前置詞は原則として「(om…) te-第2 不定詞句」を直接支配できないので、

「der(…)前置詞～(om…)te-第2不定詞句」のように、「相関詞の der」 (§ 55 (2)) で前置詞の目的語であることを示して「(om…) te-第2不定詞句」を外置する。

Der binne fiersten te folle medisinen, om't de farmaseutyske yndustry *der op út* is winst *te meitsjen*. 「製薬会社が利益を上げようと躍起になっているために過剰に多くの薬品がある」 (ULI'S, C 6: 43)

⇔ Alle farmaseutyske fabriken binne *der op út* [*om winst te meitsjen*]. 「すべての製薬会社は利益を上げようと躍起になっている」 (ULI'S, C 6: 9)

☞ 次例では前置詞 fan (オ. van/ド. von/エ. of) が相関詞の der を伴わずに補文標識の om を欠く te-第2不定詞句を直接支配している。

Heit en mem beprate mei de bern it foar en it tsjin *fan* [*in hûs te keapjen* of *in hûs te hieren*]. 「父と母は子供たちと家を買うか家を借りるかの長所と短所を話し合う」 (ULI'S, A 11: 2 変更)

次の用例の mei (オ. met～mee/ド. mit) も同様である。

It leit yn 'e reden dat er net klear is *mei* [*wat nammen te learen fan fûgeltsjes en blomkes*]. 「彼が鳥や花のいくつかの名前を覚えるのを終えていないのは当然だ」 (ULI'S, C 9: 16)

(g) 名詞修飾成分

「名詞+om te-第2不定詞句」としてひとつの文成分を形成し、「om te-第2不定詞句」が名詞を修飾する成分として名詞の内容を示すことがある。

Nei oanlieding fan Stienstra syn wurden nimt it Doarpsbelang *it beslút* [*om in brief te skriuwen*]. 「スティエンストラの言葉を契機として、村議会の手紙を書く決断をする」 (ULI'S, B 11: 15)

Mar de do fûn ek *giin plakje* [*om te sitten*]. 「しかし、鳩はとまる場所を見つけることもできなかった」 (De Arke fan Noach)

Mûglikheden [*om te ûndersykjen*] binne der oer en te folle. 「研究の可能性は余るほど豊富にある」 (De Boer 1985: 264)

上例の sitte 「すわっている、とまっている」は op 「…の上に」、ûndersykje 「研究する」は nei 「…について」という前置詞をそれぞれ必要と

する自動詞である点に注意。

次例では「om…te-第2不定詞句」が名詞句から分離して外置されている。

Der binne noch *fiif twaâlûden* oerbleaun [*om skriuwen te learen*].

「つづりかたを習うべき二重母音が五つまだ残ってしまった」(ULI'S, C 2: 14 変更)

「fan doel wêze + (om…) te-不定詞句」は「…するつもりだ」(doel「目的」)という意味で頻繁に用いる。

Hy is *fan doel* [*om syn hûsgenoaten of freonen der fan te oer-tsjûgjen*] dat se sûner ite moatte. 「彼は家族の人や友人たちにもっと健康な食生活を送る(＝健康的に食べる)べきだと説得するつもりだ」(ULI'S, C 3: 21 変更)

Wannear *binne* jo *fan doel* [*om te kommen*]? 「あなたはいつ来るつもりですか」(Bangma 1993²: 21)

Ik *bin fan doel* [*om trije dagen te bliuwen*]. 「私は3日間いるつもりです」(ib. 21)

(h) 不定代名詞+te-第2不定詞

wat/eat「何か」, neat「何も…ない」, gâns/in protte/in soad「たくさん」, net folle「少ない」などの数量を示す不定代名詞に続けて、これを修飾するte-第2不定詞の用法がある。

Der stiet *net folle te drinken* yn 'e kuolkast. 「冷蔵庫の中にはあまり飲むものがない」

Wat te fertellen is der net. 「何か話をするようなことはない」

Hja hat *in soad te sizzen*. 「彼女は言うことがたくさんある」

Der wie *gâns te dwaan*. 「いっぱいやることがあった」

Der bleau *in protte te winskjen* oer. 「物足りない(＝望むべきこと)がたくさん残った」

Ik haw *neat te kleien*. 「私は文句をつけることは何もない」

不定代名詞を欠く「Ø+te-第2不定詞」もある。これはwat/eat「何か」を意味的に補って解釈することができる。

Doe woe syn baas him net langer *te iten* jaan. 「そのとき飼い主は馬に(=彼に)もう食べるものを与えようとしなかった」(Bosma-Banning 1981²: 27)

「不定代名詞+te-第2不定詞」構文のte-第2不定詞は目的語や前置詞句などの副詞成分を伴うことができず、不変化詞を分離成分として伴う分離動詞にすることもできない。

*Der is neat {*te opdrinken/op te drinken*}. 「飲み干すものがない」
(Prof. Dr. J. Hoekstra の教示による)

ただし、「om…te-第2不定詞」にすればそれが可能になる。

De belestingen kinne ferhege wurde, sadat der *minder* oerbliuwt *om út te jaan* oan oare saken. 「税金が引き上げられ、その結果、そのほかのことに支出する分が少なくなる可能性がある」(ULI'S, C 13: 8 変更)

(10) te-第2不定詞の省略

(a) 「om…te-第2不定詞句」でのte-第2不定詞の省略

客観的用法(D. subjektiver Gebrauch/エ. root modal)の話法の助動詞に支配された第1不定詞が省略できることは、§ 76(3)(4)で述べた。

Ik *moat* moarn nei Amsterdam ta Ø. 「私は明日、アムステルダムに行かなければならない」(第1不定詞gean「行く」)

これに加えて、西フリジア語には「om…te-第2不定詞句」でte-第2不定詞を省略することがあり、「te-第2不定詞の省略」(エ. te-V ellipsis)と呼ぶ(Hoekstra 1997: 127ff.)。これは統語的にte-第2不定詞が省略されたことが明確で、省略された動詞が意味的に復元可能な場合に見られる。運動動詞gean「行く」/komme「来る」がその代表であり、dwaan「する」、hawwe「持っている」、krije「得る」、nimme「取る」、sitte「すわっている」、stean「立っている」などの基本動詞も含まれる。

Se wenje te fier fuort [*om* alle dagen nei hûs Ø]. 「彼らは毎日、家に帰るにはあまりに遠いところに住んでいる」(te gean) (ULI'S, B 2: 15)

Wy sjogge der tsjinoan [*om* de hiele dei binnendoar Ø]. 「私たちは一

日中, 屋内にいるのは良くないと思います」(te sitten) (Hoekstra 1997: 129 変更)

Wat doel hat it [*om* altyd sa healwiis Ø]? 「いつもそんなに馬鹿げたことをするのは何のためなの?」(te dwaan) (ib. 129)

Myn kondisje wie te min [*om* sa'n ein Ø]. 「私の体調はそんな距離に行くには悪すぎた」(te gean) (ib. 137 変更)

Ik mei der net oer [*om* alle dagen spul mei de buorlju Ø]. 「私は毎日, 近所の人たちと喧嘩するのはいやだ」(te hawwen) (ib. 129 変更)

上例では *nei hûs* (gean) 「家へ(帰る)」, *binnendoar* (sitte) 「屋内に(いる)」, *healwiis* (dwaan) 「馬鹿げたことを(する)」, *sa'n ein* (gean) 「そんな距離を(行く)」, *spul* (hawwe) 「喧嘩を(する)」のように, 省略された動詞を修復するための副詞成分や名詞句が残っている。次の用例では *mei* 「ともに」のように分離動詞の分離成分となる不変化詞が残っている。

Hy frege [*om mei* Ø]. 「彼はいっしょに {行つて/来て} いいかと頼んだ」(*mei|gean/mei|komme*) 「いっしょに {行く/来る}」(Sipma 1949a: 51)

It is net nedich [*om in skûtdoek mei* Ø]. 「ふきんを持っていくことは必要ありません」(*mei|nimme* 「持つていく」) (Hoekstra 1997: 129 変更)

- ☞ *te*-第2不定詞の省略を先駆的に指摘した例には Karsten (1946) がある。そこでは, この現象が西フリジア語とオランダ語西フラマン方言 (オ. *West-vlaams*) で共通して観察されることが指摘され, 両言語とも補文標識 *om* の存在を必要とすることが述べられている。

(b) 不定詞一般の省略と意味的条件

te-第2不定詞の省略は, 不定詞一般に共通の意味的条件に基づくと考えられる。それにはまず, 不定詞標識 *te* を伴わない不定詞の省略の代表的な例として, 話法の助動詞に支配された第1不定詞の省略についての考察が示唆的である。上述のように, 客観的用法の話法の助動詞に支配された特定の第1不定詞は省略されることがある。

Ik *moat* moarn nei Amsterdam ta {*gean*/Ø}. 「私は明日、アムステルダムに行かなければならない」

ただし、§ 76 (4)で述べたように、話法の助動詞の主観的用法では第1不定詞の省略は起こらない。言い換えれば、第1不定詞が省略された文の話法の助動詞は客観的用法と解釈される。

Pyt *koe* wol nei Japan ta {*gean*/*Ø}. 「ピトは日本に行くかもしれない」

この違いは意味的に次のように説明される。客観的用法では義務・能力・許可・意志など、個々の話法の助動詞に特有の意味から動作が実現することが含意される。したがって、第1不定詞が省略されても、その存在の必要性が喚起され、意味的条件が満たされれば、復元して解釈され得ることになる。たとえば、*moatte* は客観的用法「…しなければならない」の意味では、nei Amsterdam ta「アムステルダムへ」という方向を示す副詞成分があれば、運動の意味の動作が必要とされることは明らかであり、その意味を補って解釈される。ところが、主観的用法「…にちがいない」の意味では事実の蓋然性の程度だけが問題になり、動作の実現の必要性は喚起されがたい。したがって、省略された第1不定詞は復元して解釈すべき十分な必要性が乏しく、省略できないことになる。第1不定詞が省略された *moatte* では、主観的用法「…にちがいない」よりも客観的用法「…なければならない」の解釈が優先され、話法の助動詞の主観的用法では *te*-第2不定詞の省略は起こらない。両者の差は意味的な観点から見れば、「動作の実現を喚起する必要性」の強さにあると言える。

ちなみに、*moatte* がなくても、次例のように副詞成分だけで発話された文は、発話内効力 (エ. illocutionary force) としての勧誘・義務・命令といった話法的意味を伴って、運動という動作を補って解釈される。このことは話法の助動詞の支配する第1不定詞の省略にも何らかの関連があると考えられる。

Nei Japan ta! 「日本へ行こう、行くのだ、行け」

上記の意味的条件は知覚動詞 (*sjen* 「…するのを見る」など) 構文でも同様

である。つまり、知覚動詞が支配する第2不定詞はすでに実現されている動作を表わすので、動作の実現の必要性を喚起せず、意味的条件が整わないために、te-第2不定詞の省略は起こらない。

Ik *seach* har nei hûs ta {*gean*/* $\emptyset$ }. 「私は彼女が帰宅するのを見た」
(知覚動詞 *sjen* 「…するのを見る」) (Hoekstra 1997: 143 変更)

一方、使役動詞構文 (*litte* 「…させる」) では第1不定詞の省略が起こるが、これは上述の意味的条件に照らして理解できる。

Ik *liet* har nei hûs ta {*gean*/* $\emptyset$ }. 「私は彼女を帰宅させた」

(c) 補文標識の om との関係

te-第2不定詞の省略では、以下に述べるように、(b)と同様の意味的条件がはたらくと考えられ、不定詞一般の省略として共通性があると考えられる。

ただし、te-第2不定詞の省略には意味的条件のほかに統語的条件がある。それは補文標識の om を必要とする点である。te-第2不定詞の省略は補文標識の om を伴わない第2不定詞では起こらない。たとえば、次例のように繰り上げ動詞 ((3)) では te-第2不定詞の省略は起こらない。

Hja *skynt* nei hûs ta {*te gean*/* $\emptyset$ }. 「彼女は帰宅するらしい」 (*skine* 「…らしい」) (ib. 142 変更)

Hja *heart* nei hûs ta {*te gean*/* $\emptyset$ }. 「彼女は帰宅する必要がある」
(*hearre* 「…するのがふさわしい」)

Hja *begûn* nei hûs ta {*te gean*/* $\emptyset$ }. 「彼女は帰宅しはじめた」 (*beginne* 「…しはじめる」)

また、発言・感情・認識の意味の制御動詞 ((2)) は補文標識の om を伴わないが、この場合にも te-第2不定詞の省略は起こらない。

Hy *hopet* nei hûs ta {*te gean*/* $\emptyset$ }. 「彼は帰宅することを望んでいる」
(*hoopje* 「…することを望む」) (ib. 134 変更)

さらに、制御動詞 *freegie* 「…することを頼む」は「(om…) te-第2不定詞句」を伴うが ((2)(c))、それに先行する場合には補文標識の om は用いず、te-第2不定詞の省略の有無もこれに従う。

Hja seit dat er har *frege* [*om* mei him nei Amsterdam ta {*te*

gean /Ø}]. 「彼が彼女に彼といっしょにアムステルダムへ行ってくれと頼んだと彼女は言っている」 (ib. 134 変更)

Hja seit dat er har [mei him nei Amsterdam ta {*te gean*/*Ø}] *frege*. 「同上」 (ib. 134 変更)

さらにまた、「en+第3不定詞構文」 (§ 98) は「om…te-第2不定詞句」と同様の意味を表わすことがあるが、第3不定詞の省略は不可能である。

Wy binne fan doel [*om* nei Amsterdam ta {*te gean*/Ø}]. 「私たちはアムステルダムに行くつもりです」 (ib. 127 変更)

Wy binne fan doel [*en* {*gean*/*Ø} nei Amsterdam ta]. 「同上」 (ib. 131 変更)

一方、明確な語彙的意味を持たない補文標識の *om* とは別に、副詞成分として「…するために」という明確な語彙的意味を持つ前置詞の *om* ((8)) では、*te*-第2不定詞の省略は起こりにくい。*sûnder* 「…することなしに」などの副詞成分を形成する他の前置詞でも、*te*-第2不定詞の省略は起こらない。

Hy stapte yn 'e trein [*om* nei Amsterdam ta {*te gean*/²Ø}]. 「彼はアムステルダムへ行くために列車に乗った」 (ib. 134 変更)

Hy kaam werom [*sûnder* nei Amsterdam ta {*te gean*/*Ø}]. 「彼はアムステルダムへ行くことなく、戻って来た」 (ib. 134 変更)

つまり、*te*-第2不定詞の省略が可能な場合の補文標識の *om* は、母型文の動詞、つまり、「om…te-第2不定詞句」の語彙的主要部 (エ. lexical head) の存在を前提とする。

「om…te-第2不定詞句」は母型文の動詞の補文である必要はない。次のように、名詞修飾語としての「om *te*-第2不定詞」でも *te*-第2不定詞の省略が起こるからである。つまり、「om *te*-第2不定詞句」はそれが補部 (エ. complement) となる何らかの語彙的主要部を持つことを条件とする。この場合、被修飾名詞は動作の実現を喚起する意味的特徴を持っている必要がある。たとえば、*plan* 「計画」、*doel* 「目的」などがその例である。

Har *plan* [*om* nei Japan ta {*te gean*/Ø}] waard fersmiten. 「日本へ行くという彼女の計画は却下された」 (ib. 133 変更)

Ik bin fan doel [om moarn nei Amsterdam ta {te gean/Ø}]. 「私は明日アムステルダムへ行くつもりです」 (ib. 135 変更)

これは、語彙的主要部の存在が「動作の実現を喚起する必要性」という第1不定詞の省略と同様の意味的条件を同時に必要とすることを示している。

以上の事実は、補文標識の *om* と「*om*…*te*-第2不定詞句」の語彙的主要部の存在が *te*-第2不定詞の統語的条件になることを示している。この語彙的主要部の存在は、第1不定詞の省略における話法の助動詞に比肩できる。第1不定詞の省略と *te*-第2不定詞の省略は、統語的にも意味的にも基本的に同じ条件によると考えられる。

ちなみに、「補文標識の *om*…*te*-第2不定詞句」は単独の発話としては成立しない。これは語彙的主要部である母型文の動詞の意味が投影されず、それ自身としては発話内効力を伴わないためと考えられる。*te*-第2不定詞の省略はもちろん起こらない。

**Om nei Japan ta {te gean/Ø}!* 「日本へ行こう、行くのだ、行け」

「*om*…*te*-第2不定詞」はまだ実現されていない動作が問題になっていることを示し、語彙的主要部の意味が投影されることによって、その動作を実現する必要性が喚起され、意味的条件が満たされる。補文標識の *om* が必要なのは、おそらく統語的条件として、第2不定詞が省略された後に残る *te* の「まだ実現されていない動作を表わす」という文法的機能を統語的に抽象的なレベルで吸収または代行するためと考えられる。*te* は音韻的な接語(エ. clitic)であり、ホストとしての第2不定詞がなければ語形的に存在できないので、脱落すると考えられるからである。

一方、前置詞の *om* では動作の実現の必要性が強く喚起されるので、意味的条件は満たされるが、母型文の動詞との関係がないために、省略された *te*-第2不定詞を復元する統語的条件が整わず、*te*-第2不定詞の省略が起りにくいと考えられる。

補文標識の *om* は前置詞の *om* 「…するために」とは異なって、明確な語彙の意味を持たない。*om* は本来、「…を求めて」という目的を表わす前置詞から発達したのであり、摩滅した目的の意味が文法的機能に転化されたと考え

られるものの、補文標識の *om* に目的の意味は認めがたい。ただし、補文標識の *om* は、同じく「…へ、…のために」という方向・目的の意味の前置詞から発達し、オランダ語などと違って西フリジア語では前置詞としての性格を残す不定詞標識の *te* と共起する。*te*-第2 不定詞は(未完了不定詞では)まだ実現されていない動作の標識になる。この点で補文標識の *om* と不定詞標識の *te* は類似した文法的な性格を持っていると言える。第2 不定詞が省略された結果、不定詞標識の *te* が脱落し、補文標識の *om* によって *te* の文法的機能が統語的に吸収・代行される仕組みには、*om* と *te* の上述のような共通性が関与しているのかもしれない。

Hoekstra (1997: 143) は [+Irrealis] (エ. unrealized future) という I の素性が「I の C への移動」(エ. I-to-C movement) によって *om* へ継承されるとしている。

(d) 例外的な動詞

te-第2 不定詞の省略は、話法の助動詞に支配される第1 不定詞の省略に共通する以上のような意味的・統語的条件によって起こると考えられるが、例外的な現象を示す母型文の動詞が多く、その条件をさらに限定する必要性が高い。たとえば、次の動詞は補文標識 *om* の有無との関係にかんして例外的な事実を示す (Hoekstra 1997: 142, 145, 148)。

① *doare* 「あえて…する」、*hoege* (*hoeve*) 「…する必要がある」

この二つの動詞は補文標識の *om* を欠く *te*-第2 不定詞を伴うが、*te*-第2 不定詞の省略が起こる。

Hy doarst net [nei Amsterdam ta {te gean/Ø}]. 「彼はアムステルダムに行く勇気がなかった」(*doare*) (ib. 142 変更)

Hy hoegde net [nei Amsterdam ta {te gean/Ø}]. 「彼はアムステルダムに行く必要がなかった」(*hoege* (*hoeve*)) (ib. 142 変更)

② *bestean* 「あえて…する」、*bepate* 「…するように説得する」、*helpe* 「…することを手伝う」、*slagje* 「…することに成功する」、*twinge* 「…することを強いる」

beslette 「…することを決心する」、*driigje* 「…すると脅す」、*ferjitte* 「…

することを忘れる」, *hjitte* 「…することを命令する」, *wegerje* 「…することを拒む」

以上の動詞は補文標識の *om* を伴う *te*-第2 不定詞句を支配するが、*te*-第2 不定詞の省略は起こらない。

**Jan holp Jantsje [om nei Amsterdam ta Ø].* 「ヨンはヨンチェにアムステルダムスへ行くのを手伝った」 (*helpe*) (Hoekstra 1997: 145 変更)

**Jan twong Jantsje [om nei Amsterdam ta Ø].* 「ヨンはヨンチェにアムステルダムへ行くことを強制した」 (*twinge*) (ib. 145 変更)

**Jan besleat [om nei Amsterdam ta Ø].* 「ヨンはアムステルダムへ行くことを決心した」 (*beslette*) (ib. 148 変更)

**Jan hiet Jantsje [om nei Amsterdam ta Ø].* 「ヨンはヨンチェにアムステルダムへ行くように命令した」 (*hjitte* (*hite*)) (ib. 145 変更)

①については、§ 77 (2)で述べたように、*doare/hoeg* (*hoeve*) は *te*-第2 不定詞のかわりに第1 不定詞を伴うことがあり、話法の助動詞(客観的用法)に近く、そのために *te*-第2 不定詞の省略を起こす考えられる。

②についての説明は困難である。*te*-第2 不定詞の省略の対象となる動詞は話法の助動詞に比べてかなり多く、意味的条件が複雑で、それを満たす程度に差があることと、補文標識としての *om* の統語的機能に差があることなどが考えられるが、本稿では十分な説明をすることができない。

☞ ドイツ語やオランダ語でも話法の助動詞に支配される同種の不定詞は省略可能である。それが許されないのはゲルマン語では英語に限られる(ただし、初期近代英語 (Early Modern English 1500-1700) の時代までは不定詞の省略が起こっていた)。

フ. *Ik moat moarn nei Amsterdam ta Ø.* 「私は明日、アムステルダムに行かなければならない」

オ. *Ik moet morgen naar Amsterdam Ø.* 「同上」

ド. *Ich muss morgen nach Amsterdam Ø.* 「同上」

ス. *Jag måste Ø till Amsterdam i morgon.* 「同上」

エ. **I must Ø to Amsterdam tomorrow.* 「同上」

ただし、上記の言語には不定詞標識を含む不定詞の省略は見られない。

フ. *Bisto klear om mei Ø?* 「君はもういっしょに {行く/来る} 準備ができ

ているか」(Bosma-Banning 1981²: 11)

オ. *Ben je klaar *om mee* Ø? 「同上」

ド. *Bist du bereit *mit* Ø? 「同上」

ス. *Är du färdig Ø *med*? 「同上」

エ. *Are you ready Ø *together*? 「同上」

西フリジア語でも話法の助動詞の主観的用法では不定詞は省略されない。

フ. Pyt *koe wol nei Japan ta* {*gean*/*Ø}. 「ピトは日本に行くかもしれない」
英語では話法の助動詞に不定形がないように、時制(エ. tense)とともに話法(エ. mood)という動詞定形の範疇が統語的に強い影響力を持っている。西フリジア語を含む他のゲルマン語でも主観的用法の話法の助動詞は不定形になりやすく、この点で英語と共通している。一方、周知のように英語では動詞句の省略が起こるが、西フリジア語を含む他のゲルマン語では起こらない。このように、不定詞一般の省略は統語的に時制・話法・一致などの動詞定形の範疇の性格にも依存していると考えられる。

西フリジア語と同様に補文標識 *om* を有するオランダ語では、予想に反して *te*-不定詞の省略は起こらない。これはすでに述べたように、西フリジア語の不定詞標識 *te* がオランダ語の不定詞句標識 *te* と違って、前置詞的性格を示すことがあり、*te*-(第2)不定詞の性格に差があることと関係があるように思われる。

§ 98 第3不定詞(命令形不定詞)とIPI-構文

(1) 「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文

西フリジア語には命令形と語形的に同一の不定詞があり、これを第3不定詞(または、命令形不定詞)と呼ぶ。第3不定詞(命令形不定詞)は並列の接続詞 *en*(オ. *en*/ド. *und*/エ. *and*)の直後に続けて用いる。伝統的にはこれを「*en*+命令形」構文(オ. *en+imperatief-constructie*)と呼び、「IPI-構文」(ラ. *imperativus pro infinitivo*)と称することもある。本稿では「*en*+第3不定詞(命令形不定詞)」構文と呼ぶことにする。

en は並列の接続詞だが、この場合は第3不定詞(命令形不定詞)句を先行する母型文の補文として取り込む役割を果たしており、統語的には従属接続詞としてはたらいっている。*en* に後続する動詞は形態的にはつねに命令形だが、命令の意味はなく、統語的には先行する母型文の補文を構成する不定詞句の不定詞とみなすべきである。しかも、この第3不定詞(命令形不定詞)

は命令形と同様に en の直後に隣接し、主文の語順になるので、枠構造から見れば、第3不定詞（命令形不定詞）は左枠に位置することになる。もしこのいわゆる「命令形」を「不定詞」とみなせば、動詞不定形が右枠にとどまらずに左枠に現われることになり、「動詞定形（＝定動詞）が左枠に移動し、動詞不定形は右枠にとどまる」という英語を除くいわゆる西ゲルマン語に共通の枠構造の原則、つまり「定形非対称性」（オ・finiethheidsasymmetrie）にたいする例外になる（同様の現象として主文を伴う dat (§ 67 (3)) 参照）。このように、この構文は形態的な姿と統語的な振舞いの不一致を示す点で問題点が多い。

- ☞ この構文はオランダ語、ドイツ語、英語には存在しない。この構文の第3不定詞（命令形不定詞）を語形的には「命令形」だが、機能的には「不定詞」とする意見は、すでに Hoekema (1958: 19) に見られる。ただし、De Haan/Weerman (1986) はこれをあくまで「命令形」とみなしている。

(2) 並列型構文

- (a) 論理関係と「前置詞の om…te-第2不定詞句」「…するために」との対応
「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文は「並列型構文」（オ・nevenschikkende constructie）と「従属型構文」（オ・onderschikkende constructie）の二つに分けられる（De Waart 1971）。まず、並列型構文について説明する。以下にいくつか用例を示す。

Do moastst hinnegean [*en meitsje dy saak yn oarder*]. 「君は出かけて行って、その件を片付けなければならない」(meitsje「…にする、作る」(Bosma-Banning 1981²: 135)

Soest safier meirinne wolle [*en draach myn tas*]? 「そこまでいっしょに歩いて、私のカバンを運んでいってくれない?」(drage「運ぶ」)(ib. 135)

Men soe ek hinnegean kinne [*en nim oan dat der twa morfoleksikale regels binne*]. 「別の考え方を取って（＝別の方向に進んで）、二つの形態語彙論的な規則があるとも仮定できよう」(oannimme「仮定

する」) (Visser 1989b: 199 変更)

Hy *plichte* sneons nei de stêd ta te reizgjen [*en sjoch dêr op 'e merk*]. 「彼は金曜日には町に行つて、そこで市場をのぞく習慣があつた」 (Hoekstra 1997: 31 変更)

並列型構文では文字通り *en* を「そして」という意味の並列接続詞と解釈し、先行する動詞句と同じ種類の動詞句を並列させても、ほぼ同じ意味が得られる。たとえば、最初の用例は次のように置き換えてもほぼ同じ意味になる。

① 「*en*+第3不定詞(命令形不定詞)」構文

Do *moatst hinnegean* [*en meitsje dy saak yn oarder*]. 「君は出かけて行つて、その件を片付けなければならない」 (Bosma-Banning 1981²: 135)

② 第1不定詞句の並列

Do *moatst* [*hinnegean*] *en* [*dy saak yn oarder meitsje*]. 「同上」(*hinnegean* 「出かけて行く(第1不定詞)」+*en* 「そして」+*dy saak yn oarder meitsje* 「その件を片付ける(第1不定詞)」)

ただし、*en* の前後の動詞句の間には「動作+動作の目的」の順序で論理関係の存在が必要である。上例は「…するために」という意味の副詞成分としてはたらく「*om*…*te*-第2不定詞句」で言い換えても類似した意味になる。

Do *moatst hinnegean* [*om dy saak yn oarder te meitsjen*]. 「君はその件を片付けるために、出かけて行かなければならない」

したがって、「*en*+第3不定詞(命令形不定詞)句」が先行する動詞句の目的の意味にならない場合には、並列型構文は不可能である。また、「動作の目的+動作」という反対の語順にすることもできない。次の例文はこの点で不自然である(あるいは、「出かけていくために、その件を片付けなければならない」の意味になる)。

²Do *moatst dy saak yn oarder meitsje* [*en gean hinne*].

(b) 埋め込み文の並列-統語的・意味的制約

(a)の用例からわかるように、並列型構文の特徴は互いに独立した動詞句の並列ではなく、共通の話法の助動詞やアスペクト動詞などに埋め込まれた動

詞句が並列されている点である。つまり、埋め込み文の並列である。次例のように、たんに現在形では「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文は使えない。

- ① 現在形と「en+第3不定詞(命令形不定詞)句」の並列：不可

*Do [*giest hinne*] [*en meitsje dy saak yn oarder*]. 「君は出かけて行って、その件を片付ける」(*giest hinne* 「出かけて行く(現在形)」+en 「そして」+*meitsje dy saak yn oarder* 「その件を片付ける(第3不定詞(命令形不定詞))」)

- ② 現在形の並列

Do [*giest hinne*] en [*makkest dy saak yn oarder*]. 「同上」(*makkest dy saak yn oarder* 「同上(現在形)」)

ただし、これは統語的制約というより、むしろ意味的制約としての性格がある。たとえば、次の用例のように話法の副詞 *grif* 「きっと」を使えば、現在形で並列できるという判定がある(De Waart (1971: 4)；ただし、Hoekstra (1997: 45) は最後の用例に「?」をつけている)。

- ③ 「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文

De polysje *soe by him komme* [*en helje him op*]. 「警察が彼のところに来て、彼を連れて行くかもしれない」(*ophelje* 「連れて行く」)(De Haan 1987: 24)

- ④ 現在形の並列

De polysje [*komt by him*] en [*hellet him op*]. 「警察が彼のところに来て、彼を連れて行く」(De Waart 1971: 4)

- ⑤ 現在形と「en+第3不定詞句(命令形不定詞句)」の並列：不可

*De polysje [*komt by him*] [*en helje him op*]. 「同上」(ib. 4)

- ⑥ 現在形・話法の副詞 *grif* 「きっと」と「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文の並列

De polysje [*komt grif by him*] [*en helje him op*]. 「警察がきっと彼のところに来て、彼を連れて行くだろう」(ib. 4；ただし、Hoekstra (1997: 45) の判定は「?」)

次例は現在完了形に「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文を並列させたものだが、話法の副詞 *grif* 「きつと」を伴っているのも、同様に可能であるという判定がある。

Hy is grif nei hûs ta gien [en drink in pantsje tee]. 「彼はきつと家に帰って、お茶を一杯飲んだのだろう」(*drinke* 「飲む」)(Van der Meer 1975: 32 正書法変更)

このように、話法の意味が *en* の前後の動詞句に投影されていれば、「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文はそれほど違和感なく用いることができる。つまり、統語的な埋め込み文の並列でなくても、意味的な埋め込み文の並列であれば、かなり容認度が高いということである。

ただし、埋め込み文でも、ACI-構文を形成する知覚動詞構文と使役動詞構文では「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文は使えない。これは補文の並列以外に両者を関連づけるような意味的な特徴がないためと考えられる。

**Ik seach him in gripe krijen [en fuorje de bargaen].* 「私は彼が熊手を手に取って豚たちにえさをやるのを見た」(*fuorje* 「えさをやる」)(Hoekstra 1997: 33 変更)

**Hja liet har dochter de tún omhakje [en set der pûltsjes yn].* 「彼女は娘に庭に穴を掘って、その中に豆を入れさせた」(*sette* 「置く、据える」)(ib. 33 変更)

統語的制約として重要なのは、*en* の前後の動詞句の主語が同一でなければならない点である。これはこの構文が並列型であることから理解できる。

De polysje soe de misdiediger opslute [en beskermje har]. 「警察は犯罪者を隔離して彼女を保護するだろう」(*beskermje* 「保護する」)(De Haan 1987: 29 変更)

⇔**De misdiediger soe troch de polysje opsletten wurde [en beskermje har].* 「犯罪者は警察に隔離されて(警察は)彼女を保護するだろう」

(c) 「否定+as+第3不定詞(命令形不定詞)」構文

これは「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文に類似した構文であり、「…するほかはない」という意味で用いる。

Hy koe net folle oars dwaan [*as bliuw yn it portyk*]. 「彼はポーチにとどまることのほかに多くのことはできなかった」(bliuwe「とどまる」)(Tamminga 1959: 130)

Hy koe net oars dwaan [*as skriuw dat artikel*]. 「彼は論文を書かざるを得なかった」(skriuwe「書く」)(Van der Meer 1975: 28)

(3) 従属型構文

(a) 従属型構文 (オ. *onderschikkende constructie*) の種類

従属型構文では「en+第3不定詞 (命令形不定詞)」構文は母型文の補部 (エ. *complement*), または一般的に語彙的主要部の補部になる。たとえば, 母型文の主語や他動詞目的語, 前置詞目的語, 形容詞修飾句, 名詞修飾句などである。「en+第3不定詞 (命令形不定詞)」構文をあらかじめ示す仮の代名詞 *it* (オ. *het*/ド. *es*/エ. *it*), *der* (オ. *er*/ド. *da(r)*) または副詞 *sa* (オ. *zo*/ド. エ. *so*) を用いることもある (以下の用例参照)。並列型構文と違って, 話法の助動詞などによる埋め込みや話法の副詞などは必要としない。また, *en* の前後の動詞句の主語は同一である必要はない。

① 母型文の主語 (仮主語代名詞 *it*)

It is net dwaan [en gean der yn dizze ûli och sa djip op yn]. 「この教材ではそのことに深く立ち入るのは適當ではない」(*yngean*「立ち入る, 追求する」)(ULI'S, B 18: 9)

It is net ferkeard [en wiis der noch eefkes op]. 「それを少し指摘しておくことは間違いではない」(*wize*「指摘する」)(Hoekstra 1989: 26)

It is de baas, [en wachtsje de bui mar even ôf]. 「にわか雨が止むのをしばらく待ったほうがいい」(*ôfwachtsje*「(…の) 到来・終了を待つ」)(Boersma/Van der Woude 1980²: 85)

Dan is 't bytiden net sa maklik [en meitsje dan dochs noch in ferslachje], dat de muoite wurdich is. 「そうになると, 苦勞のかいがある報告をわざわざ作成するということは, それほど簡単ではないこともときどきある」(*meitsje*「作る」)

It sil gjin kwea meie [en sis der op dit plak ris in wurd oardeheal fan]. 「それについてこの場で二三述べておくことは悪くはあるまい」(sizze 「言う」)(Tamminga 1973: 213 変更)

② 母型文の他動詞目的語 (仮目的語代名詞 it)

Wy sille ris besykje [en set wat oarsaken op in rychje]. 「私たちは原因をいくつか文章にまとめてみようと思います」(besykje 「…することを試みる」, sette 「置く, 据える」)(ULI'S, C 10: 7)

Wolst my helpe [en typ dit foar my]? 「これを私のためにタイプするのを手伝ってくれない?」(helpe 「…することを助ける」, type 「タイプする」)(Bosma-Banning 1981²: 135)

Ik ried jo oan [en drink net sa folle bier]. 「私はあなたにそんなにビールを飲まないように忠告します」(oanriede 「…することを忠告する」, drinke 「飲む」)(Hoekstra 1997: 31 変更)

仮目的語代名詞 it を伴う用例。

Hy bestie it en begjin mei wat nijs. 「彼はあえて何か新しいことを始めようとした」(bestean 「あえて…する」, begjinne 「始める」)(Zantema 1984: 89)

De manlju doare it wol oan [en helje de boel del]. 「男たちはその大きな物を思いきって下に降ろしてみようとする」(oandoare 「あえて…する」, delhelje 「降ろす」)(ULI'S, B 14: 16)

In húshâlding út de stêd hat it oandoarst [en keapje it spultsje]. 「都市から来た家族が思いきってその小農場を買った」(oandoare 「あえて…する」, keapje 「買う」)(ULI'S, B 14: 13)

Hy weaget it net [en gean der hinne]. 「彼はそこへ行く勇気がない」(waegje 「あえて…する」, gean 「行く」)(Boersma/Van der Woude 1980²: 85)

③ 前置詞の目的語 (仮代名詞 der…前置詞)

Wa't niget hat oan it Aldfrysk en de Fryske taalskiednis, docht der goed oan [en lêe Philippa har dissertaasje mei oandacht]. 「古フリジ

ア語とフリジア語史に興味がある人はフィリパの博士論文を注意深く読むと良い」(dwaan 「する (oan …について)」, lêze 「読む」) (Hofstra 1989: 37)

Ik *prakkesearje der oer* [*en hâld der mei op*]. 「私はよく考えた結果、それをやめようと思う」(prakkesearje 「よく考える (oer …について)」, ophâlde 「やめる」) (Boersma/Van der Woude 1980²: 85)

④ 形容詞修飾 (仮副詞 sa)

Der skine altyd noch minsken te wêzen, dy't in bytsje *skruten binne* [*en stap samar yn 'e bibleteek*]. 「図書館に遠慮なく足を踏み入れることに気遅れするような人々がいまだにいるようだ」(skruten 「臆病な」, stappe 「入る、歩む」) (ULF'S, C 20: 6 変更)

Jo *binne dêrnei by steat* [*en meitsje sinnen mei dy tiidwurden*]. 「それが終われば、あなたはそれらの動詞を使って文を作ることができるようになります」(by steat 「…できる」, meitsje 「作る」) (ULF'S, B 13: 4) 仮副詞 sa を伴う用例。

Hy *wie sa wiis wol* [*en bemuoi him der net mei*]. 「彼は賢明なことに、それにはかかわらなかった (=それにかかわらないほど賢明だった)」(wiis 「賢明な」, jin bemuoie 「かかわる、干渉する」) (Hoekstra 1997: 31 変更)

⑤ 名詞修飾

Sûnt it sluten fan de universiteit fan Frjentsjer yn 1811 hat yn Fryslân *de winsk libbe* [*en stiftsje wer opnij in universiteit*]. 「1811 年にフリエンチェル (オ. Franeker 「フラーネケル」) の大学が閉鎖されて以来、フリースラントでは新たに大学を設立しようという願望が引き続き存在していた」(winsk 「願望」, stiftsje 「設立する」) (ULF'S, B 13: 10)

It idee [*en lis de Lauwerssee droech*] is net alhiel nij. 「ラウエルス湖 (オ. Lauwerszee) を干拓しようという考えはそれほど新しいというわけではない」(idee 「考え、アイデア」, droechlizze 「干拓する」) (Hoekema 1959: 87, De Waart 1971: 19, De Haan/Weerman 1986: 95)

(b) 主語の解釈と「(補文標識の om…) te-第2 不定詞句」との対応

従属型構文の第3 不定詞 (命令形不定詞) の主語は母型文の主語と同一である必要はなく、母型文から制御されて決まる。この構文の「en+第3 不定詞 (命令形不定詞)」構文は、次例のように、補文標識の om による「(om…) te-第2 不定詞句」でほぼ同じ意味に置き換えることができる。

① 「en+第3 不定詞 (命令形不定詞)」構文

It liket my de baas [en gean der sels hinne]. 「私は自分でそこへ行くのがいちばん良いような気がする」(gean 「行く」)(Boersma/Van der Woude 1980²: 72)

Doe't er it weagje doarst hie [en improvisearje in stikje], fielder him in ein frijer. 「一曲あえて即興演奏をしてみようと思ったら、彼は気持ちが自由になった」(improvisearje 「即興演奏する」)(ULI'S, B 19: 26 変更)

② 「(om…) te-第2 不定詞句」

It liket my de baas [om der sels hinne te gean]. 「同上」(ib. 72)

Doe't er it weagje doarst hie [in stikje te improvisearjen], fielder him in ein frijer. 「同上 (om なし)」(ULI'S, B 19: 26 変更)

上例の主語の場合は dat-従属文で置き換えることもできる。

It liket my de baas, [dat ik der sels hinne gean]. 「同上」(Boersma/Van der Woude 1980²: 72)

- ☞ 「en+第3 不定詞 (命令形不定詞)」構文に相当する構文は古フリジア語の時代から観察される。ただし、命令形ではなく、不定詞 (-a) である点と、並列型に限られる点で異なる。この構文で古フリジア語の不定詞が現代西フリジア語で命令形に変わった理由としては、次の要因が考えられる。それは、不定詞句で不定詞が先頭に置かれるのは例外的な語順、つまり、有標の語順なので、生産的な動詞のグループである「je-動詞」では不定詞と命令形が同形であることを利用して、不定詞のかわりに命令形を用いて自然な語順、つまり、無標の語順に転換したという解釈である (Van der Meer 1975: 28)。
- 並列型に加えて従属型が発達した理由としては、不定詞から命令形に転換した結果、en の後の動詞句がその前の動詞句から独立性を獲得し、たんなる並列句から離れて従属句へと変化したことが挙げられる (Hoekstra 1997: 37)。

(4) 命令形と第3不定詞 (命令形不定詞)

命令形と第3不定詞 (命令形不定詞) は語形的には同一だが、上述のように用法は大きく異なる。もうひとつ異なるのは主語の付加である。命令形では主語の人称代名詞や聞き手を表わす固有名詞・親族名称を加えることができる。

Kom {Ø/do/jo/jimme/hy/Pyt/mem} hjir ris! 「ちょっと {Ø/君/あなた/君たち・あなたがた/その人/ピト/お母さん}, ここに来なさいよ」しかし、第3不定詞 (命令形不定詞) ではそれができない。

*Doare jo it oan [en set {Ø/*jo} de diskusje op 'e bân]? 「あなたはその議論を思いきってテーブルに吹き込む気持ちがありますか」*(ULF'S, C 3: 17 変更)

ところで、次例ではそれが可能であるように見える。

It bêste is [en jou do him in boek] (dan jou ik him segaren). 「君が彼に本をあげ(て、それからぼくが彼に葉巻をあげ)るのがいちばん良いことだ」(De Haan/Weerman 1986: 93 変更)

Wy riede Pyt oan [en jou hy heit in boek] (dan jou ik him in CD). 「私たちはピト (=ピトさん、あなた) にたいして、お父さんに本をあげ(て、それから私がピトに CD をあげ)るようにしてくださいねと忠告します」(ib. 110 変更)

ただし、この2例では *jou* (<*jaan* 「与える」) が第3不定詞 (命令形不定詞) ではなく、命令形であると解釈することもできる。つまり、「いちばん良いのは、君が彼に本をあげてくれ (それからぼくが彼に葉巻をあげるから)」、「私たちはピトさん、あなたに忠告します。お父さんに本をあげてください (それから私がピトに CD をあげますから)」の意味になる。とくに二つ目の用例では、*Pyt* が呼びかけ「ピトさん、あなたに」の意味でなければならない (Hoekstra 1997: 42)。さらに付け加えれば、上記の2例では *do* 「君」、*hy* 「彼」がなければ、厳密には命令形か第3不定詞 (命令形不定詞) かであいまいさが生じることになる。

このように、命令形と第3不定詞 (命令形不定詞) は同一とみなすことは

できないが、一方で、「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文の歴史的な発達のなごりを反映して、両者の共通性がわずかに残存しているとも考えられる。

(5) 「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文と「主文を伴う dat」

「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文は、時制や話法といった動詞定形の範疇を持たない不定形である第3不定詞（命令形不定詞）が右枠にとどまらずに、左枠に置かれる点で例外的である。同様の例外的現象を示すものに、「主文を伴う dat」（§ 67 (3)(b)）がある。つまり、動詞不定形では「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文が枠構造と語順にかんして例外的な現象を示し、動詞定形（＝定動詞）では「主文を伴う dat」がこの点にかんして例外的な現象を示す。両者は機能的には従属文としての性格を持ちながら、語順的には主文としての性格を示す。「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文の en と「主文を伴う dat」はともに左枠には位置せず、枠構造の制約に抵触せずに、動詞が左枠に現われることを許す統語的な性質を共有していると考えられる（De Haan 1983, Hoekstra 1997: 30-46）。

この点での両者の共通性は取り出し（エ. extraction）の可否にも現われている。「従属文を伴う dat」と「(om…) te-第2不定詞句」では取り出しが可能だが、「主文を伴う dat」と「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文では取り出しは不可能である。

① 従属文を伴う dat：取り出し可

Hokker krante_i sizze jo [dat er ____] lêze wol? 「あなたは彼がどの新聞を読みたがっている言うのですか」（Hoekstra 1997: 44 変更）

主文を伴う dat：取り出し不可

**Hokker krante_i sizze jo [dat er wol ____] lêze?* 「同上」（ib. 44 変更）

② (om…) te-第2不定詞句：取り出し可

Hokker krante_i binne jo fan doel [om ____] te lêzen? 「あなたはどの新聞を読むつもりですか」（Hoekstra 1997: 44 変更）

「en+第3不定詞（命令形不定詞）」構文：取り出し不可

**Hokker krante_i binne jo fan doel [en lê_s ____]?* 「同上」

Hoekstra (1997: 30-46) は、西フリジア語では「動詞第2位」(V2, エ. verb second)の現象は「定形性」(オ. finietheid)とは別に扱う必要があり、英語を除くゲルマン語でもその必要性があると指摘している。「定形」, すなわち現在形・過去形で現われる定動詞を含む主文は「時制」と「一致」を示し、定動詞は「第2位」の語順を占めるが、これはあくまで一般的、つまり、無標の場合である。一方、「時制」はなくても「一致」を示して「第2位」の語順を占める動詞の語形がある。それが西フリジア語(そしてオランダ語)の「命令形」であり、これは「第2位」の語順として有標の場合である。これに加えて、西フリジア語の「en+第3不定詞(命令形不定詞)」構文(IPI-構文)はさらに有標であり、ここでは動詞が「時制」も「一致」も示さず、しかも「動詞第2位」の語順を占める(Hoekstra (1997: 30-46)によれば、空範疇原理(ECP)の条件を満たすために移動する)。つまり、ゲルマン語の「動詞第2位」は「定形第2位」である必要はなく、「定形非対称性」(オ. finietheidsasymmetrie)は成り立たないことになる。

Hoekstra (1997: 30-46) は西フリジア語のデータをゲルマン語比較統語論の基本概念に反映させたきわめて興味深い考察である。ただし、西フリジア語の「命令形」が「命令」という明確な話法(エ. mood)の意味を持つ理由についての考察が必要と思われる。「屈折機能範疇(I)」に「時制」と「一致」を設定するだけでは、命令形の「命令」という話法的な意味は統語的に認可されない。それにはゲルマン語における屈折機能範疇(I)の体系的な考察が必要と考えられる。

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

- De Haan, Germen. 1986. "Frysk prate en praten". *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 2. 1-11.
- De Haan, Germen. 1987b. "De en+ympertyf". Yn: Dyk/Hoekstra. 24-31.
- De Haan, Germen. J. 1992. "The verbal complex in Frisian". *Us Wurk* 41. 59-92.
- De Haan, Germen. J. 1993. "The third construction in Frisian". *Dialektsyntax. Linguistische Berichte. Sonderheft* 5/1993. 161-179.
- De Haan Germen/Weerman, Fred. 1986. "Finiteness and verb fronting in Frisian". In: Haider /Prinzhorn. (eds.). *Verb second phenomena in Germanic languages*. Dordrecht/Riverton. Foris. 77-110.
- De Waart, A. A. J. 1971. "Constructies met en+ "imperatiefzin" in het moderne Westerlauwerse Fries". *Stúdzjekonferinsje Frysk*. Ljouwert. 3-31.
- Ebert, Karen H. 1989. "Aspektmarkierung im Fering (Nordfriesisch) und verwandten

- Sprachen". In: Abraham /Jansen. (Hrsg.). 293-322.
- Ebert, Karen. H. /Hoekstra, Jarich. 1996. "The progressive in West Frisian and North Frisian — Similarities and areal differences". In: Petersen /Nielsen. (Hrsg.). 81-101.
- Hoekema, Teake. 1958. "In spesifyk Frysk syntagme". *Us Wurk* 7. 17-23.
- Hoekema, Teake. 1959. "In spesifyk Frysk syntagme". *Us Wurk* 8. 85-88.
- Hoekema, Teake. 1963/64. "Drie syntagmen uit oostelijk Friesland". *Driemaandelijkse Bladen*. 15/16. 72-76.
- Hoekstra, Jarich. 1999. "Frysk *fernimme* as in a.c.i.-tiidwurd". *Us Wurk* 48. 10-18.
- Karsten, G. 1946. "Een Fries-Vlaamse constructie met 'om'". *It Beaken* 8. 48-50.
- Kern, J. H. 1912. *De met het Participium Praeteriti omschreven Werkwoordsvormen in 't Nederlands*. Amsterdam.
- Tamminga, D. A. 1959. "Fan sinnen en bysinnen". Yn: *Pompeblêden* 30. 85-88.
- Van der Meer, Geart. 1975. "The imperativus pro infinitivo reconsidered". *Us Wurk* 24. 19-34.
- Visser, Willem. 1989b. "Ta de nominale ynfinityf yn it Frysk". *Philologia Frisica* 1988. Ljouwert. Fryske Akademy. 51-74.

* 本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

- 「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1. 第 85 号. 1995. 37-81)
- 「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2. 第 86 号. 1995. 43-111)
- 「西フリジア語の文法構造 — 冠詞, 名詞, 形容詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-1. 第 88 号. 1996. 21-81)
- 「西フリジア語の文法構造 — 代名詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-2. 第 89 号. 1997. 79-176)
- 「西フリジア語の文法構造 — 数詞, 副詞, der —」(北海道大学文学部紀要 45-3. 第 90 号. 1997. 171-246)
- 「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 46-1. 第 91 号. 1997. 23-62)
- 「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 46-2. 第 92 号. 1998. 41-64)
- 「西フリジア語の文法構造 — 接続詞 —」(北海道大学文学部紀要 46-3. 第 93 号. 1998. 65-121)
- 「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 47-2. 第 95 号. 1998. 21-97)
- 「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 47-3. 第 96 号. 1998.

53-72)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (3) —」(北海道大学文学部紀要 47-4, 第 97 号, 1999, 89-124)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (4) —」(北海道大学文学部紀要 48-1, 第 98 号, 1999, 21-55)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (5) —」(北海道大学文学研究科紀要 101 号, 2000, 93-129)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (6) —」(北海道大学文学研究科紀要 108 号, 2002, 23-100)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (7) —」(北海道大学文学研究科紀要 111 号, 2003, 51-94)

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3, 第 87 号, 1996, 41-107)

*本稿は平成 15 年度文部科学省・学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

研究課題：「西フリジア語文法記述のための最終的研究——ゲルマン語類型論の構築に向けて」。基盤研究(C)(2)。課題番号 14510599 (研究代表者 北海道大学大学院文学研究科教授 清水 誠)